
ゾンビパニック！

ネーミングセンスなしたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゾンビパニック！

【Nコード】

N2821W

【作者名】

ネーミングセンスなしたろう

【あらすじ】

我ながらありきたりのストーリーだな……

だが急に連載打ち切りとかするつもりはない！！！！

文字数ない分は話数で補う予定

早くも高校生になり、半年がすぎた……学園生活にも慣れてきて、友達もできた……か？……まあ充実はしている毎日が続いているが、今日、全てが崩れてしまった……

発端はいつも通り授業にでて、ただ無心に黒板の字をノートに写していた時だった。

「# \$ % # @ ! ! # ! & a m p ; ! ! ! ! !」

とんでもない叫びが聞こえた。いつものようにこの教室の窓の方をランニングのコースにしている部活の連中が騒いでいると思ったが・

。。。

そのときから俺の人生を変える、もっとも最悪のできごとが起きた。

<http://ncode.syosetu.com/n4866y/>

英語 vol 1

はじまり（前書き）

初めての投稿です。オリジナルかつリアルになるように頑張ります。政治とか詳しくないので政府の対策が変になるところがあったりしたら教えてください。どのようになればいいかも含めおねがいします。

十五歳以下の方は控えてもらいたいです。

止めはしませんが。グロくなるかもしれません。

はじまり

早くも高校生になり、半年がすぎた・・・学園生活にも慣れてきて、友達もできた・・・か？・・・まあ充実はしている毎日が続いていたが、今日、全てが崩れてしまった・・・。

いつものように、朝、スクールバスの来る三十分前にバス停に行き、朝のテストに備えて、勉強をする。俺にとっては普通の日常であった。

発端はいつも通り授業にでて、ただ無心に黒板の字をノートに写していた時だった。

「#\$%#@!!#!& ;!!!」

とんでもない叫びが聞こえた。いつものようにこの教室の窓の方をランニングのコースにしている部活の連中が騒いでいると思ったが・・・。

そのときから俺の人生を変える、もっとも最悪のできごとが起きた。

はじまり（後書き）

毎日忙しいのでたいてい週末に投稿します
改善点の指摘などよろしくおねがいます。

脱出！…！とっつ (前書き)

始まりからの続きです。読みずらい時は感想にて改善策おねがいます。

今の所はノープランです。てへっ！

誤字？ドジだから仕方ないけど・・・気が向いたら直しますよ。

脱出！！とっつ

外が騒がしくなり始めて数分が経過し、先生も不機嫌になり始め、窓にちかずいた。

そのままカーテンを開いた・・・先生の動きが止まる・・・何があった？

俺が「先生、どうかしましたか？」と聞いてみると・・・先生は突然、隣の職員室に駆け込み電話でなにやら騒ぎ始めた・・・。

いつもは不動心なイメージの先生だがどうしたのか？

後ろの奴が俺に話しかける。

「おい、中村・・・先生どうしたんだろうな？」

こいつの名前はく横沢次郎>俺が一方的？に友達だと思っている奴だ。

「知るか、外に何かあったんじゃないかね？」と返す・・・（何で一番前の窓際は顔色わるいんだ？）と思う。

「じゃ、見てみるか・・・」そう言って立ち上がり、窓を開いた。

「うわっつ！！！」と横沢が叫ぶ。何かと立ち上がると生臭いにおいが鼻をついた

窓際の人はカーテンを開けた。

そこは日常の風景ではなかった・・・。

見慣れた風景はあたり一面真っ赤でバットを持った生徒と全身ボロボロの奴が戦闘を繰り広げていた。

辺りには人が倒れていた、何人かの心優しい人が慌てて手当てにむかう。

しかし優勢に見えたバットの男が押され始めている・・・。ボロボロの方は先ほどから頭部に攻撃は受けてはいないが何度倒れても、何事もなかったように立ち上がる。

これは・・・もしか・・・俺の中でいやな予感がする。

バット男が噛み付かれた！！！！

なんて顎の力だ!!!バットの男の腕が持つてかれている。
手当てに向かった者がそいつに近ずき大丈夫?と声をかける。
その瞬間、近づいた者が噛み付かれる。そしてバットの男と辺りの
けが人が立ち上がり窓に近づいてきた。
横沢、窓を閉める。

俺は通学リュックの中身を辺りに撒き散らす。
変な目で見られるが気にしない。そしてリュックからマグライト（
ベルトに付けられるケース付）を装着!!

大地震以来常に持ち歩いているのだ!!!そしてサンダルからロッ
カーにある運動靴を取り出して履く。クラスの皆が廊下に逃げてい
く。俺は掃除ロッカーから箒を取り出して、先っぽを取る、横沢も
同じ様にしてリュックを空ける（マグライトはない）だがそんなこ
とはお構いなしに俺は窓から外に出る。さっきの奴らは昇降口にむ
かったようだ・・・悲鳴が聞こえる。

奴らと出会ったらどうするつもりだったんだか・・・。
クリア!!!!!!

奴らはいない。俺は家庭科室に向かい包丁を3つリュックに入れて、
1つをベルトに挟み、さっきの箒にガムテープ・輪ゴム（両方とも
教室で回収）で付ける。

槍なの?それとも薙刀か?が完成窓を開けて外のである。
さっそく奴らが現れた!!

だがやはり動きが遅い!!!心臓を刺すが普通に動く・・・。

「力もつよっ!!!」思わず弱音を吐いてしまった。

一旦心臓から抜いて距離をとる。

「ここがだめなら頭じゃ!!!」

「うおりいやー!!!!!!」変な叫びを上げた一突き!!!頭に当たら
ず空振り!!!!

パニックになりながらもそのまま距離をとって・・・からの
一振り!!!!これは頭に当たる・・・化け物はあっさり倒れる・・・。

やってしまった……が……あまり気にはするつもりはない・

……これはよくあるゾンビの設定ではないか……!……!……!と思いが
らとりあえず家に向かうため歩き始める……。

T O b e c o n t i n u e 。

脱出！……とっ (後書き)

感想とかよろしくおねがいます。

できればキャラの名前を考えて欲しいです。

みんなで早退しよーぜ！ー！！！！（前書き）

勢いで書いているがさっそく減速気味です

感想をお願いします

すごい糧になりそうです

みんなで早退しよーぜ！！！！

さて、学校から難なく脱出できたがどうしたものかと考えながら歩きだすと急に呼び止められた。

さつきから付けられて横沢だとおもったから無視してたけど・・・あれ？横沢ついてきてないなどどこに行った？

それはさておき「一応聞きますが進学の方ですよね？」と聞かれたのでとりあえず「はい」とだけ答えておいた。

ちなみにまだ振り返っていない。

声からして女か？と思って振り返れば・・・「あつ・・・」思わず呟いた前にいたのはクラスメイトでスクールバスが同じ人たちだった。

「あつなんだ、中村じゃん」一人が言った

俺はラフな感じで「よく生き残ったね。昇降口の方は大変だったろ？」話しかけてきた方の女子に言う

「・・・」何も返さないな・・・余程悲惨な光景だったのだからか？

「悪いな・・・嫌なこと聞いて・・・」一応、俺は謝る。

あつちなみに相手は3人一人が男で話掛けてきたのが千咲ちあきでもう一人の女子が美月みつき男が森浩もりこうじ二だ

森に話しかける。「とりあえず自宅に帰って家族の安否確認をしたいもしこの事件？の規模が大きかったら手遅れだと思うが」

「ああそうだな」森も同意してくれた

全員家遠いけど方向同じだし一緒に行くかと誘ってくれた・・・ありがたい。もちろん一緒に行くことにした。

俺は一応紳士だ・・・だからカツコつけて

「女子を囲むようにしていくぞ」と提案した

そのフォームでいくことになった。そのときは女がどれ程強いかわ

かってなかった・・・

次は食料に関する問題が挙げられたので近くにホームセンターがあるのでそこにいくことになった。

俺は前からこのような事態に備えて、目をつけていたのだ。

歩き始めて数分後・・・

気が付いたのは森だ

「前方に居るのはさっきの化け物か？」

俺はリュックを下ろして中から包丁を取り出し抜いて刃を出す。ベルトのはまだ使わない

ちよつど奴らの背後の方に俺らがいる。

片目だけのバードウォッチングに使うような望遠鏡を取り出して見てわかった

「敵は十以上けどあまり多くないな・・・」

「女子は待機周りへの警戒を怠るな」といいながらリュックの包丁を渡しておく

森はバットを構えた・・・よく持ってきたな 部室は校門の反対側にある

「気をつけてね」「無理はしないで」と二人は言った

まずゆっくり静かに近ずき、俺は包丁を化け物の頭に突き刺す。

躊躇なく殺す・・・

同時に森もバットを振り下ろす。

頭から血が吹き出る返り血を気にせず包丁を頭から抜いて投擲！！

！槍を構える、前方で何か倒れた

うまく刺さったようだ。

そのまま横なぎに払い暴れる。切れなくなってきたので基本は叩いて倒す戦法に切り替える・・・

潰して距離を置いて一気に近づくの連続で倒していったそして最後の奴の頭に突きして終了！！

俺は言う「殲滅かなりよう！！」「やった、かっこよく言うことができた！！！！

「ヒヤッハーやったな」と森と喜び合う。

喜んだのもつかの間で女子の方に2体ちかずいている。千咲が包丁を構えているが心もとない

すぐに近づいて森と二人で殲滅

「だいじょうぶか？」と聞いたら震えていた

美月は「だ・大丈夫」と言っていた。

見た感じ、顔色が大丈夫ではなさそうだな・・・

精神的にちよっときついようだ・・・当然だが

「彼女たちには落ち着く時間が必要そうだね」と森と話し合い（森のほうも顔色がよろしくない）

とにかく移動して休もうかという提案にみんな賛成して先を急ぐ

そして化け物とも会うことがなく、難なくホームセンターについた。

特にバリケードもないし人はいないようだ・・・

そして俺らは入っていった。

店内は静かだ電気はついている。停電はしていないようだな・・・

俺は「視野を広くとれ、何か見つけたら教えて」と皆に指示をした。

それに皆、うなづく。

ここで森が「二つに手分けするか」と提案した。

俺は少し不安で皆も同じようだが

全員賛成した。

早く終わらせたいし・・・ね？

team Aは俺と美月さん、team Bは森と千咲

これから探索が始まる・・・

みんなで早退しよーぜ！！！！！（後書き）

千咲、美月の下の名前と中村の名前を誰か考えて頂きたい
お願いします

また変な所の指摘もお願いします。

まだ一話の長さ短いけど伸ばしていきます！！！！

略奪は犯罪？・・・聞こえないなあ？（前書き）

今回、主人公がやることは同じ状況になった時、以外ゲフンゲフン
どんな時でも真似してはいけません！！！！
私とのお約束！！！！

略奪は犯罪？・・・聞こえないなあ？

さて探索を始めて10分あと1時間だ。

えっ時間が中途半端？そこはつつこまないで！！

「あんたさつきから何をいつてるの？」と美月が問う。

「聞こえてたの！？」ついそう言ってしまった。

「あっこれ使えそう」と言っ。金属バットを指差している。

「無視された・・・」嘘泣きしながら言っ。見たがまた無視そして急に手渡された。

「ちよつとふつてみて」まったく相手にされない

「おっ良いじゃん」つい言っ。しまった。

「お前も持つとけ予備も必要だろうしね」そんな対話のあと園芸のコーナーへ移動

いい感じの大きなスコップ発見！！カートにつっこむ

「あとから選別するからいいよな」といったら、

「はあ、なんか使わずらそうじゃね」と言われて却下された。

なんか俺への当たり方キツイわ

そのまま館内を見回り、カン詰め、水分も手に入れ（一週間は持つね）、寝袋×4、ライター、ロウソウ、花火、チャッカマン、アルコール、ピアノ線、トーチランプ（普通おいてあるのか？作者はどんなものか知らない）、クリップパーネジ（束にとがってるほうが上になるようになってるから畏つくるため）、ロープ、ナイフ、鉄パイプ、牛刀、ジャージもあった。

合流後、着替えて品物チェック！！

「けっこつ残つてたね」千咲が言っ。

「まだ略奪はおきてないっばいね」と森が言っ

「てか食料しか持つて来てないじゃん！！」俺が言っ。

「ふひひ」森と千咲が変に笑っ。

とりあえず森は武器あるからいいが、千咲は使いやすいのはないか

ら鉄パイプを渡しておく

「とにかく休め、俺見張っておくから」

「じゃっ遠慮なく」「ありがとね」「どうも」とそれぞれいって寝袋で寝始めた。

とにかくくゆっくり休めてそうだなによりだ……。

こうして見張りをしているとSPとかにでもなった気分になる。

「寝てるしな……」

「マルチ無事就寝中、警護を続行します。」「こんな感じに報告するのかな？」

「何やってんの?」「またしても美月に言われた。」

「ええつとSP?」

「はあばっかじゃないの?」

うあっ心がいたいよ」

と言った感じで三人は休んだ

略奪は犯罪？・・・聞こえないなあ？（後書き）

美月の予定してた性格より随分かわってしまった！！

もつと人の事を考える？いや誰もいないじゃん

皆が起き始めたのは三時になってからだ……。

「どんだけ寝てんだよ今の状況分かってるのか？」俺が問う

「うるさいだまれ」美月だ。

「起こせばよかつたろ」森だ。

「ぐぐぐ、確かにそのとおりだ」俺は口喧嘩が弱いな……。

「まあまあ、見張りしといてくれたわけだし」千咲が言う。

「うん、やっぱり千咲はどっかの誰かとおおちが……ぐほう」

俺は頬を思いつき殴られた！！

「いたい、何すんの？」

「黙れ、一回お前喰われろ」もちろん下手人は美月だ。

「くそつ結構いいパンチじゃねーか。」と言ったのは俺で。絶対コイツさつき最前線で戦えたよ。

「ぐぼほう！何で？何も言っていないじゃん」また殴られた。

「口に出さなかつただけだろどうせ」と美月が言う。

こいつエスパーか？と思っていたら、こっちに頷いてきた。マジだったー！！

これ以上殴られたくはないので、さつさと移動を開始する。

こいつらが寝てる間しつかり荷物整理しといたのでまとめてある。

間違えなくうちの学校から化け物はかなり発生してるはずだから罠を張ることにした。

ピアノ線を道路に張る。

けっこう化け物が現れたりなどで時間がかかったがうまく設置できた。さらにいい感じで置けるネジをセットした。

これで少しは進行が止まればいいが……。

「絶対、無理だけどな（笑）」美月が言った。

とゆうかなんであんな戦闘能力が低いのにこんなにも大被害なんだ？という疑問が今更沸いてきた。

みんなに話すと結構悩んでいた。こいつらも気が付かなかったか・

「悩んでても仕方ないじゃん。とりあえず日が落ちる前に進めるだけ進もうか!!」美月だ。ふっ!!たまには良いこと言うじゃねーか!

「ぐあ!!!」まただまた殴りやがった。暴力率上がりすぎだろー!!!

「あれ?いない・・・置いてかれてるー!!!」
俺が周りを見ると、皆先に進んでいた。

「まってー!!!」

「ひどいよ」

「遅いんだよお前は!!!」森まで・・・。

「もつと周りを見なさい」天使の千咲まで・・・。

「ちっ」舌打ちしやがったよコイツー!!!

「なんだ・・・置いてかれてた方がみんなにはよかったのか・・・?」俺は聞いて見た・・・

俺以外の全員が急に構えた。

俺は「どうしたの?」と聞くが・・・。みんなは先を見たまま答え
ない。

そちらを見てみると・・・むっ!!!化け物か・・・一体だけだな

「よし、行ってくる。」俺はそう言う

バットを構えて走り出すいきなり頭部に一撃だ!

ガンッ!!!まともに食らったと思ったら・・・腕で防いでいる・・・

今までの奴とは違うのか?考えていると拳が飛んできたので慌てて
避ける。

距離をとる、が走って近づいてきた!!!まともにタックルを食らっ
てしまった。

そこへ「ばか!!!」と叫びながら千咲が左手に鉄パイプ、右手に
包丁を持って来た。

そして投擲！！かすっただけだが傷をつける事はできたようだ。
そこに森と千咲がバットと鉄パイプで殴るが効果はないようだ・・・。

そこで美月が俺の作った槍（包丁を牛刀に変えておいた）で頭部を突き刺すと化け物は苦しみだして美月に拳を向けようとした。俺は牛刀をベルトから抜いて構え、走る。

化け物は美月を殴ろうとする美月は恐怖で動かなくなっているようだし、森、千咲に足を払われて転ぶ、そこに俺が跳ぶ！！！そして全体重を乗せて牛刀を頭部に刺す。

化け物は血を噴出し起き上がらなくなった。

「見たか！？俺のフラインプレーー！！！」（どっかの特撮のブラックホールに吸い込まれた主人公風に）

「いや、手ごわかったね」俺がそう言うと美月にお前何もしてねーだろと言われた。

ひどいよ、助けたじゃないか・・・。

もっと人の事を考える？いや誰もいないじゃん（後書き）

だんだん主人公の扱いがひどくなってきてる……作者に近い状態ですwww

あの罫は後につながります。

—どんな生き物も進化する!!!

その後、俺らはさらに進んで。

今のこの空家を見つけたのだ。うん、やっと休めるぜ

「空家じゃないだろ」美月が言った

実は家の前で荷物が散乱して近くには元は子供だと思われる化け物が死んでいてその横にこの家の主と思われる人が自害していたのだ。もう日も暮れそうだったから火葬をして、鍵を回収してこのように使わせてもらっているのだ。

電気・水道・その他はまだ使えた。

とりあえず今はまたteam A・Bに分かれて行動中だ。中に化け物はいなかったので安心だ。一応窓もガムテープなどで少しでも開きづらくしている。

俺らは見張り情報収集だ。

まあほとんどNEWSを見ているだけである。

こうして安心感を得られたことにより人を化け物になっているとはいえ、殺したという事実が今更だが心を痛めた。まだまだ自分が甘いことが突きつけられる。

「あんな状況では殺すか逃げるしかないのにむしろ良くやった」めずらしく美月からこのようなセリフを頂いた。性格はブスカもしれないが・・・顔は問題ないので普通にうれしうぎゃ!!!」殴られた・・・

一日でどんだけ殴られてるんだか・・・

でTVの話になるが今、我々がいる東北の被害がすこし大きいらしいが恐らく前に起きた大震災の復興もまだのなかきたり、自衛隊が被災地へ銃を持たずに行くからそこを一人また一人と少しずつ数を増やし、さっきの打撃に強い奴が居て、太刀打ちができなかったのだらうか・・・?

とりあえずやばい状況である。

それらは某ゲームとかと同じようにウイルスからであると公表されていた・・・

感染は空気感染はまずないらしい・・・とても助かる。

ただし嘔み付かれると感染してしまう・・・

奴らの持つ唾液が傷口などから入ってもアウトだということだ
肌に血が付いたりしても問題ないらしい。

「飯だぁ！！！！」森が叫んだ・・・。

team Bは飯の準備をしていた。

出て行こうとしたとき、亜種の情報が入ったようだ・・・それを見ると

数は少ないが、知能をすこし持ち、打撃、斬撃どちらか一方の攻撃が効かなくなっているようだ。

一瞥して階段をおりてリビングに向かう

わずかの間だけ地獄を忘れてもいいよな・・・と思う。

そして風呂に入り、布団で寝ようとしたときに決めた。

自分がみんなを守り、最後まで絶対にあきらめない。

二日目 早朝（前書き）

何で高校生がほぼ無傷で生きのびているのに
自衛隊は全滅？

・・・無理があるような気がする
イタキヤラ登場！！！！

二日目 早朝

朝、五時に起きた、俺の習慣で学校のバスに乗るために早く起きるのだ……。

さっそく軽く装備を整え、一階に降りる、誰も起きていない……。

「ひまだな」TVを見ていたが昨日と内容は同じである。

周りを軽く見てくることにした。もちろん書置きを残して、鍵を掛けて出た。

半年前が懐かしい地震の時は朝早くから出かけて食料調達とかしたものだ。

外には化け物はいなかった。

うむ、今日は晴れそうだな〜とかと歩いているとカチリと音がして硬い物が頭に突きつけられた。

そいつが言った「手を上げる」

おとなしくしたがう、そいつが銃を見せ付けるように正面に出てきて、銃を向ける、そして言う。

「食料を出せ」

格好を見るとカウボーイだふと銃を見るとなぜかM9・・・ベレッツタだ……。

はあ？なんでカウボーイがM9？そこ回転式のやつの方があうだろ・・・まず格好考えるよ〜それによ〜これ、アメリカ軍でたしか採用されてるやつだしよ！！！！日本で手に入るかー！！！！えっあつたらよ俺が欲しいよ〜

だから本物じゃないジャン！！！！ぜったいこれ俺も持つてる奴だし！！！！！！

イカリテヤがるぜ！！！！手を上げてるのハズカシー！！こいつう

(イカリメーター増幅中)

とゆーか行動に出る！！

まず銃口をそらしてハンマー押さえて、そこから相手に銃口を向けるようにして奪い取る。

そいつの眼球にBB弾をぶち込む!!! そいつは騒ぐが気にせずに殴りかかる。

「あべしつなんつてえイタイちよっふざけたd・・・」

あっけなくぼろぼろにされたそいつの足を最後に牛刀で傷つけ、その場を後にする。

「ぐあ、なにを・・・まっつて!!!」

まだなんか言っただけだな!!!

そして記憶を奥底に封じこめる。・・・最悪だ!!! 知られたくない!!! ハズい!!!

しかしこのような連中も増えてくるのか〜とも思った。

うん!!! 人間同士は避けたいところだな。

人はなぜこつも争うことになるのか・・・まあ俺は関係ないけどな昨日のとおり絶対に奴らを守り抜いてやる!!!!

さらに硬く決意してコンビニであまっていた食料をとり、帰る。

バかなやつめ、こつちくりや食料、無傷でよかったのにな・・・

。ほんとにイカレタやつだったな・・・。

そして、帰ると・・・

「うお〜帰ったよ〜飯ゲットう」

「どこいったたんじゃー!!!」

バキッ!!! 「グアハ」

「ちよつなにすんだ!!!」 美月に怒鳴るが、ガン!!!

「ぎゃっ」 今度は箸の柄だ。

「千咲まで何をする!!!!」

「うっさいだまれ!!!! こつちがどれほど心配したか・・・コ
ンヤロー」

それから、しばらく拷問が続いた・・・おお、森なんだ、たすけてくれるのk・・・

「こんのバカヤロー」

ああ、今度は説教か・・・。
それから、しばらく説教された・・・
それからやっと飯を食べられた・・・

二日目（前書き）

はい、文字数の少なさ何とかしたいですね・・・。
がんばります・・・たぶん誰も読んでないけどね!!!
あきらめぬ!!!

二日目

俺は飯を食い終わり皆を集める・・・昨日、俺が眠ってしまって、話し合いも何もできなかったからだ。

「さつきはすまなかつた」まずこう言う

「気にすんな、こつちもふざけ半分だったしね」と口をそろえて言われるがいよいよ

ふざけ半分でボコボコにされて、説教までされるのは冗談ですむかよ！！とおもつたら。

急に美月がかすかに笑う、こいつ本当に心読めるんだなと思う。すごい・・・

「では今後について話し合おうと思う・・・」俺が進める

「ここにいるのは自宅に戻るのが目的ということでもいいのか？」そこで森が反論

「このまま、警察署に行つて避難はしないのか？」

俺が言う

「そうしたいのなら、道の途中だし」

「なぜ自宅にこだわるの？」千咲が聞いてきた

「生き残るのはいいが・・・自分だけ生き残つても意味ないよーな気がするからね・・・」俺は過去を振り返りながら言う。

「深いな・・・けど確かにそうはおもっけど・・・」千咲が言う。

「だから自由だ！！ここで避難するという選択をされても無事に届ける・・・」俺が千咲の言葉をさえぎつて言う。

「もう一回言うよ・・・全員、自宅に戻るか？」俺がもう一度聞く。

「ああ、そうだな・・・大切なもの失くして生きる意味なんてなくなるよな・・・」森が言う。

みんなが頷く、帰るといふ選択肢でいいようだ・・・

「よし、注意だが奴らの感染条件は奴らの唾液が傷口などから体内に入ると・・・感染だ」

「それで、もしこのような事態が起きたら、まあ刻だし・・・反感を買うと思うけどさあ・・・」

「ザツクリ、殺すので!!!」

千咲は「あんた、何いつてんの!？」と俺に向かって叫ぶ。

ここで森も口を挟み何か言うが無視をして、俺は言う

「だから・・・言いたいのは・・・絶対に噛まれるな!!!!!!」

「見ただろっ？戦っただろ!？奴等は肉体が滅びるまで動き、人を襲う・・・致命傷を負っていてもだ」

俺が言う。

ヒュ〜と美月がはやし立てるが俺は念を押す

「絶対にだ、本当は最後まで諦めたくないが仕方ない」

皆、分かってくれたようだ。

「では一時間後の九時に出発だ!!!」

一同、準備に取り掛かった。

俺は昨日、牛刀を洗い忘れていたから、血を落とす作業をする。

血が付くと切れ味落ちちゃうからね。

そして、用を済ませたり何やりし終わると一時間があったという間に経過して、出発する時間になった。

直前に、一声かける「準備はいいか?」カウントでいくぞ!!!」

「3」

「2」

「1」

G O G O ! ! ! ! !

扉を開けて周りを確認、朝と変わらずに誰もいないようだ。

鍵を閉めるそして庭に鍵を投げ込む。

そして出発

「そっういえば、それ何?」千咲が美月の背中にある長い袋を指差し

て聞くが

「内緒」と教えてくれない……

そんな感じで会話をして畑の景色の道を進むと道の進行方向に一体、奴がいる。

周りにも結構いるが、進行方向にいなければ特に邪魔ではないので始末しなかったが後悔することになる。

まず4人で袋にして倒したら両脇の横の草の中から2体出てくる。びっくりしたが、片方がまっすぐ美月を狙おうとしていたのでバツトにその爪の攻撃を防ぐ

相手の力の方が強くて押されるが俺の頭の横を何か通る。

その瞬間血が吹き出る。

後ろを振り返ると、美月が竹やりを構えていた。

そちらに視線を向けていると、もう一体のほうを森が抑えていて、千咲がパイプで殴っているが、効果はないようだ。

打撃に強いほうだが千咲は気づいていないようだ、牛刀を抜き、刺そうとするがまた横を風が切る。そしてまた血が吹き出る。

「すげーな」つい声に出してしまう。

本人はうれしそうだ、そのとき後ろからまた一體現れた、美月を押して敵の攻撃から避けさせるそして頭に横に振るように叩きつける。そいつは崩れるが周りのやつ等が集まり始めていた。

「動きは遅い!!! 距離をとる!!!」

そして走る、離れたところでロケット花火をセットする。

そして森と千咲に点火を任せる。

走る準備をする。ん？もちろん殲滅のためだ!!!

やっぱ倒さないと邪魔だし、間違えなく隠れたりとか賢くなってきた。これ以上の進化は止めたい。

という理由だ。

発射されたと同時に走る、運よくゾンビのいるところで爆ぜる。

食らってるかはわからないが実験のつもりだったがほとんど倒れていて、仕事はすくなかった。

そして戻る。

「いや〜二人とも強いね」森が言う

「何か昔やってたの？」と千咲が聞いてくる

「俺は誕生日に貰った木刀で素振りとネットで型を調べた」俺が言う

「私は槍術を一時期やってたのやっぱこっちがじっくりくるわ〜」

美月が言う

「とにかく、頼もしいよあんたら・・・」森が言う

そしてまた進む・・・

二日目（後書き）

キャラの口調がさだまらないです

帰ってきた横沢！！！！（前書き）

今回は生かしておいた横沢を出そうと思います！！！！
そしてあの男も・・・・

帰ってきた横沢!!!!!!

俺は横沢・・・なんかすっかり忘れられているような気がする・・・。

だが俺の旅も始まるぜ!!!!!!

いつもの恐怖の古典の時間のことだった・・・

そこに大量の人型の化け物が学校に侵入、強くはないが数で圧倒されて・・・

多くは噛み付かれて、仲間入りを果たし、

わずかな生き残りも囲まれてはやられてを繰り返した。

つまりは奴らの数は増えるのみでこっちが圧倒的に不利になっていく負の連鎖の繰り返しだ

さてここは昇降口、俺は中村とは違い、体育の靴をロッカーに常に入れたりせず

なぜか持ち帰っているので昇降口から外靴を持ってくる必要があったその間にも中村は既に窓から出ていた・・・俺をまつ気はないようだ

そしてここは昇降口、とても混んでいる。

先の方では悲鳴が聞こえてくる。誰も寡などで戦おうとする者はいない

だから先の奴等はやられているハズだ。

靴を取ると、中村にならって外に出る。

そしてさつき、窓の外でやられていた奴からバットを奪い、走る。

「きゃー!!!!!!」

だがそのとき女性の悲鳴が聞こえた・・・

そのとき頭から

女性悲鳴!!ピンチ!!助ける!!俺モテモテ!!!!!!

「うおー！！！！待ってる今、助けるぞ！！！！」

そう言つて、プレハブ棟の隣にある、本館に入る
たしか声が聞こえたのは二階だ

「はははははははは！！！！！！」

階段を二段飛ばしで進んでいく

そして2年3組の教室に扉を突き破り侵入！！！！

「大丈夫か！！！！」

「助けて！！！！」生徒が叫ぶ

「うおおおおお！！！！」

囲んでいた3対をバットで殴り倒す

「ありがとうございます、とってもおつよいのですね！！！！」

「いや、それほどありますね」

「おいっ加奈子無事か！！！！？」別の男が椅子を構えて現れる

「あつ広！！！！」と言い、走って行ってしまった・・・

「ああっそんな」

膝をついてしまった。

二人がお礼を言ってくるがまったく聞かなかった

そして二人は去ってしまった・・・

「ちくしょー！！！！！！」叫ぶそして走り出す！！！！

そして学校を飛び出す！！！！

走ること十分

「もうすぐ自宅だ！！！！」

コイツは一人暮らしであり、アパートに住んでいる。

アパートが見えてきたと思つたらまた・・・

「きゃー！！！！！！！！」

そしてまた、目に光が宿る！！！！！！

「今、お助けしますよー！！！！！！！！」

走る、走る、匂いと悲鳴を頼りにいく、ふむ

近くのコンビニに到達した

どうやらトイレの前に奴らが出て、出れないようだ
またしても戦闘力を増幅させて、倒す。

が出てきたのは・・・顔面がひどく、スタイルも団子女だったし
かも・・・

「ありがとう（ハート）お礼のキッス」

「ぐぎゃー！！！！助けてー！」

ぶちゅーぶちゅー・・・

やられた、その後その場から逃げ出したが・・・

自宅で立ち直るまで時間がかかり・・・

目覚めたときにはキスの前後の記憶を失くしていた・・・

倒れてから4日目・・・

ハッ「ここは・・・自宅か・・・今はあつ遅刻だ！！！！！」

「あれ！？バックの中にも机にも用意がない！！！！！」

とにかくいくぞ！！！！・・・すっかり失くしているようだ・・・

・・・

この後の話はまた別の機会に・・・

帰ってきた横沢！！！！（後書き）

どうでした？

感想、マジでおねがいます！！！！！！

結局・・・出せなかった・・・

大決戦!!! (前書き)

はい、とにかく十話ですね・・・
別の小説と比べると文字数がすごく少ない・・・
コツが何かあるのですかね？
とにかく、中村に戻りますね

大決戦!!!

「さっきの花火攻撃から見ると種類関係なく火の攻撃でいけるっばいな・・・」千咲が言う

「そうだな・・・楽しもうと思つて、持って来たのに・・・」俺が言う

「はあ？この作戦の為ではなかったのか？この馬鹿!!!」美月がいう

ベシツ「イタツ勘弁してくれ・・・」

「一戦交えたあとで疲労の上、そこさつき打っちゃって青くなつてんのに・・・」

「ねらつたもの・・・」

「はあ？何でわかんの？服で隠れてるじゃない」俺と美月以外が聞き返すが・・・俺は知っている

こいつ、こんな風に読むこともできんのかー

「てか中村もさあ・・・なんで、リーダーっぽいのに・・・ごう・・・ダメなの・・・」

ああ、何か説教始まつた・・・何で？悪いこと何もしてないじゃん・・・

30分・・・ホント、化け物出てこないのがすごいと思うくらい時間過ぎたよ・・・

まとめると、千咲は普段から女性にたいしてほとんど下からの姿勢でいるのが気に入らなかつたらしい

「おつかれー」森が話しかけてくる・・・気楽でいいよなあ

「お前、一回あの説教受けて見るしかもいつ奴等に襲われるかもわからないしよ・・・」俺はそう返すと

「まあまあ、とにかく急ごうか・・・割と早く進んでるから問題ないけど・・・」森が言う

「よしっ悪ぶざけもここまでだ!!!いくぞ!!!」俺が皆に喝を

入れるように言う

「ラジャー！！！」（ウルト0マンダイ0見ながら書いたからやりたくなつた・・・）

また、進みだすと脇から奴等がたくさん出てきた

「敵襲！！！」我ながらこの様なセリフを言ったりして随分慣れてきたと思う・・・

まず俺と美月が前の方のやつ等を潰し、転ばせたりしたところに干咲と森が止めを刺す

がそもも上手くはいかなくなってくる・・・

俺が機械的に転ばせようとした時になんと跳んで足払いを避けた！！

俺がビックリした所を爪で引っかいてきた！！

よく見ると、こいつら爪が結構、発達していた

第一波は食らってしまった

「ぐっ」

お返しとばかりに重い一撃を頭に食らわせる

「大丈夫か！？」森が叫ぶ

「ああ！かすり傷だ！！感染もしないはずだが一応警戒しとけよ！

！！」

「ラジャー！！！」皆が答える

そのまま、戦闘に戻る

その後はガチンコ対決の始まりだ

だがやはり、こいつらは弱い・・・

怪力を上手く生かしていない

さつきは食らってしまったが今度はかすりもせず倒していったが数は多いのでそれなりに疲れてきた・・・

だが・・・数は減っていないように思える

「どうということだよ！？」森が喚く

「数が多い・・・」千咲も辛そうに言う

「これが数の力か・・・」美月が呟く

俺が言う「確かに・・・俺たちが戦ってた奴らはまだ序の口だったってことだ」

「だがな」呟くように言う

「相手が誰だろうが俺らには関係ない！！！」

「一気に決めるぞ！！！」と叫んで俺は走り敵の中に入る

先頭の奴の頭を叩き割り、切り上げるように次の奴に殴りかかる相手の頭に向かって、横なぎに殴り、その勢いのまま、後ろの奴の頭を砕く

そして前方の奴に体当たりをする

そいつから崩れ始める・・・向こうでは頑張っているが辛そうだ・・・

アルコールをぶちまけて、マッチで火を放ち、援護に向かう

牛刀を投げる、まさに森に噛み付こうとしていた奴に当たる、わずかにひるんだ隙に近づいて、バットで殴りかかる

森は礼を言ったが聞かずに次の戦闘へ行く

次は千咲の方に向かおうとしていた奴に三連打を食らわせて倒す

そしてアクロバティックにドロップキックをきめて、その頭にバットを振り落とす

一方美月は・・・

「テイヤツ」という掛け声と共にぐしゃりと音がする

そして一つの影が崩れる

美月は竹やりを構えて今度は突き上げるようにして、倒す

距離をとる為に下がると横から手が出てくる

別の奴が横から来たのだ

それを森が倒す！！

ありがとうと言う間もなく、走る

それにならって自分も走り出す・・・すれ違いざまに牛刀で頭を貫く

千咲は森とのコンビネーションで避けるようになった後も敵を倒していた

獲物を狙う瞬間を狙えとか前に聞いたことがあったわね・・・
まさにその様に森を狙ってる奴を倒していく・・・
向こうでは中村と美月は無双をしている

やっぱり、強いな、戦闘の中でも強くなってきている気がする
バスで一緒だった時とは違う人にも思える・・・
そんな事を考えていると、また後ろを盗られて森に助けられる
そしてまだ戦闘中であることを意識して動き出す！！

中村は最後の軍団に向けて走り出した！！！！

美月はまだ別の奴を相手にしている

それを森が援護に行つて、千咲来る、ここには雑魚しかいないで安心していたが今度の奴らの中に打撃に強い奴も見つけた。

牛刀を出そうとするがさっき

投げてしまったのでそこにおいたままだ

不覚だと思つたがもう遅い・・・その時、隣で千咲が牛刀を構えていた

彼女に打撃に強いほうはまかせると伝えたとOKと返事をしてきた
とりあえず雑魚を片付ける

彼女も頑張っているがサポートは必要だと思つていた

早く終わらせようとする俺の意思とは裏腹に敵を倒すのに時間が掛かる・・・

自分の無力さが恨めしいが急に力が出たりもしない

そのとき千咲が押し倒されているのが見えたそちらに意識を向けた瞬間、こちらもたおれてしまった

牛刀もない、終わりだと思った時上の奴が倒れる

「頑張りすぎだよ」と千咲が牛刀を持って言った

向こうでは残りの殲滅に美月と森が行っていた

どうやら、千咲の救出には間に合っただらしい

「すまない」とだけ言って、俺も殲滅に行った。

休息（前書き）

文化祭が近くて、忙しくなっ
てかつ疲れているので今回は短
めで
文もいつもより雑になるかも
しれませんがおしますので・・・

休息

さて、大決戦も最後はあっけなく片がついて幕は閉じた。しかし中村一行にどれ程、油断の許せない事態かということ悟らせたのであった。

場所は森の家、決戦後は化け物に会うこともなく、無事に到着できたのであった。

「ただいま〜！！」森がそう言って、鍵を開けてはいる。

奥から足音が聞こえる・・・

「浩二！！」と叫んでお母さんらしき人が駆けてくる。

そして互いの再開を喜んでいた。

やはり、こういう光景を見てると・・・グツと来るな・・・。

あんなに平気に元人間を殺すようになってもそういうのは残っているようだ・・・

そしてリビングに通してもらい、それぞれ傷の手当などをして、休む。

いつの間にか眠り、辺りもすっかり暗くなったところに皆起き始めた。「そういえば・・・今日、新しいニュース入りました？」俺がラジオも持って来ればよかったと後悔しながら聞いてみる。

森母は残念そうに「悪い情報は入ってきているけど・・・。」と答えた。

「じゃっ奴らの能力が変わってきている！！とかという情報はありませんか？」美月が聞く。

やはり、気になるのはそこだ・・・。

「新しいかは分からないけど・・・頭を打つと倒れるのは知っているでしょう？」森母は聞いてくる。

「はい」とだけ俺は答えた。

「なんでも倒してからしばらくするとまた、動き出すことが発見されたの・・・」森母はそう言う。

.....沈黙.....

絶句だ.....アレほど苦勞して倒したのも復活するというのか.....

皆も顔色がまた悪くなり始める。

「なんなのよ！！！！あいつ等は！！！！」千咲がヒステリックに言う。

「避難も視野にいれたらどうだ？」森が提案する。

「お前は見つかったからいいけど.....私たちはまだ家族が.....」千咲は答える。

「それは朝言ったとおりだ、せつかく再開できたのだから.....避難するか？」俺はそう森に言った。

「くっ.....」森は悩んでいる。

正直、ここで抜けられると大幅な戦力ダウンにもなってしまつが当初の目的は果たしたから後は自由でいいと思う。

考える時間をくれと言われたが.....俺はこう返す。

「守つてやれ、お前なら役に立つはずだ。ただ一つしかない家族だろっ？」

「だがお前らを見捨てることもできない.....」森は齒をかみ締めるようにそう言った。

「けど、折角ね再開できたなら避難するべきだよ。」千咲は言った。

「明日、俺らで森とその両親を送ります。」俺は言った。

「あなたたちは.....？」と聞かれるが家族が気になると言う。その後は森一家に避難するように勧められるが誰も頷かなかつた。

とにかく、森一家は避難が決定して、明日に一緒に近くの警察署に行くことになった。

そんなこんなでこの日の会合は終わった。

く会合後・・・

それぞれが装備の確認をして、就寝の準備にかかっていた。(登場はしていないが森の父が見張りをやってくれている。)

俺はまたTVを見ていた、やはりチャンネル数が少なくなってる・・・気がする。

普段は見る事が無いから分からないな・・・。
噂の倒しても復活する化け物が映っていた。

なぜ分かったかというところ、ご丁寧に復活するシーンから始まったのだ・・・。
姿でも違いは十分わかった。

全体的にやせ細ったガリガリ？した感じで足取りもふらふらしている。
もう一つ刺しても血が全くでない・・・これはものすごく気になった。

何故血が出なくなったんだ？

強さ的にいつもの奴等は一応まっすぐ歩いて近づいてくるがこいつ等はフラフラだからまともに近づいて来れないと思う。

つまり最弱と認識しておいても問題はないだろう・・・
別に変な風に進化とかされなければの話だが・・・

「どうしたんだ、そんな表情でTVなんか見て・・・」「そう言いながら美月が近づいてきた。

そんなにキツイ表情だったかな？

「いや、噂のゾンビくんが映ってたからね・・・。」「俺は答えた。

「ゾンビくん・・・ああ、さっきの話してたやつか・・・。」「美月は言う。

「よくわかるな・・・その能力いつからなの?」俺は聞いて見た。

「さあな・・・いつの間にか読めるようになっていた。」美月は答える。

「今、俺は何考えてるかわかるか？」軽いクイズのような感じで出題してみる。

「さあ？、これ自分の意思では使えないの」美月は答える。

「そうなのか・・・万能ではないのか・・・」俺はそう言つと・・・

「しかし、この状況が始まってからは読めることが多くなっている。

「美月はそう言つた

「はあ？じゃあこのバイオハザードと関係してると言うのか？」俺は聞くと

「そうとまでは言つてない。」美月は答えた。

「そうか・・・」俺がそう呟くと沈黙が流れた。

・・・なんか気まずい？・・・

「とにかく、休んでおけよ！！」「そうとしか言えなかった。

休息（後書き）

編集でつけたしました！！！！
月曜にキャラに関する情報を出そうと思います

登場人物（前書き）

ついにきました！！！！！

人物紹介！！！！

未定のことが多いので不完全ですがね・・・

登場人物

なかむら
中村 総一郎 そういちろう

とりあえず主人公、今回まで名前が決まっていなかった。

髪は眉にかからず耳にかからずという校則を一応守っている。

現在は耳に少しかかっている。平均的な身長。

芸能など音楽に興味をしめさない。

誕生日に貰った木刀で素振りなどをしている。

ネットで護身術についても調べては友達を練習台にしていた。

家族はいない、遺産で十分すぎるくらい暮らせている。（そもそも

あまり、金を使わない）

やっぱ、主人公にとって、家族は邪魔になる気がしたからこんな設定にしました。

もり
森 浩二 こうじ

髪はお洒落で立たせている、長め、身長は中村より高く、

元バスケットボール部で鍛えた肉体があるが今の所は生かせていない……。

最近は美月の方が断然強いので、頼もしいと思いつつも少し嫉妬している。

実は作中では語られることはないが生粋のマザコンである。

いのうえ
井上 美月 みづき

今作で主人公の次に重要になるであろうキャラ

過去に槍術をしていた……（今更だが薙刀の方がよかったかもしれない）

髪は黒のロングで少しカール？させている。

強いが別にゴリラっぽい女とかというわけではない、身長中村より

少し低い。

なぜか、偶に人の心を読める・・・総一郎はよく被害にあつ。

宮元 千咲

森と同様に身長は高め、髪は茶色っぽい、ポニーテイル！

元陸上部だったので足が速い。

格闘は苦手である。

おとり担当になるかな？

小野寺 哲

身長森くらい

軽い天然パーマで濡れるとマッシュルームみたいになるらしい

賢い、運動能力も高い。

現役、弓道部。

小山 奈々（おやま なな）

童顔でかわいらしい

髪は肩ぐらいで身長は中村ぐらい

小野寺と同じく現役、弓道部

ちなみに二人とも特別、上手とかというわけではない。

横沢 次郎

中村が一応友達だと思っているが

即、見捨てられたりする。（本当に友達だよ！！！！）

背が高く、少しもてる。髪はぐしゃぐしゃ？

こちらは真面目に剣道をやっていた。

女性に頼まれると嫌だと言えない。

武術を心得ていて強い。

過去に実家の道場を破門になっている。

森夫妻 a n d 皆の家族
特に特徴はない。

そこらの夫妻や兄弟や姉妹。

哲の父

医者である。白髪の子。

哲の母

看護婦。

奈々の夫妻

サラリーマンの夫と専業主婦。

かいどう たける
海堂 武

明るなおっさん。

かなりいい人。変態。

トラックの運転手をやっていた。

車の整備などの技術的面が得意。

コンビニの化け物

トイレに閉じ込められてたところを横沢に助けられた人

こちらは表現しづらい程のドブス。

中島

自衛隊員のようにだ

総一郎と共に宇宙人に立ち向かおうみたいなのを言ったが・・・

が総一郎たちを監禁する。

その他

化け物

基本的なオードソックスなタイプ

偶に打撃に強いなどの亜種がいる。

時間がたつとゾンビになる。だから、いなくなる。

その他にも空を飛ぶやつなどもいる。

ゾンビ

化け物の変身した後

数が増えてきている

出血をしない

理由はミミズが血を吸いだして発生したものだから
不死身。

ミミズ

集まっているいろいろな個体の形になることが出来る。

いつもは人型のはず…

再生する。

頭部に中枢があるわけでないので、頭部の攻撃にもつよい。
宿主がいない状態で時間がたつと消滅する。

登場人物（後書き）

続きはこんどで・・・サーセン

名前が微妙だったかもしれないorz

だが私のペンネームを思い出せ！！！！

なっ！？

さよなら！！！森さん！！！！（前書き）

サブタイトルに注目！！！！必見ですよ！！！！

あと、分かりずらいかもしれません
ゾンビと化け物は別物に考えてください

さよなら!!!森さん!!!

翌日、太陽が上がり始めた。

辺りはどんどん明るくなっていく……

この家も光のカーテンに包まれた。

これが作戦の合図だ。

そして俺は一言叫ぶ

「GO!!!!!!」

一同、外に出る。

森母が玄関の鍵を閉め終わるまで辺りを警戒する。

向こうから近づいてくるのは……大丈夫だ。

森の父だ。

「よし、ここらには化け物もゾンビもないぞ」森父はうれしそうに言った。

「そうですね……では行きましょう。」俺はそう言った。

皆、警戒しながら歩く。

辺りは俺たちの足音しか聞こえない。

今は道路のど真ん中を歩いている。

車は来ない、脇には木や雑草その奥には畑や田んぼ。

ガサツ

背後から音がした。

俺は咄嗟に振り向くが何もいない。

大体……あの茂みから音がしたな……

俺は無言で、ここで待つようにサインして、武器を構えて、近づくと近づくと、警戒しながら進む、茂みに牛刀を突っ込むが手ごたえはない。

何もいない様だから戻ろうとして振り向くと襲撃されていた。

「耐える!!!」と俺は叫んで近づく。
まず、一番手前の森母を襲っていた奴を倒す。
そうしている間にまた化け物たちが集まり始めていた。
その横で森を襲っていた奴の腕を蹴りで引き剥がして、森に倒すように言つて、森父を助けるために、そちらへ近づく。
背後から頭に突き刺す、あまり多くないが血が噴出す。
森父にも戦うように言つて、集まってきた奴らを倒す。
「俺と美月で進行方向の敵を倒して、切り開く!!!」ほかは援護をしてくれ!!!」皆に向かって叫ぶ。

そちらの方の数は少ないからすぐに進むことができた。
今度は電柱と木にロープを引っ掛けて、罨を作る。

少し掛かってくれたから良かったが壊れてしまった。
だが十分距離は取れた、そして一発、ロケット花火をぶち込んで進む。

警察署が見えてきた、避難所だ。

警官が門のところにいるので近づく、すると銃を向けられたが話しかけると優しく、どうすればよいかを丁寧に教えてくれた。

俺らは次の所へ早く進みたいのでそのまま三十分休んで出発することにした。

そしてあっという間に過ぎ去る。

「では森、ありがとな、わずかな間だったけど……」俺はそう言つて、お別れモードになると思つたら

「いや、俺も行くぞ」森はそう言った。

「は？昨日言ったことを忘れたか？守つてやれと」俺はそう言った。

「我々のことはいいよ、ここなら大丈夫そうだしね……」森夫妻がそう言った。

「俺はついてくぜ!?」森は真剣にそう言った。

「勝手にしろよ、昨日言ったとおりだ」俺は笑顔でそう言った。

「では森さん、さようなら!!!」美月がそう言っつて、俺らは進み始めた。

離れたところで千咲も叫ぶ。

森夫妻はまだ、手を振っていた。

「さよなら!!!森さん!!!」

「おい、気になってたがなんで総一郎以外はあまり喜んでいないんだ!?」森が言った。

たしかに……喜んではいるが、リアクションが少ない、あまり喜んでるようには見えない。

「いや、だって……偶に私たちを見る目が怖かったし……変態っぽいから……」千咲が言う。

「そうだよ……偶に読める心も何か……口に出しがたいこと考えてたし……」美月も言う。

「ちがつ……そんな事考えてはいない!!!」焦って、森が答える。

「そうだったのか……」少し森のイメージ変わったな……

「じゃあ、総一郎はどうなんだよ!?」森が俺を道連れにしようとするが……

「あいにく、そいつからはそいつた考えを見つけたことはないのだよな……」美月はそう答える。

「え〜それは、それでどうかと思うけどな〜」千咲が言う。

「好きな人いたの?」と聞かれたが

「む、う〜む」と自分でもその質問は悩む。

たまに聞かれるけど……悩まないか?

「コイツマジで悩んでるぜ」森が言う。

「今、読めたけど、小学の時にただけでそれも周りの流行的なの

に乗っただけだ！」美月が言う。

その後、みんなにからかわれながらも

俺らはまた旅を続ける。

横沢 PART 2

「遅刻だー！！！！」横沢は叫ぶそして走る。

横沢は激怒した。急いでいるというのに変な奴等が付いてくるからだ。

それにさっきはピアノ線でトラップがつくられていた。

気が付かなかつたら・・・

どうしてくれるんだよ！！！！

「ちつくしようー！！やっぱ思い出せないな・・・」横沢は走りながら呟く。

「それに俺、くさいな！！！！なんで昨日、風呂にはいらなかったんだ？」脇のにおいを嗅いでみる。

くさい

そんな感じでそこら辺の死体などにも気にすることなく学校へ行く

「やっべくな、先生におこられるよ・・・」そう呟いて、職員室に

向かう。

「ちつくしよう、なんでこんな汚いんだ？」横沢は辺りのどす黒い

血だまりを見ながら言う。

血だとは気づかないようだ。

「しつれいします」と言っつて、職員室に入るが誰もいない・・・。

「なんで？」とりあえず、事務室にも行っつてみるが誰もいない・・・。

教室に向かう為昇降口に入っつてやっつと気が付く。

「これ、まさか・・・本物！？」

なんでこんなに・・・ハッ

町もこんなだったな・・・うん、そうだ・・・何かいるぞ・・・

ハッさっきのストーリーカー達か。

それにしては、今日、昨日でできたような感じじゃないよな・・・

む？

バットが落ちている・・・

横沢は拾って、装備する。

そのとき・・・ついに

化け物が現れた。

化け物の攻撃。

「うお！！！！何すんだ！！！！」慌てて、避けて、怒鳴る。

横沢、相手の足を攻撃、「フッ 折れたな・・・これで動けまい」と言つて、逃げると

あつ来てる、思い出せそうだ・・・と座り込んで考える・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

思い出せないな、立ち上がり、校内の探索を開始する。

「あつ旧校舎か・・・入ってみようか・・・」また、呟いて、入っていく。

この旧校舎は大震災後に基礎からやられて、危険なので入ってはだめなことになっている。

「うおーすげー！！！！」感心しながら、歩き回る。

ぐちゃぐちゃと音がしたかと思うと足元を見たことがないミミズのような、赤い物がすごい速さで通り過ぎる。

付いていくと、3・Bと書かれた教室にたどり着いた、ドアの隙間から見てみると、まるで人の内臓のような物がある。

そのぐちゃぐちゃした物に先ほどのミミズのような物が集まり、その中に入っていた。

見ていると気持ち悪い、吐きそうになるがこらえる。

その時、触手が生えたと思ったら、こちらに伸びてきた！！！！

慌てて、逃げるが前方からは化け物がやって来た。

？さっきの倒れてた人っぽいな・・・、うちの制服を着ているし、この顔は見たよ・・・、違う点といえば、やせ細っている、そして動く。

中にはさっき、足を追った奴も混じっていた。

触手をバットで殴り、ひるんだ隙に走って、逃げようとしたが、別なのが現れて、足を捕まれる。

そのまま、引きずられて、さっきのミミズのようにぐちゃぐちゃした内蔵のような物に入れられる。

そこで横沢の意識は途絶えた・・・

横沢PART2(後書き)

まさかの死亡か!?

いざ、進め！！！（前書き）

最近はラストシーンしか考えていない・・・
そこまでもかんがえないと・・・

いざ、進め！！！

さて、中村篇に戻る。

俺らは今、俺の家に向かっていた。

家族はいないが、休むのにちょうどいい場所にあるからだ、そこにはすぐに着くはずだから

今日は今後の食料問題に備えようと思う。

「総一郎さあマジで好きな人できたことないの？」千咲が言う。

「だから、そう言ってるじゃん。そんなに珍しいことでもないだろ？」

「いや、そんな奴、現代には化け物とゾンビをのぞくといないぞ」美月は言った。

「それにお前、音楽も聴かないよな？ホントに現代人か？」森が言う。

「えーしんじらんないよ」二人はそう言った。

「いや、音楽くらい知ってるよ。」俺は反論する。

「ならさあ、マイケル・ジェイソンの曲を2つ答えてよ！！」

「簡単だよ・・・そ、それくらい・・・うん！！」俺は内心まずいと思いつつ言った。

「ほう、なら言ってみなさいよ」にやけながら千咲が言う。まずい、ばれてるよ・・・知らないの・・・。

「えっと・・・それよりも・・・今日、やりたいことに時間たりるかな？」

「話をそらすな総一郎くん？」千咲が意地悪く、微笑む。

しかし、そこまでする時間はあるのか？という疑問を持たざるを得ないほど化け物の数は増えている。

また、見つけた。

「ちつまたか・・・」と言って、森は走って、化け物を消す。随分、動きが良くなっていると思う。

親に会ったのがそんなにきたのか・・・。

「だが負けてらんねーぜ！！！」そう言って、俺も先にいる化け物やゾンビの掃除を開始した。

けどさすがに疲れてくる。

けど化け物たちの強さもどんどん減っていた。

それだけでなく、こっちの方は化け物がほとんどいなかった。

ほぼゾンビタイプになっていたのだ。

「ゾンビばかりだね」千咲が言った。

「どんどん、増えてきてるな・・・。」美月も言う。

「いやいや、なんで休んでるの？COVER me！！！」俺が言う
うと

二人は座りながら、小石を投げてきた。

「ボケるなよ！！そんなので何がしたいの？」俺がそう言うと

「ちっ総一郎のくせに！！！」美月はそう言って、立ち上がり、応援をし始めた。

「もういいや・・・疲れる」俺はあきらめて、目の前の戦いに集中することにした。

そうすると美月は座って、また千咲と会話を始めた。

そっついながらバットを振り下ろす。

今度のゾンビは頭を潰せば動かなくなるがしばらくするとまた、動き始めるのでメンドクサイと思う。

休む間もなく横からゾンビが自慢の爪を振り下ろしてくるのを軽やかなステップでかわして、バットの正しい使い方のように横に振って、倒すと今度は前から体当たり！！！！

俺は倒れるが受身と取り、立ち上ると、そいつはゾンビで爪を振り下ろしてきたのを

バットで防ぐ。

カンと軽い金属音がする。

一歩さがる。

すると後ろに倒れていたゾンビを踏んで、転んでしまう。

転んだところにゾンビが接近して引っ？いてきた。

今度は転がって、防ごうとしたが失敗して、腕に切り傷が刻まれる。首はね起きで立ち上がり、一回、くるっと回ってその勢いも使ってバットを横に振る。

そのゾンビは崩れる。

今度は緑に変色している化け物に似ている奴が近づいてきた。かなり、その色に驚かされたが頭をバットで殴るが効かない。

そして、ベルトから牛刀を抜く隙すらないような連撃が始まった。

それをバットで防いだりステップで避けたりしていると牛刀を持って背後に忍び寄った千咲の手により死ぬ。

コイツが最後の奴のようで周りには俺たち人間以外には立っている奴がない。

どうやらコイツは打撃が効かない奴らしい。

前に交戦したときはこんな色ではなかったけど……。

「すごい色だね……」千咲はそう言って、近づく。

「歩きながら話そう、こいつらも起き上がるぞ」「ゾンビを見ながら森は言った。

そして、歩き始める。

このウイルスの変異はすごいな・・・と思う。
なにより、亜種が多い、・・・いや、複数のウイルスがココらへん
にも入ってきたのか？

それにこのバイオハザード、人為的ものかも気になる・・・。

「そうだ！！さっきの質問！！」千咲が俺に言う。

チツ思いだしたか・・・

「もう、やめとけ・・・」森が言う。

おお・・・たすけてくれるのか

「だってこいつAKV47のメンバー数を47人だと思ってたしス
トームのメンバー全員言えなかった男だぞ！！！」笑いながら森は
言う。

俺以外、三人は大爆笑する。

「いや、そんな常識のことではないだろ！？」俺は言う。

「はあ、こんなの普通に生きてたら分かるだろ？」美月が言った。

「あとさあコイツー前にね、ワックスをつけてる奴を見て、寝癖と
勘違いしてたぞ！！」森はさらに暴露する。

「ぶっマジありえない！！総一郎君ウケるー！！！！てかありえな
ーい」千咲が言う。

「コイツは化石みたいな存在だな・・・今時、めずらしい！！！！」
美月も爆笑しながら言う。

「うるさーい、もういいよ！！！」と悔しくて先に進む。

「あーあ、いじけちゃった・・・ごめん、ごめんってば、機嫌直し
てよ！！！！ねっ？」千咲はそう言う。

しかし美月、この女は違う。

「ほっときなつて・・・あんな奴」美月はそう言った。

全部、聞こえてるよ・・・ちくしょう！！！！

「覚えてろー！！！」と捨てゼリフを言って、走り出すが後ろを振り

向き走っていたので

ゾンビに衝突してしまった。

互いに転ぶ、こっちは武器を装備していなかったなので焦る。

敵は近づいて来ているが慌てて、上手く構えられずにいる。

仕方がないので蹴り倒して、倒れたところで頭を踏み潰す。

・・・倒せた・・・最近、というかこのバイオハザードが始まってから、全体的に能力がなぜか上がっている気がすると思っていたが間違えない・・・強くなってる。

原因不明なのは怖いけど・・・。

そこに森たちが追いつく、すごいね・・・武器なしで・・・等と言われた。

「異常だと思うな。この力・・・」俺はそう言う。

「うーん、きつと大丈夫じゃない？」千咲が言った。

そうは言ったが千咲を含めた中村以外も心配していた・・・。

いざ、進め！！！（後書き）

ちなみにこの世間知らずは実話ですWWW
いまだに、分からなかったりする・・・

ついに着いた！！脱ホームシック

俺らは今、坂を上っている。

「なつかしいって程でもないが・・・ここまで来ることができるとはな・・・」俺は言った。

「なんだ？途中で死ぬとも思ってたか？」美月が言った。

「そりゃあね、一応、学校を壊滅させた奴等がたくさんいるんだよ？」俺は言う。

「けど・・・苦戦することもなかったよね？」千咲が言う。

「忘れた？昨日の奴らの数・・・てか死ぬところだったし・・・」俺はあのとき、倒れたときを思い出しながら言う。

「ふふふ、怖かったの？私は死ぬなんて思ってなかったよ。森君もいるしね。」千咲が言う。

「それ程、信頼していただき、うれしい限りです」森が言った。

「こつちも壊滅か・・・家族無事だといいね」美月が辺りの死体を見ながら俺に言った。

「いや、俺の家族は既に何年か前に死んでるぜ？」俺は答える。

「えっ？じゃあなんで、家に帰りましよう的なこと言ったの？」千咲が言う。

「だから、お前らだって、家族いた方がいいだろ？」俺は言う。

「えっ！？そのために!？」皆が言う。

「あと、俺さあゝホームシックなんだよね。ハハハ」俺は言う。

「思っていたけど酔狂だよな」総一郎。「美月が言う。

「酔狂って何だよ？」俺は言う。

そう言っつて、進んでいると、俺らと同じくらいの年の集団と会った。ガラが悪いな・・・。

「ねえ、そんな、イケテナイ奴等より俺らと一緒に行かない？」そ

の中の一人が言う。

「とつても、面白いよ、ぎゃははは」別な奴が言う。
相手は5人だ。

「ハッ！！！！お断りよ」睨み付けながら千咲が言った。

「ダサイのはお前らだろ？」美月も言う。

「なんだと？」その中の奴が言う。

怒ってるな、と思いつつながら、その連中を眺めていたら……

殴られた、舐めやがって……ベルトから牛刀を抜いて、そいつに躊躇なく突き刺す。

<ぎゃあー！！！！>そいつが泣き叫ぶ。

「一人、削除」冷たい声で俺は言う。

「貴様、何をする！？」「相手の方の一人が言う。

そいつらを俺ができる限りの冷たい目で一瞥する。

そいつらが動揺したところを金的に蹴りを放つ、同時に斬りつける。

「二人目」またしても冷たい声で言う。

そのとき、まっすぐ俺に銃を向けられる。

「動くな包丁を捨てる……」「銃を構えている奴が言う。

こちらの俺以外は驚いている。

銃を構えているのは一人か……。

さすがにエアガンじゃ……ないよな？

この銃はトカレフか……暴力団とかか？コイツ

「やっぱ、お前総一郎か？」銃を構えている奴が聞いてきた……

何で知ってる？

ああ、同じ中学だった奴か……確か名前は伊藤なんかだな。

学校で暴れまわる非常に迷惑な奴だ。

うん、確かそうだ。

「おい、聞いている？」と言って、銃を近づけてきた所を前のエアガン馬鹿と同じやり方で奪う。

「死ね、バカヤロー」と俺は言って、逃げようとするそいつに弾丸をぶち込む。

<ぐあー！！！！！>

ああ、本物だったか・・・いい感じの重量感だったからな・・・。

「ごめんね」と言って、他、二人に背中を向けたとき。

「あぶないっ」と美月が叫ぶ。

俺は倒れる。後ろから蹴られたようだ、俺の馬鹿！！！！

振り向くと、俺が落とした銃を構えていた。

「きゃー！！！！」千咲が叫ぶ。

そのとき、そいつともう一人に棒が刺さる。

何かと思っていたら、そいつらは崩れた。

飛んできた方を見ると二人の影が・・・誰かは分からない。とりあえず手を上げて降伏していることを表すところちやって来た。

「うおっお前らか！！！」俺はおもわずそう言った。

「あの？こちらの二人は？」森が聞いてくる。

「俺の中学の時の友達だよ」俺は銃を拾いながら、言う。

「小山奈々（おやま なな）です」女の方が言う。

「小野寺 哲（おのの けん）です」こちらは男のほう

「わりいな、助かった・・・家族はどうだ？」俺は聞く。

奈々の方の家族は食料を得るため街中に行ったきりらしい、ここらへんにはもう食料はないらしい。

ちなみにこの二人はカップルだ。

「なら一緒に行かないか？この二人を街中の自宅に届ける途中なんだよ」俺はそう言った。

「ああ、いいよ、ありがとう！！」奈々が元気に答える。

そして、自宅から徒歩十分の園芸店に向かう。

あった、あった。

花の種。

これで食料を作っていこうと思う。

とりあえず帰る。

途中、化け物の方に会うが二人がすぐに倒してくれた。

ついに着いた！！！！玄関の鍵を開けて中に入る。

そして少し休んだら森、小野寺、奈々、千咲きに小野寺の家族を連れてくるように言う。

町に行く間、花の世話を頼みたいし、うちには食料が災害に備えてそこそこある。

そして、倉庫から木材（父が何かに使っていたもの）で軽く窓を張っておく。

さらにさっきの種をまいて、水をやる。

「ただいま！！」皆が叫ぶ。

帰ってきたかよしよし

「おかえりー！！あっはじめまして！！！！」俺は小野寺の家族に言う。

そして、明日、町の奈々の家族を助けに行くことなどを伝える。

とりあえず、ゾンビの襲撃で自宅の一部がやられたらしいから引き受けてくれた。

その後、いつものピアノ線トラップを仕掛け、さらに近くの工事現場から木材などを頂いて家の増強をする、そして小野寺家から必要な物の運び出しを終えて、その日は終わった。

トカレフはどさくさに紛れて俺が装備することにした。

戦場（前書き）

ピアノ線は私の想像以上に強いことがわかった・・・
勘違いかもしれないが

戦場

時はまだ、自宅に着いた日の夜。

中村「明日、向かう場所は今までの所とは違うと思われる。」

「街中には数多くの化け物、ゾンビがいるであろうと思われる。」

「それに先ほどのような連中もいるであろう。」

町の地図を広げながら俺は言う。

千咲「まず、奈々さんの家族を見つけて、私の家に退避させるとい
うのは？」

中村「そうだな・・・見つけ次第、2つに分かれていくぞ」

「TEAM1俺、千咲、美月」

「TEAM2に森、小野寺、奈々だ」

「TEAM1が見つけた後の美月、千咲の家族の搜索」

「TEAM2が確実にここまで送り届けて、その後はこのKEEP
Pだ」

美月「どこを探す？」

奈々「そういえば、大型のショッピングセンターができたと言いた
けど・・・」

「そこに行ってみる、とか言ってたわ」

奈々は地図で場所を指差しながら言った。

中村「ふむ、ではそこに向かうことにするか・・・」

美月「弓矢だけでは近づかれたらキツイだろう・・・ホレっ」

美月は牛刀を奈々と小野寺に牛刀を渡す。

そして皆、就寝する。

そして、翌朝

うん、今日もいい天気だ。
隣の家に侵入して車の鍵を借りて行く事にした。
運転は小野寺の父に少し教えてもらい、出発。

初めてだから速さはゆっくりだが歩きより数倍早い。

調子に乗って、進んでいると

道路が放置車両にふさがれていた。

中村「よし、ここからは歩きだ!!」

前回の震災で、車を捨てれば逃げる事が可能だったかもしれないと聞いたような気がする。

そして、いつもどおり出発する。

しばらく、歩いたが

むく予想とは違って、まったく、ゾンビも化け物も出てこないと思
った。

その時、俺の足が捕まれた、ビックリして下を見ると、ゾンビが足
を掴んでいた。

頭を踏みつけて、倒す。

俺は皆に走るように言って、走り出す。

小野寺「あんな奴もいるんだな・・・」

中村「アレはないぜ」

奈々「ホント、ゾンビらしいわね」

美月「空を見る!!!」

俺は言われるがままに空を見上げると
化け物が空を飛んでいた。

これは・・・ないな。

とにかく、隠れる・・・よし見つかってはいないようだ

あれは・・・手の代わりに翼が生えているといった感じだ。

できれば相手にしたくないと思う。

よし・・・去ったようだ

千咲「進もうか・・・」

中村「ここでは最低限の戦闘以外はさげようか」

美月「それはいつでも心がけとけよ」

森「とにかく、急ぐぞ!!!」

走り出して数分、前方に5体・・・トカレフを構えるが小野寺に止められてしまう。

小野寺「俺らが殺る」

奈々「左、二匹はたのんだわ」

小野寺「OK」

そして、すぐに倒してしまった。

強い・・・俺の新しい武器見せようとしたのに・・・

俺は肩を落とした。

そんな俺を無視して皆は進む。

そして、ショッピングセンターに着いた。

救出

俺らは中に入っただけだ。

中村「誰か、いるか？」

.....

静かなままだ。

奈々「誰も・・・いないようだね。」

キユツ 靴が地面にすれた時のような音がする。

そちらを見ると、人がいる。

ただ、残念なことにそいつは人間ではなかった。

<うっ・・・>そいつは何かうめいている。

森「間違えなく、化け物だな・・・」

奈々「小野寺の家族、無事かな・・・」

中村「とにかく、片をつけるぞ。」

チャツチャラ〜木刀〜!!!

俺は木刀を構える、前回、初披露をしたかったが・・・小野寺力

ツプルに邪魔をされて、できなかったものだ。

柄には洞爺湖と書かれている。

某侍、ギャグ、シリアスなど満載の漫画の白髪でやる気半分の主人公が帯刀しているのと同じものだ。

中村「やっぱ、いつも練習している得物を使うのは最高だな。」

俺はそう言いながら、化け物に殴りかかる。

一階はその一体だけだったが先程から、上の階からガタガタと音が聞こえてくる・・・。

美月「どんだけ、上の階にはいるのよ!?!」「うんざりしているように言う。」

森「考えたくないね」

小野寺「俺が探しに行くから、待っててくれ。」

中村「俺も行かせて貰うぞ」

小野寺「これは・・・俺の家族がいるかもしれないというだけだ・・・皆を危険には晒せない。」

中村「かといって、俺は見捨てることもできない。」

中村「皆もそうだろう？」

各々が頷く。

小野寺「みんな・・・。」

中村「決まりだな・・・作戦だ」

・・・

「分かったか？」

皆「了解。」

そして、それぞれ、指定された場所に派手に音を立てながら進む。

今回の作戦は中村、小野寺が直接、調査および小野寺の家族の保護をするというもので、

上階は化け物がたくさんいることが予想されたので、それを他のもので3つに分散させて、おくという作戦だ。

俺と小野寺は階段付近に隠れていると・・・たくさんの足音と共に化け物がたくさん通り過ぎていくのが目視できた。

中村「よし、いくぞ」

そして、進んでいく、

小野寺「まで、あつちにまだ少し残っている」

中村「少ないな、殲滅しておくぞ、援護は頼む」

そして、俺は走り出す。

うゝむ、そろそろ、戦法を変えていきたいな・・・戦闘がワンパターンになってしまう・・・。

などと考えて走る、そして、さらに

走って、近づく間にすでに三体も数が減っていた。

俺も負けてられないな・・・。

中村「うおー！！！！」

相手の頭を一撃で倒さず・・・
ネットで見た、型の通りやる。

名称はわからないが・・・

まず、たぶん、抜刀！！！斬り付ける、もう一度！！！そして、鞘
に戻すという感じの動作を繰り返す。

さすがに効率も悪いな・・・いつもの様に暴れるか・・・。

矢も無駄にはできないな・・・、小野寺のほうを目の端で見ながら、
思う。

敵の迫りくる、攻撃を木刀で叩き落しながら、徐々に攻撃、怯んだ
ところを一気に！！！！

相手を木刀でなぎ倒して、トドメを刺していく。

戦うこと10分、殲滅は完了した。

小野寺「お疲れ、さつき何体か・・・あっちの方に行ったが・・・」

中村「あっちには階段などはない・・・ということは生存者か？」

小野寺「行ってみよう。」

案の上、化け物が群っている先には扉が閉められている、事務室の
ようなところだ。

すぐにその化け物を倒す。

たったの二体だから、一射と一太刀で終わらせる。

そして、言う

中村「すみません、誰かいますか？」

小野寺「父さん、母さんいる？」

小野寺父「その声は哲か？なぜ、ここにいる？」父親らしき人が声
を出す。

小野寺「とにかく早く出てきて！」

ガチャツと音がすると扉が開いて、中から二人出てくる。

中村「こんにちは、中村です、覚えてますか？ご無事そうだなによ
りです」俺は笑顔を交えて小野寺の母に向かって言う。

最近は行かないが、よく小野寺の家で遊んでいたのだ。

小野寺母「総一郎君・・・無事でよかったわ」

小野寺父「すまないね、中村君と行ったかな？いつも哲がお世話になってます」

中村「いえ、こちらの方に用事もありましたし、見捨てることもできませんよ」

中村「ほかの者が化け物を抑えています、今のうちにそとへ・・・」
続けて、言う。

そして、小野寺の家族の確保はできたので集合の合図を送り、合流しようとしたとき、

<きゃー！！！！>今のは奈々の声！？

小野寺が急いで向かう！！！！

俺と小野寺夫妻もそれに続いて、行く。

いったい、今度なんだ？

救出（後書き）

感想よろしくおねがいします、
またこの話はてをくわえるので・・・

大二次大決戦!!! (前書き)

前回の話をほんの少し、付け加えました、見なくても、今回の話はついていきます。

大二次大決戦!!!

小野寺はもう、先に行ってしまった・・・

中村「愛の力は強いですね」

小野寺夫妻は今の一言が聞こえなかったようだ。

中村「はあく」ため息をつく。

小野寺父「どうかしたのかね？具合が悪かったら言いなさい。私は医者なんだよ」

中村「はい、そこら辺は哲君から聞いてます。ぜひ、今度、診察、お願いしたいです」

小野寺父「まかせなさい」やっぱり、大人というのは心強いな。

一階に着くと、一帯が戦場となっていた、敵の中にはさっきの空を飛んでるやつも見つけた。

空の奴が小野寺夫妻に向かって、跳んでくるのを、野球のバッターのように打ち返すと軽く落とすことができた、重さは軽いようだが、突っ込んでくるときの勢いはなかなかのもので手が痺れた。

中村「奈々を初めとする、女性陣は車を駐車場から10分以内に持って来てくれ!!!」

女性陣「わかった!！」と言って、走っていく。

小野寺父「私も戦うのだ!！」自分を奮い立たせるようにそう言つて、森が予備で持っていたバットを構える。

中村「ここより、先にすすめるな!!!」

そして、近づいてきた奴を蹴る、木刀で殴りかかる。

ほかも、同じようにして戦う。

森「もう、十分経ったか？」叫ぶが

中村「まだ5分と経っていないぞ？」

小野寺「ふんばるぞー!!」

また、殴りかかる、一応倒していつてるがキリがない!!

中村「くそつ、数が多い」

そして、また切りかかるが後ろからまた別なのが現れて、休む暇がない・・・

最近は何でか、身体能力は上がってきているが・・・それは、元が運動大嫌い君だからたかが知れている気がする。

だが、弱音ばかりも言つてられない。

中村「くらえ!!!中村スペシャル!!!!!!」

俺はタツクルを食らわせてやる、化け物どもが倒れていく、混んでいるところで転んで、それが広がり、大変なことになったと聞いたことはあるが・・・そんなもんだらうな。

仲間に潰されて、動きが取れない奴にトドメを刺す。

それを続けていると・・・。

中村「うあつ!!!」そのように叫んで、倒れる。

なんだというのだ・・・何かがぶつかってきた。

そちらを見ると・・・空を飛ぶ奴がぶつかってきたようだ。

中村「がぶつげほつげほ・・・はあはあ」

呼吸がづらい、吐血をしていないから・・・内臓は無事なようだ。

中村「俺にかまわず、戦え!!!ごほつげほ!!!」こちらに近づこうとする奴らに呼びかける。

小野寺「待つてる!!!すぐに片付けて・・・」

遠くからエンジンの掛かるような音がする。

敵も立ち上がってきている。

中村「ひゅーひゅー、ふうはあはあ」

よし、呼吸も楽になってきた。

立ち上がる、木刀をまた構える。

もうすぐ、助けがくる、あきらめるな！！！！心の中で決意する。

希望を胸に敵にまた向かっていく。

一体は頭を打ち砕いて、倒せた。

だがこんどはブローを食らう、そして、蹴られて、後ろへのけぞり、倒れてしまう。

また、立ち上がる

中村「はあはあ、そんなもんか？」

そしてまた、木刀で殴りかかる、今度は倒せなかった、疲れや痛みで膝をつく。

こっちにふらふらとゾンビが近づいてくる。

体が動かない・・・こんなのは中学の時に長距離を休まずに走ったとき以来だ。

中村「年貢の納め時か・・・」俺は目を閉じて呟く。

しかし、しばらくしても痛みなどが無い。

目をゆっくり開けてみると・・・

ゾンビには矢が刺さり、そして、頭には刺されたあとがあり、倒れていて、美月が手を差し出していた。

それに捕まり、千咲にも肩を貸してもらい、車に近づく。

千咲「今回、出番ないと思ったよ？」

まさか、助かるとは思ってもいなかった。

ハッ！！！！

何を俺はあきらめていたんだ！！！！

自分の未熟さを思い知りながら車に乗り込む、一時、近くの避難所へ撤退することになった。

そして、走ること・・・3時間、避難所に着いた。

千咲「放置車両、多すぎよ!!!」

森「確かにそうだけど・・・仕方ないじゃん」

小野寺父「総一郎君、少し、痛むところを見せてくれ・・・」

中村「はい・・・ココらへんですね」

小野寺「・・・これは打撲だな・・・骨は大丈夫かは分からないが動く痛みは？」

中村「大丈夫です・・・動けますから」

小野寺父「そうか、何かあったら、言いなさい」と言って、森や哲のことも見に行く。

中村「現在位置からはどちらの家が近い？」

美月「千咲の方だね・・・かかる時間は・・・普通は30分ぐらいじゃ、ないかしら・・・」地図を見ながら、そう言った。

中村「そうか、じゃあ、作戦通り、分かれて、行くぞ」

そのことを小野寺の母に伝えて、出発する。

とくに、敵とも会わずに千咲の住むマンションに到着するが・・・
静かだ・・・ゾンビや化け物の音さえしない

千咲は走って、中に入っていく、美月と俺もそれに続いて、入る。

ホールが血まみれだここまではいってきたのか!?

そして、階段を上がり三階まで行く。

ゾンビがいたので、俺は一番前にでて、頭部を潰し、一回に3人で落とした。

そして、千咲の住む、部屋に着く。

鍵を開けようとするがあいているようだ・・・

中に入るが・・・千咲の動きが止まる。

そして、泣き崩れた。

その時、部屋が後ろからでも見えた。

部屋は血まみれでそこには3人倒れていた、無残にも腹部の肉は持っていかれていた。

その時、俺はかける言葉が見つからなかった。

そして、遺体に近づいて、目を見開いたまま、死んでいる、弟だと思われる子の目を閉じる。

美月「こんなのって・・・」

中村「ああ、ふざけてやがるな」

！
こんなのは、もう御免だ・・・俺が、絶対に終わらせてやる！！！！

すまなかつた・・・（前書き）

前回の話を最後付け加えときました

勢い、おちまくりだあー！！

こんなシーンだが

あいにく、私には感動とかはかけないな

すまなかつた・・・

今、いるのは千咲の部屋

中村「すまなかつた・・・俺がもっと早く行動しているようにすれば」

千咲「・・・・・・・・」

美月「・・・・・・・・しばらく、落ち着くまで、待ちましょ」「そして、座り込む。

中村「俺らは、外の出ている、最後にお別れしな・・・。」

千咲がこちらを見る、そして

千咲「やだ！！」駄々をごねている、子供のような感じだ。

中村「だったら、また、喰われるのを放っておくというのか!?!?」
かなり、厳しいことを言っているが・・・

美月「ちよつと・・・・・・・・」

中村「すまない・・・・・・・・だが、こうなってしまった以上は・・・・・・・・」

千咲「もういいよ!!!先に行きなよ!!!私はもう・・・・・・・・」

千咲は辺りの物を投げってくる。

美月「落ち着いて、お願い!!!」悲痛そうに言う。

中村「俺でも親が死んだとき、こんな感じになったんだ・・・肉親

失くせば誰でもそうなるが・・・」

中村「お前はそこで進むのをやめてしまうのか？家族の分まで生き残ろうとは・・・？」

千咲「もうだめだよ・・・私、生きる希望が・・・」千咲は牛刀を抜く

中村「まって！！！」

しかし、何か、大きい影が動いたかと思うと、牛刀は取り上げられた。

美月だ！！！！

千咲「なんで、止めるのよ！！！！」

美月「落ち着きな！！あなたの家族もそんな結末望んでないよ」

千咲「！！！！なんでそんなのわかるのよ！！？」

美月「こっち来なさい・・・」

そして、千咲を遺体のところへつれてきて、床を指差す。

そこには、血で文字が描かれていた。

くごめんなさい 千咲 あなたがコ コに着くころには死んでるでしょう

どうか 生き残って あなたを愛>

最後は途切れていた。

千咲「これは・・・」

美月「そう、だから、絶対あなたは生き残らないとダメなの」

中村「俺らは出てる・・・終わったら来なさい」

そう言っつて、外に出る。

数分後、千咲は出てきた・・・

中村「ココを焼いてしまおうがいいか？」

千咲は僅かに頷いたので、二人を先に外に出して、部屋にあった、燃えそうなものを集めて、ついでに弟くんの部屋にあった、木刀を拝借して、全てを燃やす。

すぐに外に出て、マンションの方を見ると、激しく燃えていた。

そして、むかえにあった、別のマンションに入る、今日はここで休むのだ。

部屋に入る、つかれたなく、どこの部屋も遺体やら血があったりして・・・使えず、ココだけがきれいだったのだ。

千咲は黙って、自分の住んでいたマンションを眺めていた。随分燃え広がっている・・・。

中村「すまなかつた、本当に・・・」

千咲「いいよ、こつちこそ、自分の立場を棚に上げてごめん、あんたがいなきゃ、生きてなかつたかも知れないのに・・・」

そこで千咲の弟の木刀を渡す。

中村「君が使ったほうが、喜ぶよ、弟君」

千咲は頷いた。

中村「どうした？美月」

美月は外のほうを見たまま動かない。

美月「へりだわ、自衛隊かしら？」

中村「助けは期待できないな・・・」

ラジオがあつたので付けてみると。

女「あつ今、自衛隊が 町に入りました!!」

あれ？俺らが今、いるのも 町だ。

美月「よかった、奴らの掃除をしてくれるのね!!!」

中村「なぜ?ここは、首都なはずもないし、でっかい町でもないのに.....」

千咲「.....」

銃声が聞こえる、しかし聞こえてくるのは断末魔と悲鳴だ

女「どうしたのでしょうか?」

その後、ラジオは切れた・・・何があったんだ?

すまなかつた・・・(後書き)

あとからまた、追加で付け加える。

前回は最後のほう変えました

まさかの感染復活!!!

昨日のラジオの後、まったく、情報が入ってこないまま、一夜が過ぎた。

美月「森たちはぶじかしら?」心配そうに言った。

中村「大丈夫だ! 奴らだつて今まで生きてきたじゃないか!!!」
美月「うん、そうよね」明るく答える。

千咲「私たちも油断はできないわね・・・」

中村「それよりも・・・腹がへつたぞ」

美月「まさか・・・私たちにやらせるつもり?」冷たい・・・全てが目も周りの空気も・・・

中村「へっ? え・・・とあつ、はい、ごめんなさい、作りますよ・・・つくつりゃいいんでしょ?」しぶしぶ、腰を上げると

美月「はい?・・・喜んでじゃないの?」笑顔で言われた。

千咲「女の子にやらせようなんてね・・・」笑いながら、千咲も言う

中村「・・・喜んでやらせて頂きます」

美月「それでよい・・・30分!!!」武器を手に持ちながら言う。
てか、あれ? 俺のトカレフじゃん!!!
奪われた・・・

その後、僅か五分、遅れただけで、怒られた。
不器用なのになんばつたんだよ!?

美月「味はまあ、普通より下ね・・・」

何様だー!!!

千咲「まずくもなく、旨くもない」
おまえまでかぁー!!」

ちつくしょう・・・

それは、さておき・・・出発の時

中村「じゃあ、いくぞー」

千咲「さようなら、おとうさん、おかあさん、」千咲は何か呟いたが、聞かなくてもよかったよな・・・。

中村「今日は美月の家か・・・どう行けばいいの？」

美月「ついて来な」

ついて行くこと30分・・・

中村「おねーサン、まだですか？」

千咲「うっさいわねー!!!!」

美月「生憎まだまだだよ!!!!」

中村「ええ!? 疲れたよー!!!!」俺は言いが皆無視をする。

そのとき、皆が見る方向を見ると

細かく、刻まれた肉片と葉莢らしき物がたくさん落ちていた。

中村「ここは、もしかして・・・」

美月「昨日のラジオでやっていたところだろうな。」

美月「見る、テレビ局の車があるぞ」

美月の指差すほうを見ると、確かにあるが・・・

一体、こんな、状態まで、どうやって切り刻んだというのか?

と疑問に思い、辺りを見回していると、人影がこちらに近づいてきていた。

間違えなく、人ではない、角が生えた頭に右手に生えている、日本刀のような形の刃、全身から出てきている触手・・・まただ。

中村「また、新型さんのご登場だな」嫌味たっぷりにそう言う。

こちらが構えるとすぐに突っ込んできた、速い・・・
美月たちはすぐにその場から移動する。

しかし、標的は俺。

俺は反応が遅れてしまったが

第一撃は後ろに下がることで回避、二発目は左腕を少し切られた。
もし、斬られていたらと思うとひやっとする。

中村「くっ!!!」

中村も攻撃を食らわせようと連続で攻撃を開始する、抜刀、縦、斜め、横と攻撃をするが全てその刃によって、落とされた。

強い・・・こんなことって・・・前もあつたな・・・。

気が逸れた時、足を払われて、倒れてしまう・・・。

この技・・・は柔道のか懐かしい・・・よく授業で横沢にやられたな。

相手を凝視すると血まみれだがうちの制服と似たような物を着ていて、その顔も髪は抜け落ちているが見覚えがあつた。

制服には先生にばれないように改造してポケットを増やした跡が見られた、随分ポロポロになっている。

俺は悟つた、これはまさしく、横沢であつた。

中村「お前も感染したか・・・なぜ？こっちまで来た？」

中村「学校からココまでどのくらい距離あるとおもってんだよ!？」
牛刀をベルトから抜いて、投げるがあっさりと首を曲げるだけで避けられる。

美月たちはコイツの正体に気づいていない。

二人は武器を手に殴りかかったが全て、刃によって落とされていた。

美月「なんなんだ！こいつ！」攻撃が当たらない苛立ちから言葉が荒くなっている

俺もまた立って、攻撃を食らわせようとするが・・・隙がない。敵の攻撃を避けるのが精一杯だ。

防戦一方になっていた、避けるのもきつくて、体にどんどん傷がつけられている。

なぜか、そいつは俺のほうしか狙わない、触手が急に出てきて、足を掴んだ！！！

敵が攻撃をしようとするが、一発の銃声がすると、離れた。

弾は触手に当たって、離れた。

銃を撃つたのは美月だ・・・さっきの悪ふざけのときから奪われたまま、だったのだ

だが、また敵はこちらに突っ込んでくる。

相手の一撃を木刀で防ぐと綺麗に柄の所より上が折れてしまった。

焦る俺、それをチャンスとばかり、俺を斬ろうとして目前まできたが俺の前で止まり、言う

「そ・・・うい・・・ちい・・・らおう」

なんだ？と思うとまた、斬ろうとしてきたのでバックステップで避ける。

また、美月がトカレフを連発していたが全て避けていた。

化け物だ・・・これが自衛隊の一つの部隊を消すほどの力か・・・

中村「お前らは逃げろ！！！」と叫び、落ちていた牛刀を拾い、構えて、走っていく。

千咲「そんな！！！」

美月「だめだ!!!」
二人は逃げようとする。

中村「いいから、行け!!!」また、叫んで斬りつける、牛刀を叩き落される。

中村「くそ、限界だ!!!」敵が前に来て、止まり、不適に笑ったとき、

また、銃声が聞こえる。

今度は化け物の刃に当たり、綺麗に折れた、そして次は頭部に当たって、絶命した。

後ろのほうを見ると、美月は銃を構えていない、一体、誰が・・・と思うと、誰かが走ってきた。

その人は自衛隊の人だった。

男「無事か？あんなの相手に良くやってたな!!!」

そして、無線で話し始めた、ターゲットを倒したとか言ってるから、そのターゲットはコイツだろう・・・

てか、木刀がダメになったことを思い出す・・・さっきの化け物の刃を使えないか、調べると・・・

ダメだと思つて、木刀の柄を捨てると、その刃から触手が伸びた!!!

警戒するが、木刀の柄を取つてくつついた!!!

そして、手に取つてみると・・・重くもなく、使いやすそうだった、刃と柄の境が溶けたと思つたら、すぐに固まったので、コンクリートに打ち付けてみたが柄と刃は離れなかった。

<総一郎、横沢だ！生き残れ!!!>と聞こえた気がした

中村「ありがとな、横沢」

美月「何か言つた？てか何それ!？」

中村「新しい、武器だあ」

美月「それ、大丈夫なの？」

中村「だが、この刀が俺を選んだように感じるぞ……！」

衝撃の敵（前書き）

作者もなんだか、話の流れなどがわからなくなってきた。．．．。

衝撃の敵

化け物の掃除が終わった後、なんと、装甲車で途中まで送ってくれた。

場所は車内

男「いや〜大変だったね、君たちも」俺らがここまでの一部始終を言っとそう言われた。

軽い口調だな・・・この男は中島と言っらしい。年は30ってところかな？優しそうな感じだな、名前が俺と少しかぶっているのは気に入らないがな。

中村「あの化け物は何者だ？」疑問に思っていたので聞いてみる。

中島「あの化け物は・・・お前らが逃げてきた 町からやって来たんだ」

千咲「何、言ってるの？」

美月「あんな奴、見なかったぞ？」

中島「そうだな・・・アレは俺らの仲間が 町に強大な熱源が見つかったから、無人の調査機を送ったが破壊されたので調査に行ったとき、俺も部隊の中にいた」

中村「昨日か・・・やすんでないのか？」

中島「ああ・・・そのときに奴が俺以外を全滅させたのだそれで応援の部隊と追ってきたというわけだ」

美月「あいつも化け物の変異したものなの？」

中島「なぜそう思う？」

美月「奴は化け物とはまた空気みたいなものや内面的なものが違うように思えた」

中島「確かに奴は化け物とは違うものだ」
中島「話してやろう……」

中島「そう、奴はウイルスが原因なんかではない、お前らの学校にその熱源があったのだが、ねっげんだけじゃあ、俺らは動かなかつただろう……」

中村「では、なぜ？」

中島「笑うなよ……？宇宙人から連絡があった」

千咲「はあ？何言ってるの？」

中島「なんでも、侵略に来たらしいな……、このバイオハザードも奴らのせいだ……これはその宇宙人の生物兵器だ」

中村「それで、あいつはその宇宙人？」

中島「そんなところだ、奴らは植物型で既にお前らの学校の旧校舎を中心に大きくなっている……それに一人、男子学生が取り込まれたのが目撃されている……」

中村「それが奴か……」横沢を思い出す。

中島「そうだ……着いたぞ」車を停めた。

途中までのつもりが……美月の家まで連れてきてまで貰ってしまった。

ちやつかり美月も道を案内してたし……「途中まででいいです」とか言つてたくせに……

美月「ありがとうございます」

中島「いや、大丈夫だ、中村君には是非、一緒に戦って欲しいな……これ、まじめだぞ……」

中村「なぜ？俺が……」

中島「あんな化け物を相手によく動いてたしね……」

中村「わかりました、必要になったら、ここまで来てください」
中島「わかった、じゃあな」

装甲車が走って去る。

さて、ここは・・・マンションか

中村「いくぞ・・・」

美月・千咲「うん!!!」

だが・・・ここも見事、もぬけの殻だった。

血や死体もなく、鍵も掛かっていたから無事だといいが・・・

美月「きつと、無事よね」残念そうだ

千咲「きつと、大丈夫よ!!!」

中村「こつちは自衛隊も近くで展開してたみたいだし、化け物も少ないだろうから大丈夫だよ」

美月「うん!!!」(おお!!滅多に見れない最高の笑顔・・・)

中村「ひゃっ!!!」今度は水をかけられた。

美月「この・・・へんたいがあ!!!」

中村「うぎゃあ!!!」

グーだ、

中村「いてて、うわ!!!まっ」

美月は椅子を構えていた!!

連続で食らった、それで、俺の意識が途切れた。

中村「ん、うとう、いてて」俺が起きると、夜になっていた・・・
この状況、前もあつたな。

美月「おお、起きたか・・・いつまで寝てんだよ!!!」少しは申

し訳なさそうにしるよ!!!

二人はラジオを聞いていたみたいだが、なんだか、暗い

美月「あんたも聞きな!!」

中村「え?」言われたとおり、耳を傾ける

よく聞いてみると.....

衝撃の敵（後書き）

これから・・・内容が薄くなることが予想される・・・

感想とかお願いします

黒幕出現、新たな疑問、俺は狙われている!? (前書き)

放出!!!

内容はつまらないが・・・

黒幕出現、新たな疑問、俺は狙われている！？

男の声「・・・これは地球人類に対して降伏を求めます」

はあ？何言ってるんだ？

男の声「もし、この要求が、本日、午後、一時三十分までに通らないなら」

中村「・・・・・・・・」

三人とも真剣な表情・・・

男の声「人類を徹底的に我らと人類の合作となった、今回こちらで流行している生物兵器で」

生唾を飲む音がする。

男の声「地球人類の抹殺計画を実行したいと思います」

女「このように宇宙人は侵略を目的としています、要求が呑まれなければ、抹殺とも言ってます！！！」

女「今回の生物兵器も彼らが地球のウィルスと彼らの生物兵器を組み合わせて作ったと政府は発表しています」

俺がスイッチを切る。

中村「やばいことになったな・・・」

美月「どうするの？これから・・・」

中村「とにかく、戻るぞ！！！」

中村「明日の朝一で車で移動だ！！！」

美月「わかった・・・」

千咲「みんな、無事か早く知りたいね」

中村「ああ……」

そして、翌日

中村「さつさと食べちまえ……」

千咲「ホント、起きるの早いよね」

美月「すごいよね……」

中村「いいから、はやくしろよ」

急がせる……ここに着いてから随分経ってるし……
外を窓から見ると……

やはり、集まってきたるな……

中村「やつぱ、ゆつくり食べてていいよ」

千咲「なんで？また、急に……」

中村「かるく、掃除に行ってくる」

美月「じゃ、わたしも……」

中村「ハハツいいよ、ホントに少しだから……」にやりとついで笑いながら言う

美月「……？」不思議そうな顔で居る
手をヒラリと振りながら、部屋を出る

中村「さて、こいつを試すときだ……!!」

中村の手には昨日手に入れた刀が握られている

中村「たぶん、この刀、切れ味さがらねーぞ……!!」

鞘は触手が刃に絡みついたと思ったなら固まってできていたのだ……!!
俺、この刀に気に入られてんのかな

ご機嫌で、敵地に向かっていく……（映画とかでもこんな奴、見たことねー!!!）

鞘に収めたまま、抜刀術の時のように刀を構える。
あまり重くはない。

中村「さあ、お前の力、見せてみよ!!!」

跳躍!!!

敵の前に舞い降りる。

そして、鞘から抜いてまず横に斬りかかる。

そして、頭から股まで振り下ろす。

すると……敵が四等分された!!!

中村「え!?!」

あまり強く力を掛けたつもりはあまりなかったが
斬れた!!!

こいつが斬れすぎるほどすばらしいことはわかったので
後のために掃除を開始する。

中村「H A H A H A!!!こいつはいいぜ!!!」

豆腐のようにスパスパ斬っていく

敵の中には斬撃に強い奴もいたが
斬れた

わずか5分で敵を殲滅。

俺は刀の血をハンカチで拭く

そこそこ、集まっていたが……あっという間だな!!!

俺は成果に満足しながら帰っていく
俺、チート武器、手に入れたぜ!!!!!!

中村「ただいま〜!!!!!!」

美月「なんだ!?!キモツその顔やめろ!!!!!!」

中村「何だ?顔おかしい?」笑顔でそう言つと

美月「すごく、キモイ!!!!!!」

千咲「何かいいことあったの?」

中村「へへへ、後からのお楽しみ」

美月「そっぴや、帰ってくるの早すぎだろ!!!!!!」

中村「そうかな?」

千咲「ええ!?!マジで言ってるの?」

美月は窓のほうへ行き、外を覗く。

そして、顔が驚く

美月「お前!!!!!!どうやった!!!!!!?」美月が叫ぶ

中村「ふふふ」

千咲「え?なにになに?」

千咲も覗きに言つて驚く

千咲「えええ!!!!!!どうなってるの?」

中村「昨日の化け物の刀だ!!!!!!」

美月「あれか・・・使つても大丈夫か?」

中村「さあ?けど・・・」

千咲「けど・・・?」

中村「おしえなーい！！！」

美月「なんだよ!？」

中村「とにかく、急ぐぞ！！！」

そして、出て行く。

だが、敵はまた集まっていた。
しかも俺を集中攻撃してくる。

中村「どういうことだ?二人は車を持ってきてくれ！！！」
俺は空を飛ぶやつを斬りつけながら叫ぶ

美月「わかった、あんたなら大丈夫だろう!!！」

千咲「持ちこたえてね」

中村「フツまだ倒れるわけにはいかねえよ！！！」
敵の爪を避けながら呟く

そして、その爪の主のところに一歩で近づいて、首を刎ねる。
首がポトツと音を立てて落ち、その後、今度は胴体が崩れる。

そして、戦うこと5分、敵はどこから沸いてきているのか疑問に思う
ほど溢れていた
だが来てるのはゾンビとわずかな化け物のみだった。
刀には殆ど血が付かず(ゾンビは血が出ない)切れ味は落ちる気配
がまったくない

その時、軽自動車が突っ込んできた!!!

美月たちだ!彼女たちは車を俺の前に停める。

美月「乗れ!!!」

中村「まってました〜!!!」と言って、後部座席に乗る。
車は発進する、できる限り、敵はひかないようにしながら・・・

中村「なんで轢いていかないの？」

美月「前になんかで轢くと横転するとか言ってたような気がするから・・・」

千咲「へえ〜」感心したように言う

美月「随分前だから実際どうかは忘れたけど・・・一応ね!!!」

そして車は走っていく・・・

そして、問題もなく、俺が借りてきた（盗んできた）車を置いて来た、車で道が塞がっているところまで来た。

中村「こっちに来て、戻ってくるのに時間、かかったな」

美月「だって、あんな化け物も相手にしたんだよ!？」

千咲「はやく、戻りましょ」

そして、俺らは車から降りて、進んでいく。

中村「ちよつとまで、向こうからくるのは・・・?」

千咲「え!?なに?」

俺は双眼鏡（以前使った、片目タイプ）を使ってみると・・・

中村「装甲車だ!自衛隊のみたいだな」

美月「中島さんか?」

中島「乗れ!!!送ってやる、ここは危険だ!!!」

中村「え・・・」

中島「逃げ!!!爆撃されるぞ」

それを聞いて、とにかく乗り込む。
車が発進する。

中村「どういうことですか!?!」

中島「この町からも大きな熱源が発見されたが、火事などはおきいていない場所にあつたから宇宙人だと認識して、爆撃を行うことが決定された!?!」

美月「そんな!?!? 避難所の方は?」

中島「もちろん、避難させた!?! 町で隠れてる人は救助活動が行われているから・・・助かるといいが」

中村「それで!?! 何かほかに情報は?」

中島「世界中にUFOが出現したそしてアメリカが軍で攻撃を開始した!?!」

中村「まだ続いているのか?」

中島「ああ、それで交渉は引き裂かれた、従う気もないがな・・・俺はラジオを付けた」

「アメリカが核を使用したと情報が入ってきました」
一同驚く

「しかし、UFOに変化はまったくないようです。」

そのとき、ガタンと音がしたかと思うと窓に人の顔が・・・ゾンビだ窓を割ろうとしている。

中島「くそつなんだ!?!? コイツ!?!」

振り落とそうとするが離れない、

中村(ゾンビを観察しながら)「コイツら!?! やはり、俺を狙っているのか?」

ゾンビはこちらを攻撃しようはずっとしている。

この刀のせいかな？

車が急停止する。ゾンビはついに振り落とされた。

中島は9mm拳銃を構えてそのゾンビを撃つ。

ゾンビの頭に穴ができて、動かなくなる。

しかし、ゾンビはコイツだけではなく、辺りから出てきた。

中村「多いな、だが」俺の顔が笑う。

そして、刀を構える

中村「今の俺に数なんかカンケーねえ!!!!」

化け物に突撃!!!!胴体を横に真つ二つにしてやり、俺の後ろにいる奴の首を振り向き際に斬りおとす。

中村「うおー!!!!!!」

突撃して、斬り、どんどん、死体の山を作るが一向に減らない・・・

中島「もしかして、こいつらのボスがあいつを倒したから・・・君を殺そうとして・・・」

中村「やっぱ、そう思うか!?!」

美月「総一郎!!!!後ろ!!!!」

中村「え?」後ろを振り返るとゾンビが歯をむいて、後ろに立っていた。

慌てて斬るが今度は足元から来た!!!!

中村「下だ!!!!!!気をつける!!!!!!」皆に叫ぶ。

美月「きゃっ!!!!」美月が足をつかまれた!!!!!!

千咲「美月!!!!」千咲は助けようと走るがこちらも足を掴まれて、

倒れてしまっ

俺は助けようとするがゾンビが壁となり、近づけない。

中村「どけー！！！！」叫び、斬って、道を作ろうとするが、またゾンビは現れて、塞がってしまっ。

美月、千咲はまだ噛まれていない

そのとき2発、銃声が響き、二人は魔の手から開放される。

中島だ！！中島が銃を構えて、立っていた。

そして、俺に敵の注意が向く、その隙に中島は装甲車に近づいて、美月、千咲を乗せて、俺をピックアップしようと、近づいてくる。

俺は目の前の奴を倒し、装甲車のほうを見るとドアを開けて、美月が俺に手をつかむようにさせる。

来た！！！！

俺はその手に掴んで装甲車に乗り込む。

そのまま、走って、また俺らは戦場から去る。

あっやっぱ、そうですか、ターゲット……（前書き）

はい、どうも、もうすぐ試験があるので更新速度がさがってます、話の変なところが満載になってます。

指摘していただくとありがたいです。

なおしますが、装甲車から高機動車に頭の中で変えて置いてください。

調べたら、想像とちがうものでした……

ごめんなさい

あっちゃっぱ、そうですか、ターゲット……

道が悪くて、ガタガタ揺れる車内

美月「なんで？なんで、あんたがねらわれてるの？」不満そうに言う。

中村「俺がああ化け物、倒したからだろ……危険要素としてね」
千咲「……だからって」

中村「自衛隊の部隊を壊滅させる奴が倒されたんだ、目をつけられてもおかしくない」

中島「どうする？このまま、戻ると、ゾンビを君たちの本拠地まで案内することになるかもよ……」

中村「というか、ゾンビに個人だけを集中的に狙うぐらいの頭があったのか？」

男の声「ゾンビは完全に我々の言うことを聞くようにしてある」「ラジオから声が聞こえたと思ったら、男の姿のホログラフのようなものが現れた。

一同驚く。

中島「なんなんだ？お前は？」

そのとき、ラジオが流れた。

アナウンサー「ついに、午後一時、30分です。」

男の声「要求は通らなかつた、ようですね」

男の声「来週の月曜日……人類抹殺計画を始動します」

アナウンサー「ここで、まだ、宇宙人からの話は続いていますですがアメリカ軍にUFOが攻撃を開始したとの情報が入りました！！」新

しい情報だ、さすがアメリカ!!!

男の声「この猶予期間に我々の全勢力、ゾンビと人類から奪った力を集結させます」宇宙人は最後にそういった。

そこでラジオは途切れるがホログラフはまだいる。

中村「つまり、そこが決戦の会場・・・」

男の声「そつだ、お前・・・を殺しに掛かる」俺のほうをすごく見
てくる・・・。

美月「なぜだ!?」強い口調だ

男の声「我々には人類を抹殺することなど容易だが・・・コイツは
そうもいきそうにない」ゾツとするほど冷たく、落ち着いている声
で言われる。

千咲「・・・なぜ?総一郎が?」千咲が聞く。

男の声「あの横沢を倒したのだからな」

美月「?」その言葉の意味が分かっていないようだ。

中村「あの化け物・・・制服着てたる?俺らと同じやつ・・・恐ら
く、横沢だ」俺は男を見ながら言う。

美月「うそ・・・」ショックを受けたような表情だ

男の声「あ、そういえばお前の能力も上がってきてないか?」

中村「・・・」何も言わない

男は続ける

男の声「それは我々にも原因はわからないが・・・危険因子は潰さ
ないとな・・・ではさらばだ」それを言い残して
ホログラフも消える

また、ラジオが流れる・・・

アナウンサー「来週の月曜に抹殺を開始するそうです」

一同「……」

アナウンサー「今、入った情報です、日本以外の国では抹殺が開始されました。相手は……植物の触手だそうです……」

「アメリカ軍も苦戦をしているようです……」

アナウンサー「詳しい……じょじょうほ……なんですか？これ……ああああ！！！」

ラジオの電波がおかしいのか？

そして、しばらく、人の悲鳴がしばらく続いた後、ラジオは静かになる。

別の番組もおなじようだ……（もともと少ない）ラジオも使えなくなつた。

人間は情報が塞がれてしまった……。

俺はラジオを外に投げ捨てると、周りを見ている……車は自宅付近に近づいていた。

そして、俺の家に着くと、家の周りには死体が転がり、2階の窓からは矢が発射されて、ゾンビを撃っていた。

美月「交戦中！？」

そこにクラクションを鳴らして、停めてもらおう。

俺は千咲、美月に待つように言つて（また反論されたが無視）、高機動車から降り、玄関に向かう。

玄関の方には壁と庭の地面に大穴が開いていた……

中村「おいおい、これ、崩れるんじゃないか？」と呟いて、さつき矢が飛び出していた二階に向かうと、皆居た、森が話しかけてくる。

森「遅かつたな！無事でよかった……ここは駄目だ！！！」

中村「なにがあつた！？」聞くが大きな音が再びして、声がかき消

される。

森「とにかく、何とか逃げないと」と森が言った瞬間、ツルが一階から伸びてきた!!!

そして森の足を掴み、引きずり、さらおうとする。

森「うあ!!!」

俺はツルを刀で切る。

中村「下に高機動車があるが全員乗れないな・・・」

哲「とにかく、逃げないと!!!」恐怖で冷静ではないようだ・・・。

中村「たしかに、いつ崩れるか・・・行くぞ!!!」俺はそう言っ
て、一階に駆け下りて、玄関から出て、ゾンビを切っていく。

森もバットで応戦する。

森「いいもん手に入れたな!!!」

中村「まあな」つつい、ドヤ顔で言う。

皆が次々家から出てくる、家のほうにはツルが巻きついていてた。

中村「コイツが・・・例の植物か・・・」

中島はその植物に向かって、ライフル（名称は詳しくないのでわからない）を撃っていた。

当たるとツルは切れていたがすぐに伸びてしまう。

女性陣を高機動車に乗せて、男は走って行く

そして、走って、ものすごく近くの公園に行く。

奈々「どうするの？」

中島「みんな!!!別の部隊と連絡がとれて、俺らを回収できるぞうだ!!!」

哲「よかった・・・」哲は安心した表情になる。

中村「ラジオ、聞いたか？」問いかけてみると哲やみんなは暗い表情になった。

奈々「聞いたよ……」

森「そうだよな……今、助かってもね……」

美月「ばか！！！！KY！！！！」

中村「それだが俺も殲滅に向かうことにした！！！！」俺は宣言した！！！！

皆（中島以外）「ええええ！！！！」ものすごく、驚かれた……。

皆は驚いていたが、この運動能力がハザードが起きてから上がり、この刀が俺の味方をしていることなどから俺はこの問題からは逃げられない、無関係ではないと思っっている。

それに、逃げたりしたら、横沢に殺されちまう！！！！さらにこいつらを守るかもしれない！

あつやっぱ、そうですね、ターゲット……（後書き）

感想、批評なんかも御願ひします

想定外（前書き）

短めです

あとキャラの紹介、更に増やしました

想定外

中島「おお、総一郎君！！来てくれるかね？」

総一郎「さつき、言ったとおりですよ」

「俺は戦いますよ！！」

中島「なんて心強いんだ！！」

美月「けど、……それじゃあ、総一郎の安全は！？」

中島「それは……保障できないな」

美月「じゃあ……」

総一郎「奴らは俺らを滅ぼすと言ってるんだ」

「できることはやるぞ」

美月は不満そうだ

千咲「そうね、なら……」

言いたいことは分かるぜ……言い切る前に言う。

総一郎「いや、お前らはこれから行く避難所に残れ」

哲「なぜだ？」

総一郎「お前らは残って、避難所を守っとけ」

奈々「嫌、私たちだって、今まで……」

総一郎「これからが本当の戦いだっただよ！！」

「ここで死なれたら、今まで頑張ってきたのが台無しだよ」

奈々「でも！！なんで総一郎がいくの！？」中島以外は不満そうだが
こいつらはどうしても止めたいらしい。

総一郎「いいから、行かせて、ね？」

ピピピ、ピピピ、ピピピ

中島が無線で話し出す。

総一郎「とにかく、移動だな」切り替えて言う。

中島の通信が終わった、近くに居るらしいが車が邪魔でこちらまで来るのが困難らしいだからその場所まで徒歩で移動になった

皆、嫌そうな顔をするが仕方ないだろと俺と中島さんで言う。
しぶしぶ、承諾してくれたが俺の宇宙人殲滅には不満らしい。
集まる場所は幸い、近くだ。

俺の家以外はゾンビがいない。

私の家の方にいつてるのか……

俺のこと狙いまくってるな……許さん!!!

世界を混乱に落とすだけでなく……俺の家を破壊するなんて……
ゆるさん!!! 保険金とかでるかな? ゆるさん!!!!!!

新たな闘志が沸いてくる。

てかム力つくな!!!

そして、なんやかんやでゾンビとは遭遇せずに目的地に着く。

……そんなに私の家の破壊はおもしろいか?

そして、多くの自衛隊員がいたが……ガラが悪い……。

気のせいかな? すごい目で睨むように見られた。パツと普通の目つきに戻ったが……イカンイカン、疑心暗鬼になってる

そして、バスに乗せられる。

そして、バスに揺られること30分

先ほどから美月たちをニヤニヤしながら見ているこの自衛隊員が気

になる……。

全員、89式を持っていた。

統一されてるものなのかな？

さすがにそこまではわからない

つい、怪しいと思う奴の装備（武器）を見てしまう……。癖だ、仕方ないが……。

美月が俺の方を叩く。

振り向くと耳に一言だけ呟いた。

美月「まずい」

俺はそれに対して口パクで「何か読めたか？」というところ……。返事を聞く前にバスが停まる。

そのまま、聞けなかった……。

そして外に出る。

そこは避難所ではなく……。

総一郎「何、ここ？」

倉庫のようだが……

その時、中島に銃を向けられる……。

中島「動くな！」

総一郎「はあ？」状況が飲み込めない。

中島「武器を捨てる！！！」

勢いに押されて、言われるがままに刀を捨てる。

美月「だから言ったじゃない！！！」俺に呟いてくる。

そのまま、俺らは全ての武器を取られた、というか自ら捨ててしま

った、そのまま、言われるがままに倉庫の中に連れて行かれる。

総一郎「貴様あ！！！！敵だったのかあ！！！！」中島に言う。

美月「ひどいわ！！！！私たちをだましたのね？」美月はふざけているように言う（嘘泣き付き）

森「ふざけてる、場合か！？」ツッコミを入れる。

中島「うるせえぞ！！！！」銃を向けて、威嚇して言う。

黙って付いていくとドアの前に着いた。

中島「入れ！！！！」

俺らはおとなしく入る。

はい、監禁されました。

哲「どうする？」

総一郎「まで、何か、探せ」

部屋の搜索を開始するが

総一郎「ないか？」

森「だめだ！」

哲「同じく」

千咲「これは？隠し持ってたけど・・・」差し出したのは果物ナイフだ

外を見ると見張りは一人のようだ・・・

総一郎「ナイス」そして、一言

「休んどけ」皆は疲れてるだろうからね・・・

一応向こうは武装してるし・・・

俺は眠れなかった・・・

そんな時、会話が聞こえてくる。

「聞いたか!？」

「なにを？」

「あの娘たち、明日の晩の儀式が終わったら・・・」

「なんだよ?もったいぶるなよ」

「好きにしていいらしいぞ」

「まじか?いやゝあのカールしてる子いいよね?」

「俺はあの童顔の娘がぐへへへ」

その会話を聞いたとき、俺のなかで何かが切れた
下品だサイテー、あいつら死刑なと心に刻み込む
しかし、儀式とはなんだ?という疑問や

中島たちはどうやって、町を爆撃したのか?

あの様子だと全員、自衛隊員には見えないしそんな兵器も持っているのか?

そして、なぜ我々をその爆撃からたすけたのか?

疑問も上がるが眠気に全て飲まれて、意識が遠のいていく

そして、夜は過ぎていった

想定外（後書き）

まだ、テスト期間ですので

脱獄、足元には気をつけな

捕まっつてから、一夜が明けた

総一郎「ん．．．くう」俺は目が覚め、伸びをする。

美月はすでに起きていた

美月「起きたか？」

総一郎「ああ、忙しくなるぞ」笑いかけながら言っつ。

バン、ドアの開く音がした。

そして足音が聞こえる。

そして、俺らが閉じ込められている部屋に3人入ってきた。

40代くらいの男が入ってくる。ほかに二人、ライフルを構えて、入ってくる。

そして、口を開く

男「お前が総一郎か．．．中島を助けてくれたらしいな」

「がお前だな？洋平殺したのは．．．」

総一郎「？」誰かはまったく分からなかった。

哲が俺に囁く、「伊藤だよ、銃持ってた．．．」

思い出した．．．迷惑極まりない奴のことか．．．

男「くつこの．．．」殴りかかってくる

今の俺がそこらの人間の攻撃（それも素手）を喰らうはずもなく、難なく避ける

男「はあはあ、まあよい．．．」

「今晚、大いなる力により、殺してくれる．．．」

そして、部屋から去っていった

総一郎「めんどくさそうだ・・・」

森「もう、面倒な事態でしょ？」

ナイスツッコミですと心の中で褒める

総一郎「今日の作戦だ」

そして、説明をした

千咲「そんなの通じるの？」

総一郎「単細胞しか居ないだろうから・・・イケル!!!」

.....

総一郎「うわー!!!」

見張り「うるさいぞ!!!」

ノコノコ入ってきた・・・銃は構えているが・・・

奈々「助けてください、総一郎がとても苦しんでいるのです!!!」

見張り「ああ？知ったことか・・・そいつか？」俺の横に立つ

美月「なんでもするので助けてください!!!」

見張り「なんでもか・・・なら」そう言って、美月のほうを向いて、
近づく

その時、俺は立ち上がり、見張りに近づき、その首にナイフを突き
刺す

総一郎「こんな手に引つかかるなんてな」

美月「こんなベタな作戦立てるあんたもあんだだよ・・・」

総一郎「そうか？それよりも行くぞ！」

俺は見張りの服を借りる

こいつらは一応、自衛隊の迷彩の服を着ている

総一郎「重つコレ本物のチョッキ入っているのか？」

哲「もう一着たのむよ!!!」

家族の方々「気をつけて・・・」

小野寺父「力になれなくてすまない・・・」

総一郎「いやいや、怪我したらまた活躍してもらいますよ？」

小野寺父「任せてくれ」

奈々父「私も今回は戦わせてもらっよ」

総一郎「ありがとうございます、ここで耐えててくださいね」

今回の作戦のPART2はこうして一人ずつ、変装して、敵をある程度倒していくというものだ

総一郎「よう」

そう言つて、近くに居た奴を背後から首を絞めて、倒す

そして、皆の居る部屋に連れて行く、服を脱がせて、奈々の父にそいつの持っていた9mm拳銃と一緒に渡す

総一郎「ご協力お願いします」

そこから、倒しまくつて皆、迷彩になり、行動を開始する

森「こつちだ」

森が敵を倒しに行ったとき、俺らの武器が置いてある所を聞いたらしい。

見張り「ん、何だお前ら、ぞろぞろと・・・どうした？」

総一郎「ああ、少し抜け出して、酒でも飲もうかなって一緒に来るか？」

と言いつつ、正面に近づいて、顔面にパンチ、手をひねって、体を投げて、金的に渾身の蹴りをお見舞いする。

見張り「ぐふおあ」

見張りは目を閉じて、動かなくなった

その身体を適当なところに隠して、何事もなかったように俺らの武器があるところに行く。

森「あれだな」

総一郎「ちっ」

テーブルの上に俺の刀（NEON・SWORD）（たったいま命名さらに略すとNNS）が置いてある

総一郎「あれさえ取り返せば後は逃げるだけだ」

がたっ

見張り「だれだ！！！」

総一郎「やべっ」

何か踏んだ！！！そして見張りは89式を構えてこちらへくる。

え〜と何かいい作戦！！！

思いつかねー！！！！

そして、作戦変更

パン 一発の銃声が響く

そして、俺の手には9mm拳銃（うば・・・貰ったもの）

美月「総一郎！！！」まさかこうするとは思わなかっただろう

敵「うお、撃つてきたー！！！！」

総一郎「ガンガンいこうぜ！！！！！」

皆「えー！！！！！！」

皆さんの驚く表情が見える

敵さんも俺に恐怖の眼差しを向けていた

総一郎「H A H A H A 付いて参れ！！」

俺は89式（死体からうば・・・拝借した）を構えて、残っている、見張りを即座に潰す
森「うわー」銃弾が飛んでくる

敵が遂に気づいたようだ

千咲「どうするの!？」

総一郎「さっ逃げましょ」

千咲「逃げましょって・・・」

総一郎「FIRE!!!」そして、撃つ!!!
相手はどンドン倒れていく・・・

その時は知らなかった、あんなのが居るなんて

さっきの40代の男だ

男「そこまでだ!!!」

「ふふふ、さあ儀式は早くなるが仕方ない・・・」

「こいー!!!」

男は両腕を天に向かって上げた

その時、空からUFOが現れて、男を光で包んだ

男「ぐあ!!!ぐふふふ、ああああ!!!」

男が叫ぶのと同時に身体から触手が出てきた

奈々「きゃっ!!!」

辺りに血が飛び散ってグロイ

総一郎「なんて、気だ!!!」

美月「何言ってるの?ふざけてる場合?」

だが相手にはかなりの覇気がある

総一郎「とりあえず、逃げろー!!!」

触手から逃げる!!!

森「うーわー!!!」森の足元に銃弾が突き刺さる・・・被弾はしてない

総一郎「さっきからうるさいぞ!!!」

森「だって〜てかどんだけ冷静なの!？」

総一郎「先に行け、車を用意しろ」

先には逃げようとしている、偽?自衛隊員がいる

哲「何言ってるんだ?来いよ」

総一郎「見る、小さいし触手を伸ばしているだけだが大きくなっている」

「まだ幼態かもしれん、倒せるかもしれん、やってみる価値はあるぞ」

そして、89式の弾をばら撒きながら、元男に向かって、走り出す

森「待つんだ!!!」森は無視をして足を止めない、俺には絶対倒せるような気がするのだ

弾を撃ちつくしたので89式を捨てる

そして、NNSを構え、向かってくる触手を刻みながら行くと・・・

地面からも触手が出てきた

総一郎「げ!!!」

足を捕まれ、転んでしまう、そのままズルズル引きずられるが触手が斬れた

横には長い棒を持った影が・・・そう美月だ

美月「参上!!!」ってね」

「さ、倒しちゃいましょ」

そして、戦いが始まった

背後からは大量の矢が降ってくる
奈々や哲だ

哲「オラ！！！！倒してしまえ！！！！」キャラじゃないな・・・な
んかね

そして、今度は爆撃が来た！！！！

そちらを見ると 無反動砲を持った森がいた

総一郎「も・・・森・・・」

「あぶねーじゃねーか！あほー！！！！」

森「ええええ！！！！」

そして、走り出す、そしてさっきの男が見つかった

美月「ふふ、こいつでおしまいよ」

総一郎「そう簡単にいくかな？」

男「ふお、ふあお、ぐるるる」

総一郎「すっかり化け物の仲間入りだな」

そして俺と美月は近づき、俺はNNSを美月は槍を振り上げる

総一郎・美月「ジ・エンドだ」

振り下ろすが化け物（男）は避けた

総一郎「動けるようになったか！？」歯を食いしばりながら言う

美月「うっそー」

総一郎「どうやら化け物は成長をしているようだま、バイオハザードにはよくある展開？で特にこの作品ではありえないくらい多いな
仕方ないか・・・」

美月「何言ってるの？」冷たい目で見てくる

総一郎「ハッここはどこ？何があった！？」

美月「ふざけてる場合かー！！！！」
怒られた・・・

ホント、覚えてないのに・・・

だがまだ戦闘中だったようだ・・・

総一郎「ふっいくぞ！！！！」

第二ラウンドが始まる！！！！

終戦（前書き）

随分・・・遅くなりました
ごめんなさい（読んでる人がいればの話だがww）

終戦

総一郎「化け物・・・ダークプラントはどうだ？」

美月「名前考えてる場合かあ！！！」

美月が足を蹴ってくる

総一郎「いたついたいよ！！！」

こんなことをやっているとはDPが突っ込んでくる

美月「わっ」驚きつつも、しつかり9mm拳銃で撃ち込んでいる

が、効果は無いようだ・・・

総一郎「よく考えたら銃効かない奴に勝てるだろうか・・・いや勝てない」

「いた！！！」また、蹴られた・・・敵も近づいてきているのに

美月「だつて～反語使うとかウザイじゃん」

「しかもいつものあきらめないぜ的な考えはどうした？」

総一郎「ふん、もちろん、そんな風に思っちゃいねーよ」
強がる、俺

美月が焦ったようにその場を離れる

総一郎「ん？なんだ？」

音もしたのでそちらを見るとDPがもうすぐそこにいた

総一郎「うーわ」モンハンでいう、緊急回避で避ける

「あぶねーコンニャロー」

NNSを構える

化け物を攻撃しようとするが触手が多くて隙がない

美月「どうする？」

総一郎「どうしようかー？」

「ホント、どうしよー」ポケットに手を入れるとボールのよ
うな感じのものがある。

美月「逃げる？敵は一応、被弾しても大丈夫くらい硬いみたいだ
し……」

総一郎「いいね……けどまだ、手はある」

向こうでは既に皆は3台位、用意しているようだ……

総一郎「行ってる、まだ、手はある……」「こちらには奪った手榴
弾がある、外からの攻撃はダメでも……内からならどうか？

隙があればの話になるが……NNSだと一刀両断できなかつたら
……と思うし

美月「なるほ……ど、手伝うわ」

総一郎「……後悔するなよ」今回はしっかり手伝って貰うことに
する。

その時、援護の矢などが絶える……辺りを見ると、ゾンビが侵入
してきていた。

皆は車をゾンビから死守するためか戦っていた。

美月「まずいわね、早くしましょー」

「こっちよー加齢臭でくさい、クソプラントー！！！」挑発し
ながら叫び、囿役をする。

総一郎「あの悪口、意味あるのかな？」この一言を言い、敵の視界
から逃れて、隙を伺う。

よく見ると男の頭部も少し原型を留めていて、口のようなものもある
……それは大きく、開きっぱなしだ。

……囿してもらってるがこれ……結局、意味あるかな？と思う
と美月が睨んできた。

読まれてたか……

その時、本気で美月を殺しにかかったのか触手が全て、美月の方に
向かった、
／／／／チャンス！！！！／／／／／

背後から手榴弾のピンを抜いて、ぶち込もうとしたとき・・・
ダン！！！！

倒れてしまった・・・何かがぶつかってきた。
空を飛ぶタイプの化け物だ！！！！

そんなことをしていると美月が追い込まれている。

総一郎「い・・・た！！！！コンニャロー！！！！」

「・・・あ」ピンを抜いていたのに気づいて慌てて投げる。
ゾンビたちはけっこう倒れてくれた。

美月は倒れている・・・その隙を狙い化け物が近づく。

手榴弾を取り出そうとポケットを探すがない。

NNSを鞘から抜いて、走る。

美月の足は動けないようだ槍で距離を取ろうと必死になっている。

総一郎「こつちだー！！！！クソプラントー」

まず触手をまとめて斬りおとしてやる。

そして、距離を置く

化け物「ヴオロロロロ！！！！」

聞いたことの無いような音で鳴く、こちらに注意を向けるのには成
功したようだ。

早速、触手が生え変わっている。

総一郎「化け物め！！！！」

一気に近づくと、触手が次々と俺を刺そうとして伸びてくる。ガツガツガツガと音を立てて足元に刺さっていく。それを跳んで避ける。

が一本の触手が跳んだ俺を突いてきて、俺の左腕をかする。その触手を斬りおとして、また、走る。

背筋がゾツとした。・・・もし当たっていたらと思うと・・・。走る速度が下がったようだ。足を引っ掛けた。派手に転ぶ。

総一郎「イタタ」

「・・・んん・・・あ!!」

敵が近づいてきていた。

総一郎「うわおおおお!!!!」

やばい!!!!触手がたくさん近づいてくる。慌てて立ち上がり、走って、距離を取る。

総一郎「危なかったな」

美月「ばか!!」

「何も解決して無いでしょ!!!!」

「ちゃんと片つけなさい!!!!」

総一郎「・・・わーてるよ」

NNSを構える。

襲ってくる触手を落とす。だが本体には近づけない。

総一郎「クソっ!!!!・・・俺の独り言しかセリフがない!!!!」

ドン!!!!爆発音と同時に化け物に何か飛んで行って、爆発した。

辺りに土ほこりが舞う

森「まだ・・・俺もいるぜ!!!」

総一郎「森か」

森「接近戦とか実は苦手なんだ!!!」

「早く終わらせろよ!!!」

総一郎「フツよく来たな」

「そろそろ、助けも欲しいと思っていたところだ」

そして、爆風による土埃に紛れて、本体の背後に行く。

森は上手く、触手を引き付けているようで、こちらには触手が見当たらない。

本体の真後ろに俺は立つ。

そして、一突きする。

化け物「ヒュルオオオ!!!」

また、鳴き声をあげる。

NNSを化け物から抜いて、今度は何度も斬る。

そして、また、突き刺す。もう余力も残っていない。

そこで、化け物は背後から触手を伸ばしてきた。

それが、俺の首に巻きつく。

総一郎「ぐっ」斬ろうとするがうまく届かない。

こいつを倒すしかないようだ

ここからは我慢勝負だ

俺は必死に何度も突き刺す。

敵も閉める力を強くする。

そこで一方が倒れる。

俺の方だ

.....

意識が遠くなつていく」「~~~~~」「何か聞こえてくる

「*****」何の音だ？

触手が緩んだ、目をゆっくり、開ける

化け物は俺とは逆の方へ進んでいた

俺はもう殺せたと思つたか？

その先には美月と美月を覆うように倒れていた

俺はフラフラと立ち上がる。

NNSを構えて、フラフラと近づく。

敵は俺に気づくのが遅かった

振り返つたときには一刀両断されていた。

総一郎「ついに終わったか」そう呟いて、真後ろに倒れて、そのまま

ま、意識が遠のいていく。

車が何台か来て、俺を乗せる。

そこで俺は眠ってしまったようだ。

終戦（後書き）

これからはゆっくり、投稿します。
ハイ

買い物(嘘)(前書き)

短めです

これから ゆっくり 登roomします

車の中だ。停車してるようだ。

総一郎「夢か・・・」

森「よう・・・起きたか」

総一郎「まあな・・・ぐっ」

体中が動かすらい。

哲「無理はするなよ」

千咲「ごめんね・・・あの時、援護できずに」

総一郎「お前・・・それより足、どうした？」

哲父「いや、このまま、安静にしとれば大丈夫だが」

奈々「美月の意識が戻らないの！！！」

総一郎「どうして!？」

哲父「今のところ、命に別状はないが・・・まともに検査はできないから・・・」

総一郎「今、何日？」

哲「世界中の時計が狂いだした・・・随分前からおかしくなっていたらしいが・・・」

「しかも奴らからの声明があった。」

奈々「かなり、計画的なようだ・・・当然だが」

千咲「また、ラジオよ」

「自衛隊もこちらに集まっているようで・・・日本本島のゾンビも全て、集結してるみたい。」

総一郎「はあ、俺も参加しないとな」

そろそろ、食料も危ないんじゃないか？

千咲「そうねえ・・・」

総一郎「ちよつと、行つてくるわ」

哲「俺も行く」

奈々「じゃ、わたしも!!!」

哲「お前はまってるよ」

奈々「だったら、総一郎君でしょ、待つべきは」

総一郎「何言ってるの？」

哲「そうだな、お前、働きすぎ残つとけ、お前が残るなら安心だし」

それだけ、言つて二人は1/2トトラック（たしか・・・73式小型トラックの偵察用？）に乗り込み、行つてしまった。

機関銃が付けてあったから大丈夫だろう・・・

千咲「見て、弾薬〱拾つてきたの!!!」

総一郎「拾つてきたつて・・・落ちてるみたいに言うなよ、物騒でシヨ」

千咲「八八!!!」

.....哲視点.....

今は車をコンビニに停めている。

行き先もまだ、よく決まっていなかったのだ・・・無駄なガソリンの消費をなくす為でもある。

哲「ん〜どうだ？何か店あった？いい感じの〜」

奈々、地図を広げながら、答える

「ん、ここはどうかな〜」

哲「げ、また、ケインスホームかよ・・・」

「シヤスコとかねーのか？」

「俺らなんやかんやでジャージと軍服しか着てないぞ」

奈々「それは・・・ただ、書かれてなかっただけよ!!!」

「けどおしゃれもしたいわ」
哲「じゃ、探してよ」

・・・30分後・・・

奈々「ないわ!!!」

哲「そうか・・・」

奈々「どこかで食料、手に入れて、そのあとで行けばいいじゃん」

哲「そうだな」

哲は再び車を発進させて、ケインスホームに向かう。

そのケインスは近くにすっかり、服屋のシバムラがあったので今の哲たちにとっては普通のケインスよりはベターである。

そして、無事にケインスに到着

・・・一方・・・

総一郎「ふぁーあ」俺は大きな欠伸をして、伸びをする。

「ひまやな」

「つーか、何で時計狂ってるの気が付かなかったんだよ!!!」

千咲「そうだよね・・・誰も気づかないとかww」

などと・・・車の中でくつろいでいた。

その時、ゴゴゴゴと地響きが鳴った。

外で見張りをしていた森が車に入ってくる

森「地震だ」

総一郎「わかつとるわ!!!」

千咲「こんな時に・・・」

クソツ哲たちはまだ戻らないのか!?俺はそう思うが思ったところで帰ってはこない。

哲視点に戻すと

哲たちはケインズから食料を拝借して、シバムラで服を見ていた。

哲「ゾンビとも出くわさないからいい日だね」

奈々「コレはどうかかな？」

そう言つて、ワンピースを持ってくる。

哲「着てみたら？」

などと・・・リア充気分を満喫していると・・・

こちらでも地響きはなった、そして、地が揺れ始める。

哲「でかいかな？こつちだ！！！」

奈々の手を引いて、入り口に戻ると外には空を飛ぶほどの化け物がいた。

それを哲は矢を放ち、打ち落とす。

哲「さあ！車まで走るぞ！！！」

奈々「うん！！！」

そして、運転席に奈々が乗り、銃座に哲が着く。

哲「出して！！！」

そして、車は走り出すが化け物も付いてくる。

哲「くっそおお！！！」

哲は5.56mm機関銃MINIMIと呼ばれる銃をぶっぱなす。

化け物は落ちていく。

が一匹が上手いこと銃弾を避けて、車の近くまでやってくる。

そして、哲の頭を掴む、ものすごい握力に苦しむが牛刀で頭を突か

れて、絶命する。

哲「ピンチだったな・・・」

そのまま、帰路につく。

奈々「しかしさっきの地震はそこそだったね」

哲「ああ、たまに奴らが地震起こしたのかとも思うときがある」

奈々「あの植物とかすごかったよね」

哲「ああ」

中村家の悲惨さを思い出す。

そして無事に総一郎たちの所に戻ってくる。

総一郎視点にもどる

総一郎「おかえり」

「無事そうだね・・・どうだった？」

哲「手に入ったよ」

千咲「いや～よかった、よかった」

そこで美月が声を出す。

美月「ううう」

森「おい、大丈夫か？」

美月「ん・・・」

どうやら、意識が戻るようだ

続きは次回！！！！

買い物(嘘)(後書き)

感想、批評などどんどんよろしくおねがいします

森、消息知れず（前書き）

今回はチヨ一短めで

どしどしご覧あれ

森、消息知れず

美月「ん・・・ここは？」

総一郎「あそこからは離れたぞ」

バツと美月は起き上がり、聞いてくる。

美月「化け物は!？」

総一郎「もちろん、倒したとも」

美月「あれを!？」

森「俺も活躍したぜ」

総一郎「ああ、そ、そうだな」

・・・うん、確かに活躍したよね」

美月「そうか・・・」

哲父「どこか、悪いところはあるかい？」

美月「いえ、もう大丈夫・・・」

総一郎「お前も今日、明日は安静な!」

「お前もみちづれだあ」

美月「それってどーゆうこと?」

森「コイツも安静だからな」

総一郎「チツ」

美月「そうなんだー」ニヤニヤしながら言ってくる。

哲父「さて、そろそろ、場所をかえようか」

総一郎「そうですね・・・」

その時、付けてもないラジオ(電池式の)が音を出す。

森「誰だよつけたの、電池、もつたいないだろ」森が悪態をつきな
がらラジオを消そうと手を伸ばすと

以前のよう男の声が流れる。

男「勇気ある生き残りの諸君、こんばんは」

総一郎「また、貴様か！」

「何のようだ!？」NNSを構えながら言う。

男「まあまあ、そんなに警戒しなくてもよい」

男「さて、人類破滅計画?絶滅だっけ?……」

「…は明後日にしまーす」

総一郎「はい?」

男「なんやかんやですっかり、時間が分からなくなっちゃたんだよ
ねー」

森「お前らグダグダじゃねーか……場所は?」

男「前も言わなかったか?てか察しろよ」

森「できるか!!!ボケ!!!!!!」

男「できないの!?!不便だなく地球人」

千咲「うざい」

男「仕方ないの寄生してるこの男がこういう性格だからな」

総一郎「寄生……?」

男「おしゃべり、し過ぎたな……場所は総一郎、お前の学校だ」

美月「それって、何で」

ブツツと音がすると男は消えてしまう

総一郎「今の通り、襲撃は明後日だ」

「俺はそれに向かうつもりだから明日、出発する」

「それ以外の者はどこかで隠れている」

美月「……………」

総一郎「共に来る者は来い」

美月「私は行くよ、ここまで一緒だったんだからね」

森「俺もだ」

千咲「私も行きたいけど無理ね」

奈々「なら私は残るわ」

哲「俺らにこっちは任せとけ」

総一郎「なら任せたぞ」

哲「ああ」

美月「どうやって行く?」

総一郎「もちろん、車だよ」

「高機動車とバイクとあの銃付いている車で行くのか」

哲父「とにかく、行くなら止めはしないがねいいのかい?」

総一郎「自衛隊のほうはもちろん強いが…役に立ちたい」

「先日の奴らは恐らく洗脳されてるせいで感覚とかが鈍って
たんだよ」

千咲「なら、行く必要ないんじゃない?」

総一郎「保険だよ、保険」

「もしもの時もあるし…」

美月「その状況は無いことを祈るわ」

森「腹減った…何か食おうぜ」

そう言つて、森がみんなの分の夕食の準備をすることになる
なぜかというところ……

その時……

3人は揉めていた

美月「なんで私たちが準備しないとイケないの？」

森「そつそれは……」

千咲「もつとはつきりしなさいよ！」

森「うっ」

美月「で、どうすんの？」

森「俺がやります」土下座をしながら言う。

美月「それでいいのよ」

満足したように森の前から二人は去る。

残される森

森「ハア〜何で俺が……」

ぶつぶつ言いながら準備を始める森であった。

そこに

総一郎「よお、どうだ？できたか？」

森「うっさいわあ……！」

総一郎「なんだよ急に」

森「たくよ〜あの女どもお……！」

総一郎「なんだ、なんだ愚痴か？」

森「あの時は昇降口から逃げてるときでさあ……」

「そこにあいつらも居たわけよ……」

「そこでさ〜化け物にね襲われてたのですよね〜」

「助けたんですよ〜ハイ」

総一郎「なげえな」

森は無視をして続ける

森「その時はさあ、知っての通りなんか二人とも気の小さい感じのいい娘だなとか思ってたんですよ」

「なんかすごいねお礼とかされてね……チャホヤされたわけだ

よ

「なのにな……今はコレだよー！！！！」

森は不満をシャウトする

森 「なんだよ！！！！あいつ等！！！！あんな性格悪いなんておも
いもしなかったよ！！！！」

総一郎「ハハハ……」つい苦笑いを浮かべる

そんな感じで放送禁止用語なども叫び、森は俺に愚痴をなんと1時
間も言っていた。

総一郎「疲れたよ……」

森 「ああ！！！！まだ続くぞ！！！！ごるあ！！！！」

そこにまた二人は現れる

美月 「できたかしら……」

美月は顔をしかめて言う

美月 「何してたのかしら……？」

森「あつとですね……えーと」

千咲「何やってたの！？ぜんぜんできてないじゃない！」

美月 「総一郎、コイツ何やってたの？」

俺の方を睨みながら冷たい声で聞いてくる

その時、俺から冷や汗がどつと噴出す

総一郎「えーと」（助けてやるべき？フォローするべき！？）

総一郎（どうする！？下手したら俺まで……）

美月 「答えないと……まあいい」

「心に聞くまでだ」

森 「え？」

森はこの意味を掴めなかったが俺は一瞬で理解した
俺は逃げ出した

森を置いて上手く抜け出せたようだ

その後、森に何があったかは分からない

食事中

そこには森の姿はなかった……

奈々「おいしいですね」

総一郎「そっそうだな」森の姿が見えないのを不安に思いながら森の作ったであろうシチューにてをつける

哲「森はどうしたんだ？」

哲が聞いたとき、美月から黒いオーラが出始める。

俺は美月の方をおそるおそる見る

美月「知らないわよ、あんな変態」

哲もこれは美月が関係してるのに気づいたのか、またはこのオーラのせいで聞くことはできなかった。

そして、近くの温泉？で身体を流して

俺は見張りのために深夜に腕時計のアラームをセットすると……

美月がやってきて言う

美月「今日は見張り森君がやってくれろって〜だからあんたはいいよ」

最後のほうは俺が行かないようにかドスを聞かせて言って、去っていった。

……………森よ、ありがとう

そして、俺はアラームをセットすることなく、眠りに落ちていった。

森、消息知れず（後書き）

感想などよろしく御願ひします
作品の精度を上げるために是非

戦闘の前日（前書き）

テスト、終わりましたーと思ったら
来週は英検の二次か：休まらないな

もうSUKOSIで連載終わりそうな勢いですね

戦闘の前日

（翌日）

朝、起きて外に出ると、何故か焚き火をして、森が見張りをしていた。

目にはクマがと思ったたら……ん？

よく見たら痣じゃね！？

森 「総一郎か……おはよう」

総一郎 「ああ、おはようじゃなくて何だその痣？」 下手人は割れるが一応聞いてみる。

森 「ん？ああ、これね〜コレはな化け物に襲われたんだあ」

なんだかテンポがゆっくりした……とろくなってる

総一郎 「だいじょうぶかよ……」

森 「ああ、ダイジョウブ、ダイジョウブ」

総一郎 「かなり、あぶないぞ？」 呟くように言う。聞こえなかったようだ。

そこに下手人の登場だ

美月 「おはよう！総一郎、ついでに変態も」 最初は元気よく、後半は冷たく言った。

総一郎 「おはよう、ちよっと……！」 美月の腕を掴んで、森から離れたところに連れ出す。

美月 「ちよっと……？何かしら？」 白々しいな

総一郎 「どう見てもやりすぎだろ……！」

美月 「そうかしら？」 まったく、悪いと思ってないらしい。

総一郎 「今日から暫く休むことできないんだから……森にこれ以

上、「今日だけでも負担はかけるなよ?」

美月「なんでよ?」

総一郎「もしもの事がこの疲れであつたらどうするんだ?」

美月「そんな覚悟もさせないでつれてくつもりだったの?」

総一郎「それとコレはカンケーないでしょ!」

「とにかく休ませろ!いいな?」

美月「はいはい、わかったお」

「けど………連れてって後悔しない?」

総一郎「何言つてんだ?」

美月「まあ、いいわ……じゃ」

そう言つて美月は車の方に行った。

総一郎「後悔つて……なんでだ?」

気になったが腹も減つたので俺も車に行き、何か食べることにした。
哲が奈々とやつてきた。

総一郎「うっす」

哲「おっはー」

奈々「おはよう」

哲「森は無事だったか?」

総一郎「う……ん、かなりやられてたな」

二人は苦笑いをしていた。

そして、食事を終えて、出発の準備をする。

付いてくるのは森、美月だ

車両はあれから考えて、偵察車両（銃付いた奴）2台とバイクにすることにした。

……皆よくもつて来てくれたな。

俺は9mm拳銃のマガジンに弾を入れ、装填する。

ホルスターに拳銃を入れて、リュックには4日分の食事を腰にはチ
ート武器のNNSネオナカムラソードを挿す。
そして準備が出来て車に向かうとき美月に出会う。

美月「そういえばアンタ……」

総一郎「なんだよ?」

美月「ネオの意味分かってるの?」

総一郎「え!?え」と

美月「わからずに名前を付けたのか」

総一郎「ハハ」笑うと

美月「ハハハ、やっぱりね」そして美月は笑う。

総一郎「じゃ、頑張りますか」

美月「もちろん!!!」

そう言つて、車に乗り込む。

森はバイクに跨り、美月も車のエンジンを付けていた。

総一郎「では、言つて参る」大きな声で言う。

哲「こちらは任せておいて」

奈々「どうか、無事で……」

その他「危なくなったら逃げるんだよ」

千咲「では……気を付けて」

森「ああ」

美月「じゃ、千咲たちも気をつけてね」

千咲「うん!!」

そして、俺の話す機会は少なく、出発する。

走ること、1時間

先頭を走っていたのは森だ

森がゾンビに停まったのでそれについていき、俺らも止まる。

総一郎「休憩かあ？」

森「ああ、くたびれたよ、いいか？」

美月「仕方ないわね」

総一郎「何かあるかな？」

総一郎はゾンビ二の中を覗いてみる。

なんと、人影が見つかった。

自動ドアは開いたままなので中に入っていくとゾンビでした。

総一郎「ゾンビか」

美月「人間いないわね」

総一郎「じゃ、殺るか」

9mを構えて、照準をゾンビの頭部に合わせる。引き金を引く。

軽い反動と共に弾が発射される。

マガジンが空になるがゾンビはまだ絶えない。

総一郎「多っ！！！グレネード使うぞ」

俺は安全ピンを抜いて、店内の奥の方に投げ込む。

総一郎「退避！！！」俺はそう叫んで店から離れる。

何秒か経った後に爆発が起こる。

総一郎「やつちまったよ」

森「食いもん・・・」

美月「……………ばか」

そのまま、ボーッと突っ立つこと十分

最初に放心状態から覚めたのは俺だ

総一郎「……………行くか」

森、美月「ああ」

それぞれ車両に乗り込み、出発する。

<森視点>

森「あーあ、くたびれたな…結局、休まなかったし…」
ぐぎゆるうつ

森「…腹減ったな」

その時、無線に通信が入る

森「もしもし」

相手は総一郎のようだ

総一郎「もしもして電話かよ、まあ、いい この先のどっかで停
まってくれ」

森「りょーかい」

そして、今度は学校を発見

森「よし、ここでいいな」

駐車場に入っていく

<総一郎視点>

やっと、見つけたか

とにかく、森について行き、車両を停める。

総一郎「よし、集まったな」

美月「どうしたの？」

森「俺らの学校まで、あと30分くらいあるぞ」

総一郎「決戦は明日だ、ここら辺で今日は休むぞ」

森「わかった」

そして、俺はそれぞれ自由に休む

<夜>

場所は近くのビルの屋上、俺らは昼寝から目覚め、俺らの学校のほうの様子を見て携帯食料などを食っていた。

総一郎「む、まずいな」

森「ぞくぞく、集まってやがる」

その時、銃声が聞こえる。

美月「何？」

総一郎「自衛隊か？」

森「おい、向こうの方に明かりが」

美月「自衛隊ね、合流しましょう」

総一郎「いや、やめとけ」

森「なんでだ？」

総一郎「今は夜だし、誤射されたら、嫌だろ？それに俺らは一般ピーポーだから避難所送りになって、戦闘に参加させて貰えないだろう…たぶん」

森「じゃ、おとなしくとききますか」

総一郎「そういうことだ」

美月「じゃ、休みますか」

そしてビルのオフィスであったらるうエリアにバリケードをSUKOSI張り、各々、明日の戦闘に備えて休む

戦闘の前日（後書き）

感想、批評などよろしく御願ひします

ああ、批評と言っても詳しくね

バカとかあほらしいとかやられてもこちらの為になりませんので、
つーかこれらは批評じゃないか？

わー、怪獣だぁ（前書き）

今度は英検の2次で遅れましたぁ
うかるかな？
短めです

わー、怪獣だぁ

俺は起床する。

最近、起きるときは違和感がある。

いつもと違うところで寝ると起きたときに「ん？ああー！！」ここで寝たのか！！！」と思うことはないだろうか？

それはさておき

決戦である。

今日は自衛隊VSゾンビの中突っ込んでいくわけですが
ゾンビなんかと間違われなければいいが……
ホンッと勘弁して欲しいです。

森「おはよう」

総一郎「おはよう」

コイツはご存知、パシリと書いてもりと読みます。(雑用も可)
全国の森さん、ごめんなさい

美月「んっふううう」美月が伸びをしながら、起きる。

森「おっす」

美月「……」無視してる。

とりあえず俺も挨拶をする

総一郎「お、おはよう」

美月「おはよう」

森だけはしつかり、無視をした。最近森への態度がひどいのだ。
俺が一番最初、ホントにおとなしい奴だと思ったが勘違いだったよ
うだ、コイツ、悪女ですー！！！！

心の中で叫ぶ。

美月「ん？」何かを察したようだ、ピンタをしてきた。

総一郎「いたっ」

美月「誰が悪女だった？」

コイツは心が読めるのだ。

さて、仲間の紹介みたいになっただが…深い意味はない

その後、ご飯を作る。

とは言っても火でお湯を沸かして、カップ？を作るのだがもちろん、雑用の仕事だ。

食事を終え、各々、準備を始める。

森は89式を用意して、手榴弾、無反動砲を持つ。

美月は長めの鉄パイプのなに包丁を固定したものと9mm拳銃を2丁…まさか二丁流なんかしないよな？

そして、俺はNN^{ネオナカムラント}Sだっけ？を持って、腰に差す。そして、89式を車両に積み込んで、更に手榴弾、9mmを持つ。皆、似たような装備だが貰い物だから…仕方ないだろう。

総一郎「車両は偵察車を使う俺と美月のところと森だけでいいか？」

美月「いいよ」

森「ああ」

反対されてもこれでいくけどな…理由は美月と森はくっ付けられない、かといって、1台はここに残して行きたいし、女の子を一人のチームにはできないし…etcからこうなった。

そして、外に出て、何かが居ると思われる、我らが学校へ向かう。途中、

総一郎「まってっ！…！！」

車を止めさせる。

…分かるだろうか？

辺りには血痕がある。

総一郎「見る！ここ、罨を仕掛けたところだぞ」

森「ああ！！！」

美月「迂回するの…」

総一郎「ああ」

森「自衛隊の人は掛かってないよな？」

総一郎「きつと、ダイジョウブだよ、切られてないしね」

そして、進んで行く。

ゾンビが現れる。

森「なんて数だ！！！」

総一郎「さすがだな、本気だったことが」

美月「どうする？」

総一郎「突っ込むぞあ」

アクセルを踏み込む。

車体を倒さないように出来るだけぶつからないように行く。

総一郎「うてー！！！！」

ゾンビが集まってないところに出る。

ブレーキを掛けて、叫ぶ。

美月が撃ちだした、俺も89式を構えて、撃つ、森も同様に。

総一郎「キリがないな」

森が手榴弾を投げる。

爆発してゾンビがたくさん、倒れるがまだ減らない。

だが道は開かれたので進む。

このようなことをして、学校に向かおうとする

また、地震が発生する。

総一郎「でかいぞ」

美月「なんなの!？」

森「校舎だ」

森が叫ぶので見てみると

俺らの学校の校舎の本館に触手が集まると…

校舎を飲み込む、これで校舎の状況は分からなくなった。

そこを中心に成長する。

大きさはデカイ

近くのホテル（8階ぐらいある）と比べてもコレのほうが大きいぐらいだ。

総一郎「ばけもんめ」

その時、黄色い、丸い形のもが開かれる。

まるで目だな。

ほかの部分は赤黒い、最近、見慣れている、血のようだ。

その時、音がするので空を見るとヘリ（A H - 1 S 対戦車ヘリコ

プタという設定）が数機いた。

森「自衛隊か？」

総一郎「いくぞ!!!」

話してる間に後ろからゾンビが近づいてきている。

ゾンビから逃げながらも様子を見ると、ミサイルを発射した。

美月「やった」ミサイルは破裂した。

しかし…

森「マジか」

総一郎「くっ」

何事もなかったかのようにその大きな姿を晒していた。

わー、怪獣だぁ（後書き）

感想などをよろしく御願ひします

校舎に近づけない!!! (前書き)

英語版作りましたがアクセス数が2、3件くらいだと思ったが50
超えてて、驚いた。

こんなに英語、読める人がいるんですね
今回、短め

校舎に近づけない!!!

ミサイルを食らっても効果がない、その姿を見て。

総一郎に俺は一言

総一郎「化け物ですな」

美月「言ってるばあいかあ!!!」

森「うあー!!!」

森は何かを絶叫して、車を発進させ、どこかに行ってしまった。

総一郎「え!!!森、どこに行く!？」

美月「ほっときなさい」

総一郎「でも…ほっとけないだろ」

美月「もう遅い」

森の姿は既になく、しかも森の行った先には既にゾンビが集り、通れなくなっている。

総一郎「仕方ない、行くぞ」

そして、化け物の元に向かおうとする。

その間も自衛隊の猛攻撃は続いていたが効果は無かった。

ゾンビはいつも以上に多い。

それを美月が狙い撃つ。

敵は倒れるが数が減ることはない。

その時、ゾンビの群れがモーセが海を割るが如く、開いて、そこから化け物が現れる。

そいつは少し懐かしい、横沢だ。

総一郎「なぜ?あいつが!？」

美月「知るか!!!」

「来るぞ！！！」

総一郎「クソ！！！」

アクセルを更に強く踏み込む。しかし、横沢は余裕で付いて来る。そこに美月が5.56mm機関銃MINIMIを構えて、狙いを定める、そして発射する。

しかし、上手く狙えない上、相手は高速で動いてるため、当たらない。

ついに追いつかれて、美月が捕まれた！横沢は刀は使わずに首を絞めて、殺そうとしている。

美月「がっ…かは！！！」

総一郎「美月！！！」

俺はブレーキを掛けて、9mm拳銃を撃つが横沢は美月から離れる。

総一郎「大丈夫か！？」

美月「ゲホッゴホッ、はあはあ、ええ」

総一郎「コノヤロー！！！」

俺は車両から降りる。

そして、NNSを構える。

横沢はこちらに走ってくる。

俺は右手でNNSを持ち、左手に9mmを構えた。

横沢が突撃してきたところをNNSで横に斬る。

しかし、横沢は跳躍して、電柱の上に乗る、そこから飛び掛ってきた。

俺は避けられずに激突して地に倒れこむ。

横沢は馬乗りに乗ってきて、俺の首を絞めてきた。

総一郎「ぐっ」

美月「総一郎！！！」

その時、空で爆発が起こる、ヘリが炎上しているのが見えた。横沢は一瞬、そちらに気が向いた。その隙に俺は左手で9mmを撃つ。弾丸は横沢の頭には当たらなかつたが首の辺りに命中する。首を絞める力などの拘束力が弱った隙に横沢を押し、どかして、立ち上がる。

NNSを横沢の心臓に突き刺す。

横沢「うヴオろろお!!!」横沢は痛みに絶叫して、もがく。

更に9mmでヘッドショット!!!

横沢は動かなくなる。

俺は車両に戻り、再び、車を走らせる。

ヘリは既に落ちてしまったようだ。

美月「どうやって落としたの!？」

総一郎「あいつだ」

俺は空中に(空を飛ぶタイプの化け物)を見つけた。

それも一体だけではない。

空の一部だが覆い尽くすほどいた。

美月「いつの間に…見て!!!」

俺は運転しながら美月の指すほうを見る。

今はもう、化け物の皆となった校舎から出てきている。

総一郎「ちくしょう!!!一番、厄介そうなアレを潰さないといけないのか!!!」

美月「行きましょ!!!」

その時、また、一機、落ちていくのが見えた。

総一郎「自衛隊、勝てるのか!？」

美月「頑張つて、サポートしましょ!!!」

総一郎「ああ」

遠くで爆発音が聞こえた。

総一郎「今度はなんだ!？」

美月「わからない、ここからは離れてるようね…」

<森>

森「くそー!!、また囲まれた!!!!」

今、森が居るのは交差点だが全方位からゾンビが迫ってきている。

森は無反動砲を構えて、ゾンビの集団の中心を狙い、発射する。

爆発がゾンビを包み込み、道が開く。

森はハンドルをきり、そちらに向かって、前進する。

そう、この爆発である。

<総一郎視点>

二人はまたしてもゾンビに囲まれていた。

総一郎「またか!!!!」

美月「喰らいなさい!!!!」

美月はMINIMIを撃つ。

ゾンビは倒れる。

今度は層が薄かったのであっけなく、道は開かれた。

しかし、先ほどからゾンビが邪魔で上手く校舎に近づけずにいた。

総一郎「どうする!?!?どうする!?!?俺ら!!!!」

美月「うっさい!!!!少し、落ち着きなさい」

校舎、入れました

総一郎「ここもか!!」

先ほどの場所からは移動して、後者に向かおうとするがゾンビが道を塞いでいて、うまく近づけない状況は続いていた。

美月「何か！手段はないのか!？」

総一郎「絶賛、募集中だよ」

美月「あれは!？」

進行方向にはヘリの残骸があり、そこから銃のマズルフラッシュが見えた。

俺はクラクションを鳴らしながらそこに近づく。

銃を撃っていた人も気づいたのかこちらの方に来る。

そして、俺らも彼に接近する。

しかし、またしても横沢が出現する。

総一郎「何体いるんだ!？」

美月「嘘でしょ!？」

とりあえず、この人をXとおきます。

X「コイツは!？」

Xは銃を撃つが横沢はこちらに接近してくる。

俺はバツクをして、そこから離れる。

Xは驚いていた。

X「助けてくれるんじゃないのか!？」

総一郎「逃げろ!!!」

もうXが走っても助からないことは分かっていたが叫んだ。

Xは銃を撃ちながら俺らが居るほうとは逆に走る。

横沢はそれを見て、こちらよりXを狩る方が容易だと判断したのか、

こちらに背を向けて、Xに近づく。

Xは弾を撃ちつくしたのか走るのに専念する。

それを横沢、追う。俺らも横沢を追う。

Xは角に曲がっていった。

それを追う横沢。角に入る。

その時、横沢が角から出てきた。

俺は一瞬、驚いたが横沢は倒れている。

Xがナイフを構えて、出てくる。

どうやらXは角を曲がった振りをして、横沢が来た所をタツクルし
たらしい。

横沢は倒れている。美月は9mm拳銃で頭をぶち抜く。

横沢は動かなくなった。

X「ありが…」言葉が途切れたので何だと思いつながらXを見ると、
頭から地を吹いて、倒れていた。

その背後にはゾンビがいた。

俺はまた、バツクで離れる。

美月「…多すぎ」

総一郎「仕方ない強行突破だ!!!」

美月「え？」何かまたとんでもない提案しやがったなコイツ…みた
いな目で見てくる。

総一郎「このままじゃジリ貧だろ!!!」

美月「でも…」

総一郎「攻撃開始!!!」

俺は89式を撃ち始める。

美月もMINIMIを撃つ。

道は開いてきた。

とどめに手榴弾を2個、ピンを抜いて、止めといわんばかりに投げ
る。

爆発すると同時にアクセルを踏み込む。
埃が舞う中に突っ込む。

ゾンビを轢いてるのか偶にガタガタ揺れる。
埃が舞う中を抜けた先には校門が見える。
その前まで行くが当然だが人はいない。
校内に入って行き、車を停めて、降りる。

総一郎「着いた!!!」

美月「~~~~~」

美月は何かを呟いたようだが聞こえなかった。

総一郎「え？何か言った？」

美月「こつちから入れそうよ」

総一郎「お、おう」

そして、触手が出ている穴に向かう。

総一郎「でっかい穴だなあ」

美月「入るわよ」

総一郎「おうよ!!!」

そして、二人は入っていく。

タツタツタツと足音が響く。

中は偶にゾンビのうめき声のようなモノが聞こえる以外は何も聞こえない。

総一郎「まで」

小さな声で言っつて、手でサインをして止まるようにする。

美月「何？」

足音が聞こえる…

ペタペタと嫌な音を立てながら何か近づいてきているようだ。

総一郎「背後か!？」

振り向くと、そこには血のようにドス黒い人型がいた。

総一郎「何だコイツ？」

美月「見て」

見てみるとミミズのような血のような色がしたモノがそいつの身体から出ていた。

総一郎「何だコレ？」

男「ハツハツハツハ」

高笑いが聞こえる。俺は叫ぶ。

総一郎「誰だ!？」

男「私だよ!!!」

俺らの前に霧のように現れる。

コイツはいつもラジオから出てくる奴だ。

総一郎「コイツはなんだ？」

男「人間だ」

美月「なんですって!？」

男「人間を化け物にして、このミミズを使って血を抜いたら…ゾンビになるんだよ。」

総一郎「なんだと!？」

男「つまり、そのミミズを集めたものだよ、コレは」

男は笑いながら言う。

総一郎「こんな物のために…」

死んでいったり、殺した人間たちを思う。

男「さあ!!!行け!!!」

このブラッディヒューマン（BH）は突っ込んでくる。

強敵、BH

BH「ヒュルルル！」雄たけびを上げながらBHは俺らに向かって突進してきた。

総一郎「うわっ！！！！」

間一髪で避ける。（お決まりですね）

化け物はゆっくりこちらを振り返る。

そして口を開くとそこからミミズが飛び出してきた。銃弾の如く。こちらに飛んで来る。

俺は手で頭を咄嗟に守る。手にミミズがくっついてくる。

総一郎「ぐあ」

ミミズが噛み付いてきたのだ。それを慌てて払い落とす。

男「傷口に憑かれたら一気に血を吸われるぞ」

美月「なんですって！？」

総一郎「面白い」

NNSを抜く。

美月は9mm拳銃を撃つ！！！！

ミミズに三つの風穴が開くがあつという間に塞がれてしまう。

男「無駄だ、コイツの再生能力を舐めるな」

今度は俺が斬りかかり、BHの腕を落とす。

しかし、ナメツ0星人のようにすぐに生え変わってしまう。

総一郎「なに！？」

美月が今度は頭部を狙って撃つ。

BHの頭は吹っ飛んだ。

男「おお、やられてしまったか」

総一郎「次はお前だ！」NNSを男にむけながら言う。

男「気が早いな」男はにやけながら言う。

総一郎「なんだと？」

俺はB Hの亡骸があるであろう方向を見る。
しかし、いなくなっている。

上からミミズが一匹、俺の足元に落ちてきた。

それを見て、慌てて、バックステップで離れる。

天井を見ると今度はクモのような形になっていた。

「変幻自在なのか？」思いながらNNSを構えて、警戒する。

クモが降りてくる。すると…今度は大蛇のようになって襲い掛かってくる。

美月「こつちよ！！！」

美月と共に昇降口に戻る。

しかし…

男「逃がすな！」冷たい声で叫ぶ。

俺らは穴から出ようとしたがその時、触手が肥大化して穴を塞いでしまった。

美月「ああ…」絶望したように呟く。

総一郎「こつちだ！！！」美月の手を引いて、階段を駆け上る。そして防火扉を閉める。

ガンガン！！ガンガン！大蛇は扉を破壊しようとして攻撃する。

扉は曲がってきている。

総一郎「ここは俺が抑える、何か罠を作ってくれ。」

美月「そんな事言われても…」

総一郎「とにかく、急いでくれ」

美月の背中を押して、行かせる。

さあ来るがいい！！！！

ガッガン、ヒュルオオオオ！！！！！！！！扉が開かずに獲物が獲られ

ないことからの苛立ちからか雄たけびを上げる。

いつまで、時間を掛けるつもりだ？

なかなか、来ないので、集中も切れてきたところで背後から物音がする。

総一郎「みず・・・」美月が来たかと思い、振り返ると大蛇がいた。今も非常扉の奥からは音がしているのに…

その時、非常扉に大蛇から発生したミミズが向かう。

扉の隙間から向こう側に行く。

扉を叩く音がいつそう強くなり、扉が吹飛ぶ、それをかわして、そちらを向くと大蛇の一回り小さいくらいの蛇が居た。

総一郎「なんだと？」

こいつ等…分解しやがった。

とにかく、囲まれてしまっている。

俺の決断は早かった。

小さいほうの蛇に走って行き、切りかかる、頭部をそり落とすが復活する。

再生するのは分かりきっていたが、それでもがっかりさせられる。

それでも簡単に逃げ道は開けたので外に出ようと1階に降りる。

そして、男子トイレに逃げ込む。

窓を叩き割って、外に出る。

総一郎「ふう」化け物との距離も開けたと思い、一息つく。

しかし、今度は大蛇よりも大きい、校舎に取り付いている触手の化け物にターゲットとして狙われる。

地面が隆起したかと思うと、地面から触手が飛び出してくる。

総一郎「くっ」バックステップで避けるが今度は背後に触手が飛び出してきて、その触手に突っ込んでしまう。

追い込まれた。そして、校舎から触手が真っ直ぐ俺を狙って、伸び

てくる。先が尖っている。

横に避けるが左腕を掠る。

腕に切り傷が刻まれ、赤い、鮮血が舞う。

大蛇も校舎から出てくる。どうやら合体したようなのでサイズが大きくなっている。

総一郎「こつちだぁ！！！」とりあえず校庭まで引き寄せる。

蛇は今度はまた人型になる。

男の声が聞こえる。

「おにごっこはお終いか？」

総一郎「まあな、ケンカの始まりじゃ！！！！」

そう言つて、突っ込んでいく。

NNSを振り回す。

腕を剃り落したり、頭を落とすが効果はない。

人型は赤黒い色から漆黒に変わる。

動きが止まったので俺は斬りかかる。

しかし、斬れない、どうやら、身体を硬くしたらしい。

不幸中の幸いだ。

口が開きっぱなしだ。

そこに、手榴弾を突っ込む。

急いで、離れる。振り向かず走って、離れる。

爆発音がするがやけに爆発音が小さい。

振り向くと、何事もなかったかのようにそいつはいた。

何か…倒す方法はないのか！？

BHがまた、元の色に戻り、突っ込んでくる。

総一郎「くそっ」

どうすればよいかまったく思いつかない。

BHはそんな俺の気も知らずに突っ込んでくる。

BHの攻撃を横へ後ろへと避けているうちに体力も切れてくる。

総一郎「はあはあ、いい加減にしろよ」

そこに、美月がやってくる。

美月「こっちよ!!!」

総一郎「OK」ついに来てくれた。

校舎の方へ向かう。

夢落ち

俺らは走りながら話す。

総一郎「作戦は？」

美月「ああ、実はコレ賭けなの」笑顔で言われる。

総一郎「はあ？」もっとドカンと敵を倒せるような物を想像していたのがっかりする。

美月「校舎内にあの触手の核を見つけた。そして外には自衛隊の戦車が来てたわ、時間が少ない。急ぐわよ」

総一郎「はあ？要はどういうこと？」

美月「核を潰せば、校舎の屈強な守りは破れる、そこに、奴を誘い込んで、戦車でドカンよ」

総一郎「わかった…出来るか？ソレ」

美月「やらないと死ぬわよ」

総一郎「イエス・マム」

手身近な窓を割って、校舎に侵入する。

美月「こつちよ」美月が先に行く。

総一郎「ああ…」

そして、たどり着いたのは3-B教室。

美月「アレよ」

総一郎「コイツを倒せばいいんだな？」

美月「おそらく…」

扉を強引に開けて、中に入っていくと核から触手が伸びて、攻撃してくる。

それらを斬りおとして近づいて、核を攻撃する。

しかし、NNSは折れてしまう。

総一郎「なっ！…！」

そして、後ろからはBHが来る。
「ヒュルウウウ」喜んでるように聞こえるが今の俺には最悪のことだ。

化け物は近くに居る美月を素通りしてこちらに来る。

なぜだ？と疑問に思う、近くには美月が居るのになぜ狙わない？が今はそれどころではない、9mmを構える。

そして、発射する。

今は元の色に戻っていたので再生はするが怯んではいた。

その隙に美月を連れて逃げようとするが背後から触手に足を手を掴まれて。核の方に引きずられる。

引きずられている時に見た。核の横には人の亡骸があった。

ソレは酷く干乾びていた。

総一郎「美月！！！」と叫ぶが美月は拘束されていなかった。

美月「ご苦労さん、総一郎、いいデータになったわ」

総一郎「はあ？」その時はすぐに理解できなかった。が殺されるということは直感した。

美月「これはまだ、軽い実験よ」

触手の動きが止まった。

総一郎「実験？」

美月「そうよ」

総一郎「ふざけるな！！そんな事だけにこんな事を…」

美月「だからあただの実験だと言ってるじゃない」

総一郎「お前か？引き起こしたのは…」

美月「そうよ」冷たく言う。

そして、俺のポケットから9mmのマガジンを取り出し、自分の銃に叩き込んだ。そして、俺に銃口を向ける。

美月「お疲れ様」ニツコリと笑いながら引き金をゆっくりと引く、

弾丸は真っ直ぐに俺の頭部に穴を開けて、突き進む。
総一郎「ぐっ！！！」

視界が暗くなる。

視界が何故か明るくなる。

俺は座っていて、目の前には黒板がある。

先生「おい、中村、この助動詞はなんだ？」

総一郎「あ…はい、えー、打消しのずです」

先生「そうだあ！！！」

俺は考える…いや、夢だったか…怖かったな、確かに宇宙人やら時間を狂わせるなんて不可能だろ！

その時、外から悲鳴が上がる。

尋常じゃないな……まさかな、先生が窓際に向う。

うゝむ夢と展開が似てるなあ…

先生が隣の職員室に駆け込んで電話で話し始める。

横沢も話しかけてくるが夢のことを考え、聞こえない。

横沢「おい、無視かよ」

俺は、窓に近づいて、外を見る。横沢も来る。

そこには夢で見慣れた光景が広がっていた。

俺は横沢に言う。

総一郎「横沢、準備しろ」

横沢「準備？」

俺は夢と同様にライトやかばんの準備を始める。

横沢に教室で待つように言う。

美月のクラスに行くと言われたいない。

総一郎「くそっ」

廊下には避難しようとして人が集まる。

美月の姿はなく、千咲、森の姿も見られるがまだ、声は掛けない。

総一郎「絶対、無事でいろよ」すれ違いざまに言う。

そして、教室に戻る。

総一郎「こつちだ、横沢」

横沢「おうよ!!!」

総一郎「剣道場行くぞ、木刀もあつたよな？」

横沢「そついや、居合いの刀もあつたぞ」

総一郎「OK」

そして、窓から外に出る。

外にはまだ、血を吸われていない、化け物がうようよしていた。

そして、剣道場に向かい、木刀を手に入れる。

横沢は木刀と居合い刀を取り、道着に着替えていた。

本人曰く、こつちのほうが動きやすいそうだが、俺は制服のまま、剣

道場の外に出る。

横沢「どうするんだ？」

総一郎「このふざけた状況を阻止する。」

横沢「どうやって？」

総一郎「首謀者を叩いて、これ以上、厄介な事は出来なくさせる。」

横沢「首謀者？」

総一郎「まだ、憶測だが美月という奴だ」

旧校舎に向おうとすると銃声が聞こえる。

警察か…しかし、銃声はすぐに聞こえなくなる。

横沢「どうなってるんだよ!?!」

総一郎「とにかく、急ぐぞ」

旧校舍に侵入する。

横沢「静かだな」

総一郎「ああ」

足音が聞こえる。

横沢「だれだ!?!」

刀をいつでも抜けるようにして言う。

男「ハッハッハ、中村クン、君も懲りないね、夢の中でも負けたの
にね」

横沢「夢?・・・」

総一郎「気にするな、後から教えてやる。コイツをやるぞ」

横沢「はあ!?!美月とかつて奴じゃないのか!?!倒すのは」

総一郎「コイツもだ!?!」

男「面白い、私を倒せるかな!?!」

そう言った瞬間、身体が変化を始める。

横沢「化け物か!?!」

総一郎「そうだ、来るぞ!?!」

そして、平和な世界を守るべく、戦いは始まる。

横沢君も生きてます

化け物は人型だが色は黒っぽくなる。腕には青い模様が刻まれ、頭には角がある。

男「準備はいいか？」

総一郎「待つてと言っても無駄だろ？来いよ！」

横沢「そうだあ！！！」

化け物は走ってくる、床に足跡を刻み込みながら走ってくる。

俺と横沢は昇降口まで移動、離れて、動きやすいようにスペースを取る。

化け物はこちらを狙って、タックルしてくる。

パワーはあるが、それだけだろう、速くはないのでギリギリまで引き付けて、避けようとするが身体が上手く動かない。

紙一重で避ける。そこに横沢、抜刀、抜いたときの一撃、切り上げ、横に回転しながらの一撃、最後に突きを繰り出す。

1, 2, 3と切り傷が刻まれるが最後の突きは掌で防がれる。

横沢「なっ」横沢の毛が逆立つ。

化け物は刀を防ぐほうとは逆の手で突きを繰り出そうとする。

総一郎、化け物の足を蹴って、バランスを崩す。化け物、崩れる。

その隙に、二人は化け物と距離を取る。

男「なかなか、やるじゃないか」

総一郎「くっ」思うように力が出ない。

男「ここは夢の中ではない、思い通りにはいかないぞ」

横沢「美月とやらはどうした？」

それもそうだな、肝心も彼女がいらない。

男「なあに、今は植樹の最中だ」

横沢「植樹？」

恐らく、校舎に寄生してた奴を寄生させるのだろう。

総一郎「なら、急がないとな」

横沢「おい、急がないとまずいのか？」

総一郎「ああ、コイツより強くなる。」

横沢「そうか…」

男「うおおお！！！！」

今度は横沢を狙っていく。

横沢、避ける。化け物は靴箱に突っ込んでいく。

ガタガタ音を立てて、靴箱は倒れて、化け物は下敷きになる。

横沢「行け」

総一郎「ん？」思わず、聞き返してしまう。

横沢「手遅れになる前に止める」

総一郎「世界、平和になったら、ファムレ酢で奢るぜ」

横沢「おうよ！！！！」

互いの拳をぶつけて、約束する。

俺は走って、3-Bに行く。

横沢「さあ、来い！！横沢流派の力、見せてくれる…破門になっただけだね」

男「ハグ、ギョルグググ」

男の目が赤くなり、呼吸も荒くなる。

横沢は持っていたシャーペンで化け物にぶつけて、総一郎より離れたところに引き付けようと注意を引く。

横沢「おお、怖い怖い、睨まないでよ」

化け物、我を失ったように横沢を追いかける。

横沢は外に出る。

横沢「おーい、お尻ペン」

立ち止まり、尻を一発叩いて、挑発する。意味は伝わってるかは別として化け物は追いかけてくる。

外にはまだ、避難してる人がいる。

その中にはバットを持った、森、千咲もいる。

森「なんだ？あの化け物」

横沢「ん？森ー！！！」

森「うお、こっちくんな！！！」

横沢、少し傷つく。

森「千咲、あの倉庫に隠れてろ！！！」

千咲「え！？」まさか、一人にされるとは思ってたらしい。

森「嫌だが、助けないと」森は何か自分も関係ありそうだと感じ取っていた。(まったく無いが)

千咲はためらったが、森の真剣な顔を見て、倉庫に行く。

千咲「絶対、勝ちなさいよ！！！」

森「ああ」

横沢、森は走ってグラウンドに行く。

森「アレは…耐えててくれ」

横沢「待て！！！」

森は走って、フェンスを越えて、どこかに行ってしまう。

横沢は絶望してしまうが化け物と対峙する。

化け物、さっきと同じように直線に突っ込んでくる。

横沢、軽く身体を傾げるだけでかわす。

避けるときに斬りつける。

コイツには再生能力はないようだ。

同じように3度、斬る。

横沢「ふん、遅いぞ」

横沢は油断をしていた。

化け物は攻撃が当たらないどころか何度も斬られていることから、怒りに狂う。そして

化け物は身体を震わせる。頭の角が伸びる、鹿のように枝分れをす。サイズは小さくなる。

横沢「不気味なやつめ…無駄だ、お前の攻撃は当たらない。」
化け物、動く。その動きは横沢の想像を超えており、角は当たらないが横沢は化け物のタックルで吹き飛ばされる。

横沢「ゴホッはあはあ」横沢、身体が痺れて、動けなくなる。なんとか、地に這ったまま、化け物を見る。
また、身体を震わせている。

そして、さっきの様なパワータイプの形態になり、横沢にノソノソを近づく。

横沢「すまない、総一郎、平和は頼んだぞ」目を閉じて、殺されるのを待つ。

化け物、横沢が大人しくなったのを見て、喜びの叫びを上げる。

一方

総一郎「はあはあ、ここか…」

今、いるのは3-B、そう、全てが始まる場所だ。

総一郎は中に入っていく。

中には二人いた。

美月「来たわね」

男子生徒「君か…」

男子生徒のほうは見覚えがない。

総一郎「だれだ？」

男子生徒「……神だ」

これを聞いて、頭がおかしい奴だと思った。

男子生徒からミミズが現れる。

総一郎「まさか…」

男子生徒「俺は神だよ」

美月「くっはあ!!!」 美月は頭を抱えて、苦しみます。

男子生徒「苦労したよ、彼女を操るのは…」

総一郎「操る？」

美月「に、逃げて!!!」

男子生徒「ふん、無駄だ」

美月「ああ!!!」 頭を抱えて、悲痛そうに叫ぶ。

総一郎「…そういうことか」

俺は自称神を語るペテン師に走って行って、木刀で殴りかかる。

しかし、男子生徒には効かない。

総一郎「くっ!!!」

男子生徒「もう少し話さないか？」

総一郎、蹴りを繰り出して、木刀で殴る。

男子生徒「血の気がおおいな」

その時、美月の耳からミミズが落ちる。

男子生徒「もう、用無しだな…」

総一郎「なんだと!？」

美月「はあはあ」呼吸を荒くして、床に倒れている。

総一郎「ゆるさん!!! お前の計画は阻止するぞ!!!」

ピンチの連続（前書き）

夢落ちにした理由は時間をずらしたとかムリ設定が出てきたからだ・
・
仕方ない

ピンチの連続

美月から出てきたミミズは主人であるその男子生徒の下へと戻り、役目を果たす。

俺は一応、阻止するために連撃を繰り出す。

まず、跳躍、そいつの脳天を狙って、叩く、後ろに跳んで避けられる、それを追って、胴を叩く、休む間をあたえず、足、腕を打つ。しかし、全て巧みに避けられる。

総一郎「おい、黙って殺されるや」

男子生徒「当ててみるよ」若干、腰を下ろして言う。

・・・・・・・・横沢・・・・・・・・

横沢、覚悟をして、大人しくしていたがいつまで経っても止めを刺されないので気になり、目を開ける。

そこには複数の男がいた。

ヤンキーA「よこさわあ！！なにやられとんじゃあ！！！」

横沢から注意を引いて、囿になっていた男が言う。

ヤンキーB「わいがお前、殺すいったやんか！！！」

もう一人、横沢の倒れている横に立つ。

横沢「助けを呼んだ覚えはないけど？高山さん」

高山「ほざけ」青筋立てて、横沢を睨む。

横沢は立ち上がり、また、戦闘態勢に入る。

高山「ヤロー共！！こんな筋肉だけに負けるなよ！！そして、横沢のアホに遅れを取るなあ！！！」

一同「おうよ！！！！！！！」

高山「これが終わったら、先日の借りを返すからな」

横沢「…勘弁」気だるそうに言う。

高山「行くぞ!!!」そんな横沢に喝を入れるように言う。

横沢「おう!!!」

二人は走って、化け物に向っていく。

化け物は周りにいた高山の配下を蹴散らす。

配下達は吹っ飛ばされる。

横沢は右、高山は左に分かれる。

化け物はまた、スピード型へと変わる。高山、怯まずにバットで殴りかかる。

片腕で弾く。横沢、反対側から斬る。化け物は姿勢を低くして避ける。

化け物は高山の間合いに入る。高山、バットを持つ手とは逆の手で顔面を殴る。しかし、化け物は怯んだものの間を空けずに高山の胸を殴る。

スピード型とはいえ、化け物は人間よりは全体の筋肉が強い。高山は崩れる。

横沢、すり足で近づいて、連続で攻撃するが全て、避けられる。

高山「くそ、これじゃ何のために来たんだ…」

そして、何も出来ずに倒れている。

横沢「くっ」

全て、掠りもしない。そこに化け物、ボディブローを入れる。

横沢、ダウン…今度こそ誰も来ないと思う…

が森が陰から様子を伺っていた。

森の手には先ほど警官の死体から盗んできた拳銃…M60が握られている。

このために先ほどは走っていったのだ。射程距離が分からない、弾は3発まで入っていた。警官を漁ってみ

たが出てきたのはもう2発でリロードのやり方が分からなかった。セーフティを外す、そして、狙いを付けながらゆっくりと近づく。化け物は横沢に注意が向いていた。これならチャンスは十分あると踏んでいた森は足元を気にしていなかった。

足元にあつたバットを踏んで豪快に転ぶ。

森「いつて」

横沢「馬鹿!!!」

化け物は森に気づいて、接近する。森は恐怖で銃を撃つがはずれる。森「なんで、当たらないんだ!？」

森は3発使い果たす、リロードを試してみようと弾を出すを取り落とすしてしまう。

高山やその配下は立ち上がろうとしているが間に合わない。

その時、背後から何かが衝突して、化け物が膝をつく。

それは千咲だった。背後から全力で走ってからのドロップキックで倒したのだ。

今度は化け物は千咲に向う。

森、千咲の前に立つ。

落ちていたバットを振り回すが奪われて、すぐに捨てられてしまった。

千咲とどんどん後ろに下がっていく。ついに建物が背後にあり、追い込まれたところで声が掛かる。

横沢「よくやった」横沢だ

その手にはM60が握られており、引き金を引く。

反動と共に弾が発射され、化け物の頭を貫く。

化け物「あヴヴヴおうヴい」
倒れる。

森「助かった」腰が抜けたようにしゃがみ込み、言う。

千咲「ありがとう……」

横沢「なあにこつちも助けられた…総一郎の助太刀に行かないと……」

森「どこにいるんだ？」

横沢「旧校舎だ」

森「化け物が増えてきたな……」

さつきは大型が近くに居て、近づいて来れなかったのか今はこちらにどンドン寄ってきている。

高山「たおしてのか？」

横沢「ああ……」

高山「話は聞いたぞ、旧校舎の退路ぐらい任せとけ！なあ？ヤロー共……！」

ヤンキー達「おうよお……！！！」

高山「行って来い……！！！」

横沢「有難い」

そして、横沢は走って、中に入っていく。

森「大丈夫だろうか」

千咲「とりあえず信じましょう」

高山「気合入れるよ、美女も見てるぞお……！！！」
ヤンキー達「おうよ……！！！」

その台詞に照れる千咲。

森「はあ、やるか……」

バットを構えて、化け物に対峙する。

総一郎「ぜえぜえ」

肩で息をしていた、攻撃が当たらないのだ。

男子生徒「ふう、この程度？」

男子生徒は初めて、攻撃をしてきた。総一郎に近づく。木刀を振り、距離を取ろうとするが間合いに入られる。木刀では近すぎると上手く攻撃が出来ない。

見事、男子生徒の攻撃は俺に当たる。

総一郎「ぐっ」

たまらず、倒れる。

男子生徒「はあ、つまらないなあ、もういいや」

そう言っつて、右手を上げて、黒に変化させる。

男子生徒「ばいばい」笑顔で言う。

ピンチの連続（後書き）

御感想御願いします

ラスボス撃破

総一郎「くっ」最悪の状況、死が迫ってきているのに自分の意思とは裏腹に身体はいう事をきかない。

男子生徒「フッフッフッフ」嫌な笑みを浮かべながら近づいてくる。

…変態だ!!!…いや、ありえないだろ!!!人を殺そうとしているのに笑いながら近づいてくるなんて…(総一郎、心の叫び)

総一郎「…無念…あきらめよう、さあ来い!!!」とは言ってるが行動は言ってる事と逆だ。

必死にもがいて、離れようとする。

男子生徒「ああ、最後に一つ教えてやる…」男子生徒は何か言おうとしたが何かが入り込んで来て、男子生徒は吹っ飛ばされて聞けなかった。

横沢「おお、無事そうだな」横沢は呑気に言ってくる。

総一郎「この地を這いずり回ってる様を見てもそう思うか？」

横沢「まあ…」言葉が途切れる。男子生徒が横沢に襲い掛かる。横沢、見事避ける。

横沢「ん、酷いな、不意打ちするなんて…ん？」横沢は何かに気づいたようだ。

男子生徒「なんだ？」

横沢「お前、TVに出てたろ？心理学的なの？」

え？…そういえばそんな奴がいると聞いたことがあるような…。

男子生徒「そうだ、名を」

横沢「福崎ふくはまきだっけ？」

福崎「そうだ」

総一郎「福崎？心理学者なのに何でこんな生物兵器のようなものを？」

福崎「それは言えない」コレを聞いて、他にも協力者がいるのか？
と思ひ、聞こうとしたが。

福崎「…とりあえず死んどけ」そう言つて、聞く耳を持たずして襲
い掛かつてくる。

まず、這いずり回っている俺は無視をされ、横沢に攻撃をしに行く。
横沢、黒い手を刀で弾く、ガツと音がして、弾かれる。そのときに
刀が欠けて破片が舞う。

横沢「！！！」驚きを隠せないようだ。

俺は立ち上がるうともがくしかし、まだ身体が痺れて思うように動
かない。

横沢は強いが、さつき、俺が戦つたときに分かつた。

コイツは人間の枠を超えているのだろう。

横沢「こにやくそー！！！」叫び、斬りかかるが黒い手で防がれる。
そして、足を払われて、横沢は倒れてしまふ。

総一郎「横沢！！！」

横沢「くっまだいける」しかし、馬乗りになされて、動けない。

そこに美月突つ込む。

福崎「なっ！？」驚いている。

美月「人間をなめないで！」美月が復活したようだ、それを見て、
俺はやる気になる。

そして、ついに立ち上がる。

総一郎「そうだ！俺らはまだ終わってもいない！！！」

横沢「だ、そうだ…どうする？不利だねえ？」横沢はにやける。そ
して、馬乗りしている福崎を押し返す。

逆に横沢が福崎に馬乗りになったところに俺が福崎の頭部を蹴る。

福崎「ふっ効かぬわ」そして、身体からミミズを出す。

横沢、それを見て、離れる。

総一郎「美月、あのミミズの能力とか分かるか？」

美月「アレを体内に入れると…たぶん操られるわ…それだけしか…」

横沢「ようは、ミミズを全て殺して、近づかせなければいいだけだろ？」

総一郎「そういうことだ。だが油断はするな。」

美月「そうね、他にも何かあるかもしれないわ」

福崎「ふん、そんなに上手いくか、馬鹿か？」

総一郎「俺らは進学組だお前は普通科のほうだろ？だったら俺らのほうが…」

福崎「黙れ！！」どうやら怒りを買ってしまったようだ、普段くらいがみ合ってたもんなく、ミミズを撒き散らして襲い掛かってくる。

横沢の攻撃、防がれるしかし、後ろから俺が攻撃、頭を打ってやる。福崎の反撃、俺に向ってくる。今度は美月が横から足を引っ掛ける。福崎が転んだところに俺の蹴りと全体重をかけた、のしかかりが炸裂。

福崎は俺を押ししのける。俺は尻餅をつく。

総一郎「イタツ」鈍い痛みが走る。そこへ追撃。と思わせ横沢に突っ込む。横沢は体重の移動で上手いこと避ける。

それを何度も繰り返していくうちに半分化け物の福崎もフラフラになっっていく。

福崎「くっ」

横沢「止めだ」そう言って、M60を福崎に向ける。

しかし、ミミズが福崎の口から放たれた。そして横沢は銃を落とすてしまう。

美月、拾いに行く、掴むことは出来たが、ミミズの追撃、構えて、狙うことが出来ない。

俺は美月に合図を送る。

美月、こちらに銃を投げてくる。

俺はドッチボールが苦手だがキャッチすることが出来た。

しかし、こつちにもミミズが来る。俺にミミズは体当たりしてくる。そして腕に激痛が走る。ミミズが腕に噛み付いている。しかし俺はそれに構うことなく、福崎を狙う。引き金を三回引いて、弾が3つ、軽い反動と共に、頭、胴、胴と当たっていく。

噛み付いてきていたミミズは化け物が倒れるのと同時に動かなくなつた。

まだ続きます(前書き)

ぶっちゃけ、テスト一週間前なのに何をやってるの？私…

まだ続きます

倒してから僅かに時間が経過する。

そこには参謀であろう福崎が倒れている。

苦戦すると思われていたが何の仕掛けもなく銃で勝つことが出来た。

総一郎「さあ、行くぞ」俺は早く、夢の中では達成できなかった。

平和を守ることが出来たことを確認したかった。

美月「そうね…」

横沢「俺ら、救世主だな!!!」横沢が昇降口で言う。

総一郎「いや、残念ながらそうではないようだ」俺は外の光景を見て、残念に思う。

あの福崎を倒してしまえば全ての化け物は息絶えるか、正常な人間に戻ると思っていた。

しかし、今、目の前にあるのは元気に動き回っている化け物の姿である。

美月「どうして?これでおわりじゃないの!？」

横沢「嘘だろ」

俺を含む皆は絶望する。しかし俺はまだ戦っている高山達の援護に向う。

高山「オウ!!!戻ってきたか」

総一郎「この前…横沢がボコった奴か」

高山「総員、退避だ!!!用は済んだ!!!!!!」

兵が引いていく。それを追う化け物。その中に見知った顔があった。

総一郎「森!!!!!!」

森は腕から血を流していた。駆け寄って、よく見ると肉を丸ごと抉られていた。

森「そ、そうい…ちろ…か」

総一郎「そうだ」

千咲「血が止まらないの！…！」

よく見ると森の腕は変色してきている。

森「も…だめだ」

総一郎「ダメだ、あきらめんな」

しかし、森はあきらめたとように目を閉じて言う。

森「映画とかの通りならこのまま化け物の仲間入りだよ」

そこに美月も駆けてくる。

美月「酷い…」オロオロしながら止血をしようとするが森に変化が…。

森「ウウウウウウ」低い声で唸ったと思ったら美月の腕を掴んで口に運ぼうとする。

必死になって俺は止めたがこちらに襲い掛かってきた。横沢が足を払って、転ばせて何とか動きを止める。

高山「おい、何やってる！」まだ逃げてなかったようだ。

千咲「森があいつらと同じに…」

高山「殺せ！無理なら俺が…」

総一郎「やめろ」

総一郎、高山に対峙する。

高山「何をしている？」

総一郎「コイツは仲間だぞ！」

横沢「総一郎、あきらめろ、出来ないなら俺が…！」そう言って、

横沢は森の首を一回転させる。森は崩れる。

総一郎「何をするんだ！？」

横沢「落ち着け、するべきことぐらいわかるだろ？平和は守れなかった。今、必要なことは生き残ることだ」

総一郎「だからって……」

だが横沢は気にしないようだ。

総一郎「くそっ」気分は最悪だが生きることが求めて、最善を尽くす。

横沢「行くぞ……！」皆にそう言って、俺を後ろから押すようにして、走らせる。

総一郎「……」ショックだ。人はこんなに簡単に死んでしまうのか？しかし、自分にもソレが降りかかろうとしている状況ならそんな事を考える暇はあまり無い。

切り替えは大切である。

総一郎「どげや……！！ごるああ……！！」叫びながら化け物たちを蹴って、殴る、蹴って、殴る。

そして、突破口を開く。

俺は老体に鞭を打つが如く、動く。

しかし、夢のようにはいかず、あつと言う間に運動不足もあり、疲れしてしまう。

横沢「どうした？限界？」そう言いながら化け物をまた潰している。刀は随分前に捨てたようだ。

総一郎「黙れ」一体、どういう鍛え方してんだ？

化け物はここに集中しているようで一向に減る気配がない。

千咲と背中を合わせる。

千咲「ひきましよう」

総一郎「ふい、さつきからそうしたいよ」

横沢「こつちだ！」

そして、裏門の方に行こうとする。こちらの方は化け物は少ないようだ。

現在、付いて来ているのは

横沢、美月、千咲、俺である。横沢、いるから最強ですねw。

総一郎「バケモンは向こうに行っただか…さっきの不良どもの方だな…」

横沢「時間がかかりすぎた。暗くなるぞ」

総一郎「まだ、時間はあるな…装備と食料が必要だ、車両も確保しよう」

美月「こっち、鍵もさっきの奴から渡されたわ」鍵を差し出してきた。そして、学校の近くの駐車場に行く。

どうやら福崎はこのバンで逃げようとしていたようだ。

俺らはバンに乗り込む。

とにかく、最寄のホームセンターに行く。

行く途中

運転しているのは俺。

総一郎「フッフフフーン」鼻歌を歌いながら運転する。

美月、千咲「キャー」二人は悲鳴を上げる。

横沢「ちよっ　うわあ！」横沢も何かを言おうとするが言えなかった。

理由はお分かりだろうか？俺の運転である。路上駐車がたくさんあったり、車で道が塞がれてる為、歩道を走ったり、蛇行にならざるを得ないのである。

そして、ホームセンターに着いたときには皆はカオスな状態になっていた。

美月「あの運転は無いよ…ウツ」吐きそうな素振りをして、言う。

千咲「私、ダウン…」

横沢「俺も今回ばかりは…」皆、ぐったりしている。

しかし、日が落ちるまで時間はないし、待ってもくれない。ということ

総一郎「仕方ない、休んでろ。先に行ってる。一時間後にここで…もし合流できなかったらね。いかなかったら…置いて、逃げる」そう言って、中に入っていく。

中でカートを引きながら、シヨツピング。

たぶん、これからは体験できないだろう。…略奪とかでね

ここは食品コーナー

今、立ち止まって、見ているのは蟹缶。

総一郎「食っていいかな？いや、ダメだ…いや、少しだけなら…」

天使と悪魔が心の中でささやき合う。

そして、勝者は悪魔である。

総一郎「ただだっきまーす」一口、うん、旨い。

そんな事をしながら缶詰を含む食料を調達していく。

鉄パイプやピアノ線、牛刀など使えるものはかき集める。

中をカートを引き、探していると横沢たちと合流した。

横沢「おお、よく集めたな！」

総一郎「まあな」拳を合わせる。

美月「化け物は見かけた？」

総一郎「そういえば、見ないな…」

千咲「もう、他の人も取ってたのかわないわね…行きましょう」

皆、同意する。

バンに荷物を載せて、乗り込む。

総一郎「さあ！行こうか！！」元氣いっぱい言う。が俺以外は顔を青くしている。

横沢も「まで、俺が運転する！」と言ったが過去に俺とのゲーセンのマリカでの勝負で負けているため、結局、俺が無理やり運転席について、発車してしまうのであった。

まだ続きます(後書き)

感想、ご意見お待ちしております。

祝！40話（前書き）

台詞の書き方を調整。

見やすいか教えていただきたい。
ぜひ感想で

祝！40話

祝40話！ 只今の総合（12/04）PV10 / 756アクセス
ユニーク1 / 636人！ついでに祝PV10000アクセス突破！

ハイ、ストーリーモードの続きです。

車内、横沢「やっと変わったか…」運転をしながら言う。横には眠っている総一郎。以外にいびきはかかず、静かに寝息を立てている。ガン！千咲「はぁ、疲れた…」外を眺めながら言う。ガン！ガガン！美月「まだ具合悪いよ…あつまた轢いた」寝ながら外の音を聞いて言う。

横沢「仕方ないだろ…たくさんいるから…また轢いた。」

美月「やめときなよ…癖になったら大変よ」

千咲「……」元気がない。森が死んでしまったのが原因かもしれない。

横沢「どーしたんだ？元気ねーぞ？」千咲のほうをミラーで見ながら言う。

千咲「いや、別に……」

横沢も素っ気無い返事だからそれ以上は聞くのをやめる。欠伸をする。今はもう10時を過ぎている。休みたかったが、寝る前に『今日中には森が住んでる町に到達できるようにしろ』とのことだ。総一郎の意見は無視することができない。

「ふぁあ〜」横沢はまた欠伸をする。

何も無い。

「……」

誰も話さない。…静かだな。バックミラーで見てみる。すると千咲や美月も寝てしまっている。

さらに暫く運転をする。

「ふつくうう」伸びをしながら総一郎が起きる。

「…今、何時？」横沢は聞く。

「ん？え」と腕時計を見る。

「ああ、6時だが？」

「そ、そうか…」

「休みたい？」

「そりゃ、もちろん」答える。

「もうとつくに休んでいいとこまで来てるよ」笑いながら言われる。

「……」てか森が住んでる所なんかシラネーよ。

総一郎と席を替わる。

そして、ついに眠る。

車を記憶の中の森の家に向わせる。

「ここまで来るのはえーな！」総一郎は外を見ながら言う。

「ふ……くう」伸びをして、美月が起きる。

「おはよう」美月が挨拶をする。

「おう」返事をする。

「話があるんだけど…」

「なんだ？」

「車、停めてくれる？」

「りょーかい」

俺は近くのコンビニに車を停めた。

美月は外に出た。ここではダメだということだろう。俺もとりあえず木刀を持って外に出る。

コンビニの裏にまわる。

「で？話とは？」

「とりあえず、助けてくれてありがとう」

「ああ、殺す気で行ったけどね…」

「そうなの!?」驚いた様子だ。

「ま、それは置いて…」置いていいのかよ…

「あのゾンビはいくら攻撃しても一時的には動きを止めることが出来るけど死なない、あの発生方法も夢とは異なるわ」

「っーか、あれは夢なのか?」

「わからないよ」困ったような顔をしている。

「そうか…」さすがにわからないよな…

「けど…あの夢の内容は現実には起こるとあの男は言ったの」「美月は不安そうだ。」

そもそも俺はなぜ?あの夢のとおり、何かが起こるとわかったのか?ん〜、それだけリアルな夢だったんだな。

「ここまでが当たってるんだ、信じていいだろうな」「ここで一つ疑問に思ったことがある。」

「どうして夢の内容がわかったんだ?」聞いてみた。

「私も夢を見たの」

「どうやってだ?」

「分からない…自分の意思ではほとんど自由に動けなかった」

「そ、そうか」

「とにかく、ゾンビが倒せないのは分かった。これからはあの黒歴史を繰り返さないために動こうと思うが…いいよな?」

「もちろんよ」

「よし、わかった。戻ろう」

「そうね、長居すると化け物に勘付かれるわ」

そして、移動。

化け物はいないようだ。車に近づく。横でキャツと短く悲鳴が聞こ

えた。そちらを見ると…。

「助けて」化け物に引きずられて連れて行かれそうな美月がいた。

「美月！！！！」

ひっばている化け物の頭を潰す。すると化け物が周りから出てきた。

「隠れてやがった！！！！」辺りには化け物ばかりだ。

「どうしたんだ！？」横沢がでてくる。

「車を出すんだ！！！！」横沢に言う。

「分かった」と言つて、横沢は運転席に乗り込む。

車は動き出して、化け物を轢きながら俺らの前に来る。

荒っぽいな…

「乗れ！」窓から顔を出して言う。

「分かっていますよ」俺と美月は後部座席に乗り込む。

「どこに向う？」横沢が聞いてくる。

「案内する、右折だ」俺は横沢に指示を出す。

「ここはどこ？」遂に起きた千咲が聞いてくる。

「ここは…」美月が言おうとする。

それをさえぎつて俺が言う。

「森の家だ」

皆は何で来たのかと疑問に思っているようだ。

「いや、やっぱり森の死は教えないといけないだろ」

「そうね」美月が頷く。

俺は玄関の扉を叩いて言う。

「御免くださいーい！」

窓から人影が覗いてきた。

それで学生だと分かったのか玄関の鍵を開けて森の母が出てくる。

「こゝ、浩二は？」

「残念ながら……俺が言う。

そのまま、森の母は泣き崩れる。

「ごめんなさい……それでは」

急いでいるのでさっさと行く。

最後に「ありがとうございます」と言っていたようだがどうだか分からない。

祝！40話（後書き）

テスト終わりましたあ

別行動（前書き）

更新遅くなりました

別行動

「これでよかつたのか？」

横沢が運転をしながら聞いてくる。

「しゃーないだろ。やることはまだまだあるから。」
助手席で外を眺めながら答える。

「どこに行くの？」

千咲が後部座席であやとりをしながら言う。

「えーと、街中で頑丈な建物を探して、そこを拠点としよう」
俺の考えを述べる。

かなり良い考えだと思う。が横沢は言う。

「街中ってさあゝ。人、多いから敵が沢山いるだろゝ（笑）」

たつたしかにー！！！！それにこいつらの家族、助けても意味のないように思った。

ハッと今考えたことを考え直す、人の命がどうでもいいなんてどうかしてるな。

説得する方法は一つ！

「話そう。よく聞いてくれ」

露骨に俺の真顔に驚いた様子を見せてくれた。：そんなにふざけるかな？ 普段…。

それは置いといて話し始める。

「このバイオハザードが来る直前、国語の古典の時間、俺は眠って

いた。」

「授業中になにしてんの！？てかこんな事を暴露するために！？」
千咲がツッコミをする。

「いや、もちろん、違うよ。その夢の中で今と同じ状況だったんだよ。」

それを聞いて、千咲は疑ったような顔をする。

「じゃ、それは正夢だったのか？」

横沢が尋ねる。

「今のところはいきなり、違うルートに俺が変えたから…当たるかは解からないが…この後の千咲の家族が死んだりするのは当たるだろう。」

千咲は驚く。

「た…たすかるの？」

千咲は俺に聞く。

「わからない。しかし、やれることはやるつもりしている。」

「だから、その敵が沢山いるであろう場所に行く必要があるのよ。」
美月が言う。

「見捨てるという選択は…？」

横沢が聞いてくる。

「それはないつもりだが？」

俺は答える。

「しかし、現状でも生きていくかわからないし、こちらにも危険が及ぶ。下手に危ない橋は渡れないだろう」
たしかにその通りだ。

「は？何言ってるの？」

美月が言う。

「だから、助けようとして、俺らの誰かが死んだらどうするんだ？」
問いかけてくる。
車はバイク屋の前を通り過ぎる。

「止める。わかった。俺、一人で救助に向う。」

「それでいいのか？」

横沢が聞いてくる。

「ああ、千咲、学生証をよこせ、美月もだ。」

「え？なんで？」

千咲が聞いてくる。

「助けるために場所を確かめるためだ。信用を得るために手紙も書いてくれないか？」

「わかったわ」

「ほら、美月もよこせ」

「私のはとつくに死んでるわ」

「は？何でわかるの？」

「奴らに既に殺されたわ」

ああ、福崎たちのことだろうそれ以上は追求しない。

俺の学生証を横沢に渡して言う。

「この付近に小野寺と小山という奴らがいるはずだ、合流して、協力しててくれ。」

「了解」

横沢は答える。

「いいか、誰かが食料調達のためとかで町に出ると言っても、絶対に止める。」

俺は釘を刺しておく。

後は特に言うこともない。時間はドンドン過ぎていく、手紙を受け取り、車を出す。

「生き残れよ」

「ハッお前らもな」

車に行くようにサインする。車は走り去る。

俺は見送った後、バイク屋に向う。ゾンビが一体いたが木刀で殺す。

辺りを見るがゾンビはいないようだ。しかし、油断はできない。俺は店内に入ると、漁る。目的はバイクの鍵を手に入れるためだ。

しかし、見つからない。俺は物探しが苦手だ。

いつまでも探しているとゾンビが外に近づいて来てるのが見えた。匂いかなんかでやってきたのだろう。

「クソ！」

俺は諦めて、外に出る。外にも車やバイクが停まっているが鍵の刺さっているモノはないだろうとざっと見回すと運よく、鍵の刺さっているバイクを発見する。

「運がいいな」

俺はバイクに跨って、鍵を回転させる。エンジンが付いたようだ。ゾンビも近づいて来ているので走り出す。

以前に従兄弟から運転を未成年だが学んでいた。詳しくは聞いてないが、最低限度はわかるはずだ。

スピードは出さないようにして走っていく。町へはすぐに到着でき

そ
う
だ。

新たな犠牲

【横沢たち】

「着いたな」

ここは総一郎の家。一般の民家だ。…当然だが。横沢はエンジンを付けたまま外に出る。

「へえ〜こういう家に住んでるんだ。」

千咲が門を開けて、入っていく。

それを見て、横沢が無用心だと思い、注意しようとした。

「きやう」

千咲がそう言って、倒れる。

横沢は転んだと思い。手を貸すために近づく。

死角で千咲の姿は見えなかった。そして、家の敷地内に入って、千咲の方を向くと。

千咲は血で真っ赤になっていた。腹の肉が服ごと噛み千切られ、露出していた。横には足のないゾンビがいた。

横沢は這って近づいてくるゾンビを見て、美月に言う。

「車にもどれえ!!!」

美月、何かあったと察してすぐに車に戻る。

横沢も走って、運転席につく。そして、発車する。

「千咲は!?!」

美月は慌てて言う。

「やられた!アレでは助からん!!!」

横沢は運転しながら言う。「こちら辺にはさっきはゾンビがいなかったが今はラオ・ンシティ並みに出てきている。」

「おいおいおい、勘弁してくれよ!」

横沢は言う。美月、答えて。

「それより、どうするの?」

「ん?」

「ちよっと、どうしたの?」

「やばい」

横沢は道路の先にゾンビが沢山、壁のように集まっているのを見た。まるで肉の壁…。

「曲がって!」

言われたまま、曲がるとそこは上り坂だった。

「戻って!」

坂の上にはゾンビがいて、車をこちらに向って、押していた。その車がすごい勢いで下ってくる。

「どんだけ力があるんだよ!」

「それよりも早く!」

なんとか元来た道に戻る。

「クッソ!ゾンビが多い」

手詰まりだ。ゾンビが多くて、轢いていこうとしてもこの数かつさつきのような力なら車でも押し返されるかもしれない。

なんとか…一網打尽にする方法はないか…横沢は考えるがそんな手段あるかは怪しい。

その時、民家から二本の矢が車の正面に迫ってきたゾンビに刺さる。民家を見る。庭から二人の男女がいた。

男が叫ぶ。

「こっちだ！早く！」

横沢は車をがっちり、門の前に寄せて、駐車する。横沢と美月は車を降りる。迫ってきたゾンビを横沢が殴り倒す。そして、その家の門に入る。

二人は玄関の扉を開けて、待っていた。

「入って！」

美月、女、横沢と入り、最後に男が入る。

男が鍵を閉める。

ゾンビたちは車に阻まれ、門のところにはたどり着けずにいた。

「助かった、ありがとう」

礼を言う。男は当然のことだと言う。

「俺は横沢 次郎。こちらは井上 美月だ。」

自己紹介を始める。

「僕は小野寺 哲です。こっちが小山 奈々です。」

その名前を聞いて、総一郎と合流しろといわれた二人だと気づく。

そのことを言うと総一郎のことを心配したが協力についてはもちろんと承認してくれた。

一方、総一郎

まだ、道路を走っていた。ゾンビはこちらに近づいてくるがバイクには追いつける筈もなく、距離は離されていた。

「数が多いな、ここらには生きてる人間はいないのか？」

確証はないがゾンビは人のいる所に集まるといふ風に考えてよいと思う。

派出所があつたのでバイクを停める。
中に入って、千咲の自宅を探す。生徒手帳と照らし合わせて、発見する。そこにマーカーを引いて、持ち去る。
流石に警官の遺体などもなく、探してみたが銃の弾は調達できなかった。

夕方に千咲のマンションに着いた。ここまでは夢と同じだ。
N60を構えて、マンションを調べていく。中にゾンビを発見した。始末しておいたが安否が心配なので先を急ぐ。三階に到着。ゾンビは一見、いないように見える。
千咲の住む部屋へと入る。中には誰もいない。N60を構えて、調べたが誰もいなかった。

クローゼットの中を調べると中からあのゾンビから発生するミミズが出てきた。驚いて、足で潰す。
その時、玄関で物音がした。警戒してそちらに向くとゾンビがいた。3体だ。

しかもその顔は忘れられない、夢の中での千咲の家族と同じ顔だ。

「なんだと……」

俺は絶句する。また、助けることができなかつたのか。
木刀に持ち替える、ある程度、振り回せる、リビングまで誘い込む。体がまず入ってきたところを一思いに頭を砕く。…女性だ。次に入ってきたのは男性：父親だ。同じく、倒す。
最後は弟だ。もう頭がおかしくなりそうだ。なんで同じ人間同士でこんなことになった。

躊躇った時、ゾンビが突撃してくる。俺は倒れる。
俺はホルスターから銃を抜いて、頭を撃つ。

食料を求めて

【横沢】

無事に哲、奈々ファミリーと合流して30分経った。
外にはゾンビたちが蔓延している。

そんな中、千咲を失った悲しみの中に横沢と美月はいた。

横沢はクラスは同じ、しかし、話す機会はあまりなく、親しいというほどではなかった。しかし、この僅かな時間でかけがえのない仲間となっていた。

美月は泣いていた。以前から仲が良かったから悲しみも相当だろう。しかし、敵は50mも離れていないところで蠢いている。しかも食糧不足がおこっているらしい。いつまでも悲しんではいられない。

「どうしたものか」

横沢は考える。

食料がないのはかなり深刻な問題だ。

そこで外を見る、門の前には乗ってきた車が…武器なども中にあるのに…。

そこで車の中に大量の食料や物資があることを思い出す。

「食料、あった。」

横沢が言う。

「ええ？」

奈々は驚いたようだ。他の皆も驚きを隠せないようだ。美月はまだ

落ち込んでいるけど…。

「俺らのはあの車の中にいろいろな物資を載せてきてたんだ！」
しかし、この場の皆はゾンビが沢山来ているのは分かっている。

作戦を考えて、なんとかならないかと思うが無理だ。

しかし、このままでは餓死するだろう。この家もいつまで持つか分からない。

庭には柵などでゾンビの進入は防げているからいいがアレでは心もとない。

一方そのころ、総一郎は…

【総一郎】

「つく」

千咲の家族を土葬して、立ち去ろうとしていた。

「すまなかつた…」

しばらく墓を眺めていると土が膨れた。これに驚き、恐怖心が降りかかってくる。

脇においておいた木刀に飛んでいって、掴む。と同時に、土から人が出てくる。

「！」

そこには先ほど倒したはずの千咲の父が…。

こちらに向って、走ってくる。

突進を横に飛んで避ける。次に爪の攻撃がやってくる。後ろに跳んで避ける。そして、木刀で腹を突く。其の突きは俺の全体重を乗せた一撃。ゾンビは倒れる。止めを刺そうと振りかぶると木刀が掴まれる。

別なゾンビが背後から来ていたのだ。

牛刀をベルトから抜いて、逆手に持つ、頭部に振り返りざまに突き刺す。

ゾンビが倒れる。そいつは千咲の弟だ。

「なんで生きてるんだ？」

そこで悟る。ゾンビは死なない。

さっさと、倒れている奴に止めを刺して、バイクに向う。

急いだのは母も復活すると思ったが予想通り、背後では土が膨れて人影が見えた。

バイクにたどり着くと、背後からはゾンビが近づいて来ていた。

エンジンをつけて、走り出すと追いつけないのが分かるのか追って来ようとしなない。

247

同じように他のゾンビも寄ってこない。隙を覗いているのだろうか。とにかく、暗くなってきた。なので休める場所を探す。

そんな中、走り回るが休めるような場所はない。

とにかく、横沢たちと合流するために戻ることにした。

そして、走っていく。

【横沢】

「仕方ない、明日の夜明けに出るぞ、そして、奴らを倒し、この防衛の増強を行う。」

美月と二人で作戦を話し合っていると哲がやってきた。

協力をしてくれるらしい。大人たちも賛成だ。曰く、なにかをして死んだほうがましらしい。

それまで、休むこととなり、夜明けになる。日が昇り始めている。

そして、外に出るのは横沢と哲の父や奈々の父。後は援護に回る。

横沢は門を開けて、入ってきた奴らを一撃で崩していく。道が開けたら外に出る。そして、周りに群がる敵を哲の父と狩っていく。

「後ろだ！横沢君」

哲の父が言っていると横沢は前に飛び込み、正面の敵を足払いで倒す。背後を振り返って、殴る。

哲の父もバットでフルスイングする。

其の時、背後から哲の父が掴まれる。

救出しようと横沢は向うがゾンビが今度は奈々の父親に襲い掛かる。奈々の父からゾンビを引き剥がして、横沢は哲の父を助けようとするが自分も捕まる。

哲の父にゾンビの歯が迫る。

生還・・・食料調達ぐらいで死んでたまるかぁ！！！！（前書き）

メリークリスマス！！！！

クリスマスですね。イヴはどのように過ごしましたか？

私はやっぱり、コールオブデューティーですね。

・・・まあ、置いていて。長らく、お待たせいたしました。

続きをどうぞ！！！！

生還・・・食料調達ぐらいで死んでたまるかあ！！！！

「不味い」

ここで横沢は思った、このままでは食料はもちろん手に入らず、ここにいる哲、奈々の父も死ぬことになり、最悪、美月たちの待機している家も掌握されてしまっただろう。

何とかするにはゾンビを一掃するしかないが生憎、彼らは所詮ただの一般人だ。そんな装備は持つことができるはずがなかった。

「はっ離せ！」

哲の父はもがくが相手は生身の人から一線越えた化け物。力で勝ち目はなく、どうなるかは目に見えていた。

歯が迫り、動けば首に噛み付ける距離までゾンビの顔が哲の父に近づいた。横沢は遠くでエンジンの音を聞いた。先ほども聞こえたが空耳だと思っていた。

そのときバイクが現れる。

バイクの主はエンジン音を立て、哲の父を喰らおうとするゾンビに向って、直進。すれ違いざまに木刀で頭部を吹っ飛ばす。少しでも間違えたら、哲の父の頭も共に吹飛んだかもしれない一撃。躊躇することのない一撃。

哲の父はその場から離れて、門に近づく。そこで座り込んでしまう。バイクの主はブレーキを掛けて、降りる。

ゾンビたちがそちらを見る。新たに現れた奇妙な存在に警戒をしているのか、それとも獲物が増えて、そちらを狙おうとしているのかは分からないがそちらを見たまま、動きが止まる。

バイクの主は辺りを見回す、そして、粗方の状況は把握したのかゆ

つくり、横沢が拘束されているほうに歩く。

そして、横沢がもがき始める。ゾンビも怪力だが急に動き出した横沢を押さえ込もうとそちらに注意が向う。

その隙にゾンビに近寄り、頭部に一打。それでは倒れなかったが横沢からは手が離れる。開放された横沢は奈々の父を助けようと拘束しているゾンビに突進をする。バイクの男は横沢を拘束していた奴に足払いを掛ける。そして、顔面に思いつき蹴りを繰り出す。

ゾンビは動かなくなる。

一方、横沢が突進すると奈々の父も巻き込んで倒れる。そこで、ゾンビは奈々の父を喰らおうとするが頭に棒が刺さり倒れる。

哲の援護、奈々の動けないものの救出。その他のレンガやらの投げつけによって、ゾンビはこちらに損害を与えることなく、倒れていく。

「おい、運ぶぞ！援護してくれ！」

横沢が叫ぶ。

荷物を持った横沢にゾンビが迫る。咄嗟にヘルメットを脱いで、投げつける。見事、近づくゾンビに当たって、ゾンビは倒れる。ヘルメットを脱いで晒した素顔は総一郎だった。

総一郎は跳躍、ゾンビの頭に全体重を乗せて、着地。ゾンビは絶命する。

「またせたな！」

「おいおい、お前かよ！」

荷物を運びながら叫ぶように言う。

「何だよ？こっちは徹夜で戻って来たんだぜ？」

ゾンビを木刀で転ばせて、近づけさせないようにしながら言う。

「こつちだつて、千咲がやられたり、不幸続きだつたぞ！」
敷地内に荷物を放り込みながら言う。

「そうか…千咲もか」

総一郎はより一層、力を込めて、戦う。ゆるさん

荷物は無事、運び出した。

「おい、引くぞ！」

「りょうかーい！」

そう言つて、目の前の一体に突きを食らわせて、倒す。そして、走つて門に行つて、何事もなく、戻る。

そして、車の中から取り出したピアノ線で進入できそうな所を囲み、通れなくしたり、防御を増幅させる。

「これで終了か？」

哲の父が確認したところで終了する。

「哲、生きててくれたか！」

総一郎は哲に言う。

「はは、もちろんですよ。総一郎も生きてて、よかつた。」

「ああ」

そう言つて、会話を切る。

「横沢、やはりダメだつた。」

それを聞いて、何のことか察したのかそれ以上は言わなかつた。

「ところで…」

美月が話を切り出す。

「これまで何があつたの？」

「ああ、分かった話すよ」

<数時間前>

「くっそ、何だあいつ等！動きが良くなってる…」

今いる場所は既に横沢たちも潜伏しているであろう町に来ていた。

来てからというものずっと、ゾンビの襲撃が続いていた。

とりあえず、自宅に向かう。空が白い感じになってきている。そろそろ、夜が明けるようだ。

門を開けて、入ると白骨と肉片が混じった死体があった。所々、食いちぎられた痕がある。その服には見覚えがあった。

「くっ千咲か？」

間違えていて欲しい。

とりあえず、中に入る。誰もいない…。

横沢たちの最悪の場合を考えてしまう。

ゾンビが窓の外に見える。こちらには見向きもせず、一定の方向に歩いている。

「こっちは無視か？」

それで、あることを思いつく。ゾンビたちを追っていけば、合流できるかもしれない。

映画とかではゾンビの鼻が利く。それでどこまでも負っていくという設定があったような気がする。てかあったらいいな。

とにかく、着替える。

いつもの服装。グレーの半そでのシャツに長袖のズボン。そして、防刃のチョッキ、ネットで購入したものだ。使うとかは考えなかった…。

そして、木刀。玄関で安全靴（鉄板が入ってる）を履いて。準備は整った。

外を見る。ゾンビも流石に馬鹿ではあると思うが自慢の嗅覚で総一郎の所へ近づいてきていた。

その脇で他のゾンビがさつきと同じ方角に進んでいた。

「あつちは……」

思い出す。横沢たちに合流するように言った哲の家がある。偶然かもしれないが言ってみる価値はある。

バイクまで目測で三十メートル、そのライン上にはゾンビがない。しかし、ゾンビの周りには群がっていた。

門を開ける。門が開く音がキィイイという、金属の音がする。

ゾンビが門から入ってくる。

エンジンはつけっぱなしだから乗ればこちらの勝ちのはずだ。

門の横の塀を越える。

そして、さつきの脱いだ服を敷地内に投げ込む。

ゾンビはそちらに行く。

ゾンビの嗅覚がいいのは実証できたようだ。しかし、ご丁寧に人間の臭いの所へ行くとは恐るべし！

とにかく、まだ残っているゾンビを叩き、バイクに跨る。ヘルメットを被り、エンジンを鳴らして進む。

そして、走っていく。途中、坂之上から車が走ってきたと思ったらゾンビが押し出していたり、驚くことが沢山あったがとにかく、哲の家に到達して、今のこの状況がある。

生還・・・食料調達ぐらいで死んでたまるかあ！！！！（後書き）

ご意見、ご感想をどうか、御願います。

情報収集 アットリアル(前書き)

今回もグダグダです

情報収集 アットリアル

「という感じでここにいる。」

総一郎は言う。

「しかし、食料は手に入ったが長くは持たんぞ？」

哲の父が言う。

「そうだな…とりあえず、情報を集めないと、TVを付けてみてくれ。」

奈々の父が言う。

電気は通っているようだ…というか確か、この家に太陽光パネルを付けたと聞いたな。

早速、哲はPCを起動していた。哲、奈々の母親はそれを横で見る。

美月は奈々と二階でゾンビたちを監視してると言って、部屋を出て行った。

「状況はどうですか？」

総一郎は哲の父に聞く。

「うむ、あのゾンビはウイルスのようだ、今、番組で話している。」
俺もTVを見る。

キャスターが言う。

「ウイルスに感染しますと人格がなくなり、人を襲うようになりま
す。かつ、時間が経つと症状が悪化、現在、どんな状態になっても
動き続けるゾンビのようになることが確認されています。」

「ここで流行ってるのと同じウイルスだろうな…」
深刻そうな顔で哲の父が言う。

どうやら、世界中で同じ事態が起こっているらしい。

映像では隣国の状況が映っており、大規模なデモみたいな状況などが映されていた。

「おーおー、ひでえな…」

正直な感想を述べた。てか、こんな時にやろうとするのに感心しませぬ。

その時、TVに避難所の場所やらが表示される。

近くにはないことはないが…こんなゾンビがいる中、外に出ることはできないでしょ。

情報収集中、やることがない。

横沢と一緒にグダグダする。

「しかし、あいつ等…どうやって、倒すか？」

横沢が言う。

「さあ？どうしたものかな…」

答える。

「大爆発でも起こしたりしないとね…。」

横沢が言う。

「たしかになあ」

同意する。

大爆発なんて起こせるわけない、それにこんなところで起こしたら、大惨事になるだろう。

暇つぶしに銃の弾を取り出し、数える。

ここに来る途中で警官から何発か貰ってきたので今は12発ある。
M60本体も3丁になった。

やはり、実践で使うには少ないな…。と実感させられる。その時、TVからキャスターがでかい声をだしたのが聞こえる。見てみると遊園地のようなところで人々が逃げ回っている。ここは東京の有名な遊園地のようだ。

ここにはいつもの夢の国のような姿とは一変して、ゾンビがたくさんいる。

しばらく、ここにアウトブレイクが発生した後も大勢が立てこもっていたようだがバリケードが破られたらしい。それをへりで空から映していた。

その時、キャスターがまた叫ぶ。

なにかがへりに向って飛んできている。

「あれは…！」

総一郎には見覚えがあった。

夢の中とは姿がビミョ〜に違うが空を飛ぶタイプの化け物だった。

へりのパイロットは慌てて、逃げようとへりを移動させるが一体がローターを掴む。とんでもない力でローターの回転が止まる。

へりが下降している。そして、窓が破られ、別の奴が入ってくる。

そこで画面がお花畑になって、TVは終わる。

哲の父、横沢は啞然としている。

「窓にも貼っておくか…。」

哲の父が提案したのに賛同して、二人は部屋を出て行く。

…落ち着かない、外を見ると相変わらず、ゾンビが集まってきている。

TVのほかの番組はほとんど砂嵐だし…。

ラジオを付けてみる。

番組はしっかりやっているがどこも伝えてるのは暗い情報ばかりだ。まあ、こんな時に芸能人の結婚についてとかやってたら…それはそれでムカつくけどね。リア充爆発しろ!!! やることもないので退屈のあまり、いつの間にか眠っていた。

〈美月視点〉

哲が見張りを変わると言ってきたので1階に戻ることにした。奈々はまだ、見張りを続けるらしい。

1階に行くと総一郎が眠っていた。

そつえば、徹夜らしかったな…。

寝顔がなんか…いい!!!…まずい不味い! コレでは変態のようだと目を逸らす。

TVを哲の父が見ていた、今はどこかの封鎖の様子を映していた。

まだ、生き残りが他にいたようなので安心する。

警官が化け物に向って、発砲している。そして、市民は逃げようとして列に並んでいる。中には暴力で列に割って入る者もいる。

そして、並んでいた市民が発症、ゾンビになる。そして、周りの人を襲っていく。慌てて、警官も退治をするが既に襲われた人も発症して数は増えていく。そして、警官も数を増やし発砲。殲滅するが周りの市民も巻き添えを受ける。

暴動、暴動、暴動…暴動しかない。

「酷い…」

この状況を見たら、変な趣味を持つ人以外は皆、こつ思っだろつ。

「この世の破滅だな」

哲の父が言う。

他の哲、奈々の母たちも情報収集を辞めて、TVを見ていた。

横沢が隣に座る。

「落ち着いたか？」

千咲が死んでから沈んでいたのを心配してくれていたのだろう。

「もう、大丈夫…ありがとね」

これで心配は解けたようだ。横沢は「そうか」と言っ、TVを黙ってみる。

外は暗くなってきた。

こんな事をしているが外には依然、化け物が多くいる。

バリケードもよく持っているがこのままでは破られてしまいかもしれない。

総一郎も戻ったし、一度、奴らを掃除する必要があると思った。

その時、外から一段と大きい、声が聞こえた。

分かっていることは人間の声ではないということだ。

ザット いず スア(前書き)

どうも、今年も終わりですね・・・
どうぞ、お楽しみください。

ザット いずへア

窓から外を見ると外には熊がいた。

普通の熊ではないようだ…足がフラフラしている。

総一郎が起き上がる。

「何の音だ？」

総一郎は全体に問う。

「ああ、熊だ…」

横沢が答える。

「熊だと？どんな様子だ？」

「ああ、特に問題はないな…」

横沢が言う。

美月が小さく悲鳴を上げる。

「どうした？」

哲が聞くと横沢が答える。

「ぞ、ゾンビを食っている。」

なんと熊がゾンビを食っている。

骨ごと噛み砕いているようだ。

熊と目が合う。門から敷地内に入ろうとしている。

「ぐるああああ」

ピアノ線が邪魔をしているが切れる。熊がゾンビと共に雪崩を打って、敷地内に入ってくる。

「全員、二階に退避！！！」

靴も履かずに二階に向っていく。総一郎は鞆から銃を3丁、取り出して、哲の父と奈々の父に渡す。弾は3発ずつ入っている。

横沢と総一郎以外は二階に行つて、リビングに残っているのは総一郎、横沢だけだ。

その時、玄関が破られる。

「ぐるああああ！！！」

熊は轟音を立てて、こちらに向つてくる。

時速60kmで走るだけあつて、これまでで最も強い突進だろう。

しかし、ここは家の中、壁があるので別のところから廊下に出る。付いて来る熊。

壁を破りながらも後ろから追つてくる。

なんとか階段まで来ると上に哲、奈々の父と哲と奈々がいた。

両父はM60を構え、哲、奈々は弓矢を構えている。

総一郎は横沢を先に上らせる。

そして、熊に一発、銃弾を浴びせる。

熊は怯むが走ってくる。

しかし、一段飛ばしで一気に階段を上り終え、上で銃を構える。

横沢は美月や哲、奈々の両母を追つて屋根に上つていった。

熊、階段の下まで来る。

「撃て！！！」

まず、哲と奈々が矢を放つ、命中。しかし、熊は上つてくる。

3丁の銃が火を吹く。

全て、命中。熊は階段から転がり落ちる。

「やったか？」

哲が言う。…フラグっぽいな。

熊が再び、立ち上がる。次は哲がガスボンベ（コンロに使う奴を転がす）

「行け！！！」

周りにそう言っつて、ボンベを撃つ。

破裂。ボンベの破片が熊に突き刺さる。総一郎も身を隠す。

破片がこっちには刺さらなかった。耳がキーンとする。

熊、まだこっちに来ようとしている。止めに頭部に狙いを定めて、発射。熊は倒れる。

それと同時にゾンビたちも階段を上がってくる。

総一郎も屋根に向う。

窓に立つと上から手が差し伸べられる。それに捕まり、上に上がる。

月明かりが照らしている中にでる。

「無事か？」

横沢が聞いてくる。

「ああ、ゾンビが来た。」

総一郎がそう言っつと横沢は屋根の端に行っつて、下の様子を覗っつ。ゾンビは上っつて来れないようだ。

「どうするっ？」

美月が言う。

…お前はいつもそればっかだな…。

今はどうでもいいことだ。

横沢が言う。

「皆、降りるぞ」

周りほとんどでもないといったような表情だが横沢は続ける。

「今ならゾンビはこの家の二階に集中している。幸い、ロープもある。」

美月が必要な物を入れたバックを持ってきていたのだ。

そう言つて、横沢は木刀を携えて、下に下りていく。

総一郎もそれに倣つて、降りていく。

横沢が玄関からみんなの靴を持ってきていた。

次に奈々の父が降りてきた。

美月から車の鍵を受け取つたらしく、靴も履かずに車のエンジンを付けに行つた。

哲と奈々は車の周りのゾンビを狙う。

総一郎と横沢は退路を守る。

家の中からゾンビが出てくる。

総一郎、頭を木刀で打つ。横沢は木刀で玄関の中に押し返す。

次々と降りてきて、全員が降りてきた。そして、車に向かつていく。

残つたのはまたしてもこの二人。

横沢と総一郎。

「行くぞ」

正面のゾンビを蹴り倒して横沢が言つ。

「わかった。」

バックから取り出したポンベをゾンビたちの足元に転がして、銃で撃つ。

本日、二度目の破裂。

破片が足元に刺さる。ヒヤッとする。

車に乗り込むと同時に発射する。
家に火が燃え移っていた。

哲一家のリアクションは敢えて置いておく。

「どこに行く？」

奈々の父が聞いてくる。

「ガソリンが…奈々が言う。」

見ると、赤ランプがついていた。

「セルフサービスのガソリンスタンドに！」
哲が言う。

「わかった」

奈々の父はそう答えて、スピードを上げる。

窓の外を眺めていても先ほどのような変わった奴はいなかった。

「危なかったわね」

美月と奈々が話している。

「おい、総一郎、これからどうするんだ？」
横沢が聞いてくる。

「とりあえず、完全な食糧確保と丈夫な立てこもれるところだな」
総一郎は半ば諦めたように言う。

あの様な化け物があると分かった以上、そのような場所は限られて
くると考えていた。

森の中に身を潜めるといふ手段も思いついたが…奴らは臭いで辿っ
てくるだろう。たぶん！

船の上で過ごすというのも思いついたが遭難して今より状況が悪く

なるだけだ。

「木の上なんかどうかしら？」

奈々が言う。

「…子供の秘密基地じゃあるまいし、無理だろ。それにさっきのよ
うな熊のゾンビもいたから上ってくる奴が現れてもおかしくない」
横沢は答える。

「じゃあ、どうすれば……」

奈々は言う。

とにかく、ガソリンスタンドに着いたので降りて、使えるものを探
す。・・・見つかったのは自動販売機を壊して、手に入れた飲み物
だけだ。

そして、ゾンビを近づけさせない。

総一郎は走る。縁石に足を引っ掛けて、転んだゾンビがいたので止
めを刺す。

4、5匹しかゾンビはいなかった。

全てを殲滅し終えると

ガソリンも溜まったようだ、再び、走り出す。

とにかく、夜が明けるのを待つ。公園にとどまる、エンジンを消す
と、ゾンビは集まってこなかった。

見張りは一応、立てて、それぞれ、疲れを癒す。

ザット いず スア(後書き)

ご意見、ご感想があれば御願ひします

新たな隠れ家（前書き）

あけましておめでとう

今年もよろしく御願いたします

新たな隠れ家

深夜に交代の時間を迎えて、総一郎は美月に起こされて起きる。

「起きなさい、見張りの時間よ」

美月は言う。

「あいよ、うん」

まだ寝ぼけながら総一郎は言う。

「シャキッとしなさい！」

美月にビンタされる。

「イタツ」

しかし、目はしっかりと覚めた。礼を言っ、起きる。Mではないぞ。窓から外を見るが何もいないようだ。

幸い、何事もなく、時間は過ぎていく。

午前八時

ゾンビも現れずに無事、朝になり、明るくなった。

「おはよう」

哲の父が起きた。

「あつおはようございます」

総一郎は返す。

「すまないね、子供にこんな見張りまでさせて」

哲の父はすまなそうに言う。

「いえ、全然、気にしないでください。高校生ですよ。」

総一郎は言う。

「そうか・・・ありがとう」

そして、美月が起き、この会話は切れる。

「今日はいつまでも、こうしているわけにもいかない所以要塞造りだな。」

横沢が言う。

「じゃ、ホームセンター行くか。」

総一郎の提案に皆は賛成して、車で行く。

ホームセンターにはゾンビは既にいなく、血のあとだけが残り、死体はゾンビとなって、どこかに行ったようだ。

「酷いな…油断するなよ」

総一郎が言う。

「わかつてる」と次々と返事が返ってくる。

一部例外で二人一組となって、探索が始まる。

その一部例外に当たってしまった総一郎。

一人寂しく探索をしているとトイレに行きたくなる。

走って、天井にぶら下がっている印を頼りにトイレに走っていく。

銃を入り口で構えて、中を確かめる。

この店の中でさつき、ゾンビと交戦したので他にもいるかもしれない。

しかし、調べても中にはいなかった。ゾンビは…。

個室で開かないところがあった。鍵が閉まっているようだ。

「誰かいますか？」

声を掛けると中から人が現れる。

二人の青年の男性だ。

二人は鉄パイプを構えて、こちらを警戒している。

「人間か？」

片方が目を血走らせて問う。

「ああ、人間だ……」

総一郎は銃を下ろして言う。

さっきの聞いてきたほうの青年が銃を凝視する。

それに気がつかず、もう片方のおっさんが自己紹介をする。

「俺は海堂、海堂 かいどう 武だ たける」

握手を求めてくるので応じると。

目を血走らせて、青年は言う。

「待て！こいつ、実はゾンビかも知れないぞ！」

そう言つて、鉄パイプを向けてくる。

「落ち着けよ、わるいな、こいつ、気が動転してるみたいだ。」

海堂の説得でなんとか、話してくれるようにはなった。

しかし、さっきから銃を見てくるのが気になる。恐怖とかの目なら

納得だが。明らかに目が笑っている。…とにかく、警戒しておく。

とにかく、一緒に行動することになる。

「総一郎くんは何をしていたのかい？」

トイレを済ませて、歩いていると聞かれる。

かくかくしかじかと昨日の事について話す。

新しく、立てこもるところが必要になったことも。

「パチンコ店はどうかかな？俺らも行く予定だったんだよ」

海堂が言う。

すると青年…名は藤崎 ふじさき 剛 こうが猛反発する。

「おい！何を言ってるんだ！？」
「どうやら、知られたくなかったようだ。なぜだか知らんが。」

「なぜですか？なぜパチンコ店？」

総一郎は海堂に聞く。藤崎では話を通じなそうだ。

「彼から聞いた話だが新しくできたパチンコ店の入り口などが強化ガラスで出来ていて、立てこもるには良いと教えてくれたんだ。」
海堂は答える。

「そうさ、俺はそこでバイトしてたからな…」

藤崎は答える。

総一郎は友人がそこでバイトをしていて、同じことを聞いたことがあったので間違えないと考えた。

「なら、そこにしましょうか…いろいろ運ぶの手伝ってください」
総一郎は二人に頼む。

藤崎は露骨に嫌そうだったが二人とも手伝ってくれるらしい。

海堂が軽トラックを持ってきていたので必要なものを積んでいく。そして、途中で美月たちと合流したので一緒に積んでいく。

総一郎は藤崎が美月を見た瞬間、いやらしい笑みを浮かべたのを見た。…本当にコイツはやばいかもしれない。

とにかく、作業を終えて、外の駐車場で休んでいると駐車場の陰で藤崎が美月に言い寄っているのを見つける。美月は嫌がっているようだ。流石に見過ごすことはできないので近づく。

「いいじゃねえか、少しぐらい、減るもんじゃねーしよ。」
ありきたりの台詞にうんざりする。

「おい、何してる。美月、こっちに来な」

総一郎が言つと美月はそそくさと走って、皆のところに行く。

「なんだ？てめえ？きにいらねえ…」
藤崎は言う。

争いは避けたいので無視をして去る。
そして、ゾンビが集まり始めていた。

「来たか…」
横沢が言う。

「よし、少し、片付けるぞ！」
哲は言う。

「まかせろー！」
海堂は言う。心強いな。

そして、かるく戦う。ゾンビが少なく、特にピンチになることもなく終わる。

藤崎はずっと、隠れていた。

皆、何をしているのか…と思い、呼びに行こうとすると出でてくる。

ナイフと手に持ち、美月の首に当てている。

「全員！動くな！…！」
藤崎は言う。

「何をしているんだ！？」
海堂が言うが無視をする。

「お前もだ…」
そう言つて、総一郎の方を向く。横沢がその隙に藤崎の死角へ移動する。…気が利くな。

「銃を寄せ」

美月の首にナイフを当てながら言う。…最初から狙っていたのはM

60のようだ。

総一郎が躊躇していると「早くしろ!!!」と叫んできた。美月が泣いている。

総一郎は大人しく銃を地面に落とす。

「よし、蹴って寄せせ」

言われたとおりに銃を蹴って、藤崎の前にやる。…暴発とかしないか不安だった。

藤崎、それを見て、拾おうと屈む。

その時、横沢が動く。

背後から近寄って、とび蹴りをする。美月はその隙に藤崎の顔面に蹴りを入れて、逃げてくる。…そこら辺は強いなこの女…。

総一郎、奈々の父から銃を借りる。

横沢が追撃をするが投げられた。横沢、受身を取るが、コンクリートに叩きつけられては流石に痛むようだ。悶えている。

藤崎、銃を構えて、横沢を撃とうとするが出来なかった。

なぜなら総一郎が射殺してしまったからだ。

藤崎の頭を的確に狙い。引き金を引いた。銃弾は頭にみごと当たって、藤崎は倒れ、動かなくなる。

弾の入っていない銃を奈々の父に返して、横沢のところに行く。

「無事か？」

「ああ、いって、このやろう。」

そう言っ、横沢は藤崎の頭を足で小突く。

総一郎は奪われた銃を拾って、言う。

「急ぐぞ！日が暮れちゃう！」
その言葉で皆、急ぎ始める。休憩をするつもりだったがいそいで行動する。

銃を使用したので臭いやら音やらでゾンビが来るかもしれないからだ。

そして、パチンコ店へ走り出す。

100m先に目標地点のパチンコ店を発見。現在地は橋の上、近くに川がある。…上流のほうなので水は綺麗だ。

まだ、十分、時間はある。駐車場に車を停めて、中を探索する。トイレ、屋根裏と細かい場所も調べたがゾンビや人はいなかった。ここを拠点に決める。

「よし、なかなか、いいところだな。」
哲が言う。

「よし、とにかく、コレを運び出そう」と言っ、パチンコ台を運ぶ作業に入る。

台を駐車場を囲むように持って行き、車が一台出れるスペースだけを残して、ゾンビが入れないようにする。さらに海堂さんがコンクリートで固める。

運び終わると、もう夕方になっていた。しかし、作業は続ける。

女性陣は店内の掃除を始める。

男たちは二手に分かれ、レンガを裏口、正面の入り口に屈めば全身は隠れるぐらいに積み重ね、同じく、コンクリートで固める。

さらに窓には格子をつける作業やらで夜まで時間がかかる。

そして、哲の父が外にはアンモニアの入ったビンを投げて、割る。アンモニアが飛び散る。すぐに入り口を閉める。

「何をしているんですか？」

総一郎が問う。

「ああ、これで我々の臭いが消せれば…と思ってね」
哲の父が答える。

「なるほどな」

海堂が感心している。

床にはブルーシートを敷く。靴を脱いでその上に立つ。そこに毛布を敷いて、眠る。

暑さ対策の扇風機の音以外は何も聞こえない。

「総一郎、寝たか？」

横沢が聞いてくる。

「なんだ？」

周りは皆、寝たようだ。今日の見張りは横沢である。

「この状況はいつまで続くんだ？」

「さあ、どうなるのか…」

考えてなかったわけではないが…この先はどうなるかまったくわからない。

このまま、死んでしまいかもしれない。考えると不安になる。

「このまま、野たれ死んだりなんて考えてないよな？」

横沢は問う。

「そんなこと言っても…何かできることはあるのか？」

「ああ、例えばこの町だけでもゾンビを消すとかさ…」

「町の爆破でもしないと無理だろ、人口、何人だと思ってる？それに森やらもあるから全てのゾンビを見つけるのも難しいんじゃないか？」

「それも…そうだな」

沈黙が流れる。

「この戦争は…終わらないかもな…」
横沢がさっそく沈黙を破って言う。

「いや、ゾンビさえ倒せば…」

総一郎は反論するがすぐにひっくり返される。

「いや、終わらない。俺はわかったよ。仮にゾンビを掃除しても今度は藤崎のような人間が現れ、食料などを求めて争うだろう…」
この言葉に反論できない。前から総一郎も思っていたことだ。

「確かに。俺もそう思うぜ？だからと行って、絶望することはないだろ。俺らはこうしてよい仲間と出会い、生き残ってるではないか」

総一郎は言う。

「そうか…そうだな。悪かった。もういい。」
そう言って、横沢は黙る。

総一郎もいつしか眠っていた。

新たな隠れ家（後書き）

ご意見、ご感想を御願ひします。

外伝―裏切り（前書き）

はい、外伝です。

え？いや、皆こういつのやっってるから・・・え？

まっまあ、暇つぶしになっただらうれしいです！

外伝―裏切り

これは総一郎たちとは別のグループのお話。

場所はゴミ捨て場の前

「おいつ下がれ！奴らが来るよ！」

そう女性が言つて、他の仲間と先に行つてしまふ。

正面からは化け物たちがやってくる。男は置いてあつた、ごみの入つたポリバケツをゾンビに向つて投げつけて、時間を稼ぐ。

歩く速度では負ける気がしないがずっと歩きつぱなしで疲れているからできるだけゆっくり、歩きたい。

先に行つた仲間の女を追うために急がないといけないけどね。

「あんた、もつといそぎなよ！」

そう言つて、曲がり角で待っているこの茶髪のながい髪の女、名前は『藤宮 結衣』（ふじみや ゆい）

「わーつてるよ」

そう言つて、ぐだぐだしながらついて行くロン毛は『田中 秀』（たなか しゅう）

「きゃー！」

もう一人の女性の仲間が背後から現れたゾンビに捕まり、止める隙もなく、首にかぶりつかれる。

「がぼ、ぐぐがあ〜」

口から血と泡の混ざつた、くっさいのを吐き出しながら崩れる。

「行くぞ！」

田中は仲間を失い、ボーっとしている娘たちに言つて、歩かせる。

背後からは先ほどの女性も立ち上がり、化け物として食欲を満たすために田中たちを喰らおうと歩き出していた。

彼はただコンビニに買い物に行くために家を出てきたので財布以外は何も持っていなかった。

歩いていると、田中の住むアパートまでたどり着くことができた。

「よし、休めるぞ！」

彼女たちを元気付けるために言う。

そして、階段を上っていき、鍵を開いて、家に入る。

「そこら辺で楽にしてて」

そう言っつて、PCを立ち上げる。

「ねえ、これからどうするの？」

結衣が聞いてくる。

「待ってて、避難所を探す」

大人しく、付近の学校に行くのがいいだらうが今は詳しく、的確な情報が欲しかった。

行こうとしていた学校は避難所には指定されておらず、別なところだった。一番、近いのは警察署だとわかった。

すぐにプリンターを使い、人数分地図をプリントする。

「見て、ここが今いる場所…そしてここが避難所だよ」

プリントに印を付けて、見せる。

「わかったわ。さっそく、向いましょう。」

結衣が立ち上がる。

地図を受け取った、彼女たちは立ち上がり、行こうとするが制する。

「待って、装備は整えていかないと…」

そう言っつて、包丁を取り出す。

彼女たちはそれを見て、ぎよっとする。

「さあ、行こうか……」

リュックに食料などを入れて、家を出る。

外には避難所を目指して、人がたくさんいた。

「何よコレ！通れないじゃない！」

結衣の仲間の一人の真由子が言う。

「くっ、残念だが…進めそうにない。」

部屋に戻ることになり、戻ろうとすると人々が悲鳴を上げる。

田中たちは何事かとそっちを見る。

一台のトラックが人を轢いて走っている。

逃げようとしている人が多くて、逃げる事ができずに轢かれていく。

とにかく、気は引けるが道は通れるようになったので行く。

走って警察署に行く。しかし、進行方向より化け物来る。

更にその先ではトラックが事故っていた。

「嘘！どうしよう！？」

真由子が言う。

「進みましょう！こっちよ！」

結衣が言う。

田中たちはそれに従っていく。

先にはコンビニがあった。

店員がドアを閉めようとしていた。

「待ってくれ……！」

田中が叫ぶと、化け物はまだ集まってきていないのでまっすぐ来た。

田中たちが入るとすぐにドアを閉める。

店員がシャッターを手際よく閉めながら言う。

「おい、周りに化け物はいたか？」

「ああ、大体、50mぐらいのところにはわすかだがいた。けど人がたくさんいたから増えるだろうな……」

田中は答える。

真由子はよく見ているなど…素直に感心していた。

「まあ、ゆつくりしていきなさい…ここなら安全だろう……」

店員は言う。人柄がよさそうだ。

するとドンドンと叩く音が聞こえる。人の声は聞こえないのである。化け物だろう。

そのまま、時間が経つ。

いつの間にか眠っていたようだ。

外が暗くなったようだ。床に置かれた蝋燭が店内を照らしている。

店内の時計も午後7時を指している。

しかし、さつきから腕がきついと思ったら拘束されていた。

さつきの店員が目の前に立っていた。

「おう、おきたか？…効いたろ？睡眠薬」

「な、何をする？」

「安心しろ、殺しはしない。死んだら化け物になるかもしれないからな。」

結衣、真由子も隣で拘束されていた。

「目的はなんだ？」

「ん？もちろん、女さ…アンタは無用だが、囷にはなるかもしれ

ないからな〜」

イカレテイル…てか、こんなときなのに…女って…。

「もう、この世は終わりさ〜」

そう言っつて、ヘラヘラ笑っている。

真由子たちもようやく、目を覚まして、状況に気づいたようだ。

「おお〜、起きたか…早速、オジサンの相手をしてくれよ…」
そう言っつて、彼女たちに近づく。

「やめろお!!!」

田中は叫ぶが相手にされない。

しかし、彼女たちも精一杯、抵抗していて、上手くいかないようだ。

田中は蠟燭の火を使い、拘束しているロープを焼ききろうと店員に見つからないようにして実行する。火傷を負ってしまったが上手く、焼き切ることができた。

そして、立ち上がり、店員に向って、飛び掛る。その時に蠟燭が倒れてしまった。いろいろと燃え移っている。

店員は油断していたが立ち上がると包丁を構えて、突っ込んでくる。

田中は避けようとしたが包丁は田中の腹に突き刺さる。

田中は激痛に襲われた。

倒れるが店員はこれでもかというほど何度も刃を突き刺す。笑いながら。

田中は既に意識がなく、事切れていた。

結衣はそんな狂気に満ちた店員から逃げようとするが入り口はシャッターが閉まり。炎が結衣たちの周りを包み込んでいた。

店員は結衣のせいにして、結衣にも襲い掛かる。

泣きながら見る、真由子。

その時、品物のボンベが破裂する。そして、火事は酷くなり、全てを包み込んでしまった。

1週間後、焼け跡で4つの影が立ち上がる。そして、肉を求めて、町を彷徨う。

外伝―裏切り（後書き）

ご意見などございましたら
どんどん御願います！

目の保養も必要さ！(前書き)

総一郎グループに戻ります。

暫く、今回のような感じになるかもしれない

目の保養も必要さ！

引越しから数日たった。

アンモニアがあまりにも臭く、あれから水に変えた結果、同じくゾンビがよってこないのを発見したので外に撒くのは水に変えられた。皆さんはアンモニアの刺激臭を知っているでしょうか？以前に掃除で使ったことがあるが…アレを嗅いでいると…鼻がメツチャスースーする。ものすごい臭いですよ。

さておき、今は駐車場で農業をしています。…もちろん食糧確保のためにですな。

ピーマンやらトマトやらその他大勢の野菜があります。虫除けにハーブを植えていたりもする。

少し先には屋内プールがあるのを発見。

そのこのプールは天井が窓になっていて、日光が入ってくる。…これから環境の変化がどうなるかはわからないのでそこにもタフな農作物を植える。

食料面は量という問題を除けばそこそこ、良い状況だ。

今は横沢、美月と川に水汲み所の調査に行っている。

このパチンコ屋は最高の場所だ。この川はけっこう綺麗だし…今となっては俺らにとってのガンジス川となれるといいな。

とにかく、今は上流に向って歩いている。

「あれは…」

美月が何かを見つけたようだ。

「ゾンビだな…」

片目用の双眼鏡を見ながら総一郎は言う。

「ソレ、必要ないだろ…馬鹿か」

横沢が言う。この一言にムカツとくる。

「あ？そこは突っ込むなよ…目が悪いんだよ！」

「なんだ？メガネ掛けるや」

横沢と睨み合う。ああ？ごらあ！コノヤローなどの暴言のパレードが始める。

「やめなよ…敵がいるのに…」

美月が止めに入る。

流石に二人は喧嘩をやめる。

「迂回するか？」

「時間もあるし、そうするか。」

総一郎と横沢は木刀を構え、美月は竹やりを持つ。

三人は歩いて近づく。敵は一体なので三人で袋にしてしまう。

「はあああ、やったか？」

横沢が言う。注意深く、総一郎が確かめると死んでいた。

「行くぞ！時間は有効に使うぞ！」

そして、総一郎は先に行く。

上流に近づいてきた、途中からは山道で警戒をしながらかつナタで道を作りながら、歩いてきたので疲れた。

「クリア！誰もいない！」

総一郎が言う。

「ああ、こつちも大丈夫だ！」

横沢が言う。

上流には結局、何もなかった。

「困っておけ」

総一郎は言う。ピアノ線で周りを囲う。

「よし、行くぞ」
帰路に着く。

帰りはゾンビは現れないかと思っていたら…

（夕方）

先程、ゾンビがいた辺りを通るとさっきのゾンビが這いずり、こちらに襲い掛かってきた。

「やはり、ゾンビは復活するのか・・・」

「そのようわね・・・行きましょ・・・」
辺りがまだ真つ暗でなくてよかった。

こんなのは見えない…。実に厄介だ。
しかし、今はまったく関係のない話だ。

総一郎はそこで閃く。ゾンビの目をまず抉る。今日、一日中、首に巻いていたタオルを近づける。ゾンビはそっちに進む。タオルを移動させてもタオルを指して這いずりまわる。川から水を汲んでタオルを洗い、同じことをすると・・・？
ゾンビは気にしなくなった。

「よし、行くぞ！」

「何がしたかったの？」

「水で俺らの臭いをゾンビたちに対して消せているかの実験さ・・・」
「なるほどな…急ぐぞ！」

横沢が急かす。早く、帰りたいよなあ……。総一郎も同感なのでさっさと進む。

帰ると海堂さんや哲、奈々の父がどこから調達してきたのか…ドラム缶で風呂を沸かしていた。

「おかえり」

奈々と哲が出迎えてくれる。

「おお、お疲れさん…悪いね…」

哲の父が言う。

「お前ら、よくやったな！」

海堂さんが言う。

「はい、異常なしです。使えますよ!？」

「それはよかった。ゾンビなんかいたら…あまり、よくないだろうな？」

「そうですね。…あまり、良くないだろうな」

横沢が言う。

…なんか適当な会話だな。総一郎は聞きながら思う。

その晩は風呂に入ることができた。

女性（美月と奈々）が入るころに横沢と哲と海堂さん、奈々の父がコソコソしているのを見かけた。

4人は覗きをするようだ。4人の会話を陰で聞いていると…。

「総一郎君は誘わなくていいのか？」

海堂さんが言う。

「総一郎はいいですよ、真面目だし、チクられますよ。」

「確かに、こういうのは好きな感じを出すときあるけど…演技だよな。絶対。」

「ああ、中学の時には変態、氏ねとか言ってたし…殺されますよ!」

「そうか、では誘わなくていいな」

奈々の父が言う。

「アンタは絶対ダメだろ！」

他三人は奈々の父にツツコム。

「いやいや、偶には目の保養にな・・・」

奈々の父が言う。

そのまま、怒る気にもなれず、総一郎は去った。

次の朝、四人はなかなか、起きて来ず。起きたと思えば、傷だらけであった・・・。

ザマー!!!!!!

決闘！

「やることねーなあ！」

横沢が部屋の床に転がる。

「ヒーマああだああああひーまああああだあああ
床を転がりまわりながら横沢は言う。

「うるさい」

総一郎が横沢を蹴る。

「ぐわはああ！何をするんだ！」

「いや、うるさいから…」

「このく、馬鹿！」

横沢も蹴ってくる。

総一郎が更にやり返して、横沢は言う。

「表、出るやあああ！」

竹刀を二本もって、外に横沢は出る。

「面白い」

総一郎も出る。

「馬鹿が…」

そんな二人の会話を聞いて、美月は頭痛がするように頭を押さえて言う。

外に二人が出る。外にはKEEP OUTと書かれた黄色いテープが張られていた。横沢はむしり取って、リングを作るために別なところへ張る。…剥がしていいのかよ…
向かい合ったところで

「え？その一本、俺のじゃないの？」
総一郎は言う。

「え？いや、俺は二刀でいくよ」

「はあ？いいからよこせ！」

「放せ！馬鹿！カス！」

「なんだと！？ジャンケンだあ！」

「面白い、私のパグチヨを見せてやる。」

そこでじゃんけん対決を行う。

「神よ、われに力をおおおおお」

横沢は言う。

「神なんていないさ」

「黙れ、じゃあぁんけえんぽおおい！」

横沢はグー。

そして総一郎は……………

チヨキだ。

「ふん、さつさと取って来い。」

「畜生！」

とにかく、竹刀を取ってくる。

「お前、俺に勝ったことあるか？」

「……………」

総一郎は答えない。理由は簡単、勝ったことないから。

「ふふ、こいよー！」

横沢はもう勝った気である。

俺は正眼に構えて、横沢は近づく。

そして、横沢の面を打つ。

横沢、利き手とは逆の竹刀で防ぐ。そして、胴を打ってくる。

総一郎は後ろに避ける。

そして、前に突っ込む。包丁を殺意を持って、人に突き刺すような突きを繰り出す。(どんな例えだよ……)

横沢、軽々と避ける。そこで竹刀を横沢の脇に打つ。しかし、横沢、防ぐ。

総一郎は下がる。

そして、特攻！全体重を掛けた。一撃。横沢、二本で防ぐ。総一郎、横沢の手を蹴る。横沢、竹刀を一本落とす。

バランスが崩れ、横沢の面を打てると思ったら。横沢は持ちこたえ
る。

そして、横沢、下がる。そこに総一郎は突っ込む。途中で一回り、横沢、なにがしたいのかと驚く。

そこで振り返ったところで横に胴を打つ。横沢、叩き落とし。打ってくる。紙一重で胴体を動かして、避ける。

「蹴りは反則だろ！」

横沢は抗議をする。

「お前だって、二本使ってたろ」

「あ？だったらお前も二本使えや」

「できるか！アホ！」

「なんだ……と」

横沢、怒って、突っ込んでくる。総一郎は面への攻撃を防ぐ。

そして、鏢競り合い。

「俺が馬鹿なのは認めよう……」

横沢は力を込めてくる。総一郎も押す。

「しかし、アホは認めん！」

そう言つて、押し返してくる。

総一郎、後退する。

横沢は変なオーラを出して突っ込んでくる。…相当、怒ってるな。

横沢が面を打ってきたところで総一郎は走り出し、すれ違いざまに胴を打つ。

総一郎に手ごたえはあつた。

横沢、倒れる。

…総一郎の勝ちだ。

横沢の手を掴み、立たせる。

「初めてだ…俺が負けたのは…」

「そうだな」

総一郎が未だ嘗てないドヤ顔で言う。

「ふっははははあああ」

高笑い。コレをやると悪魔だとよく言われたものだ。

そして、総一郎はパチンコ屋に入る。

横沢も入ってきて言う。

「ま、パグチヨは勝ったからな」

「パグチヨって何だよ…」

そして、夜

断末魔の奇声があがる。

今、部屋の中にいるものに助けに行ったり、誰のかを確かめるものはない。

そう、あの四人だから…

今日も4人は集まる。…美月や奈々の風呂の1時間前。

『キャツ女装作戦!!!!』

「今日の作戦は!?!」

横沢が海堂に問う。

「フッフ、今日のはいけるぞ!」

一同、ゴクリと生唾を飲み込んで作戦名を聞く。

「今日のは、キャツ女装作戦だあ」

「女装だと!?!」「なんと!?!」「大丈夫か!?!」「イケル、イケル」と下品なやり取りが入る。

「今日、私が行って来たのは大型ショッピングセンター…ジャイコだ」

「ジャイコだと!?!」「なら、女物の服もあるな!」

一同、またザワザワと騒ぐ。

「さっそく、着て貰おうか!?!」

そして…実行。

彼らの格好はカオスだ…

しかし、彼らは最高の作戦だと思っている。

チャポと湯船に浸かる音がすると…彼らはケバイ言葉…ギャル語という代物を使いながら、

「きゃー！！！」

二人のうち若き乙女は叫ぶが彼女たちも馬鹿でない。

ケバイ集団、略して、ケバ充（ケバイ要素、充実している）がドラム缶の前を通ったところで落ちる。

そこは昼間、KEEP OUTとテープが張られていた所だ。（横沢が剥がしたが…）

ケバ充は落とし穴にはまったのだ。

落とし穴の中はメチャクチャ深く、上がることができない。

「はっははあ、なんじゃこりやあああ」

彼らはそこで一晚を過ごした。

そのご、……美月たちが落とし穴の前で何かをしていた。

「うわっ待って…あああああああ！！！！」「奈々、まてええええ」

絶叫が聞こえたが怖くて、総一郎は様子を見ることができなかった。

翌日、落とし穴に行くと…

血祭りに上げられていた。

新しい、仲間―因縁、再び。

「おゝい、大丈夫か？」

総一郎は穴にロープを降ろして言う。

「そ、総一郎か！ たすかったぞおおお」「やったあああ」

「おい、あまり声を上げるな！」

総一郎は注意する。まだ美月たちは眠っているが起きたら総一郎も不味い。

その時、背後から声を掛けられる。

「そういちろう？」

バツと振り返ると美月がニコニコして立っていた。

「何をしているのかしら？」

一筋の汗が額から零れ、そこから、じわじわと汗が体全体に滲み出た。

「いえ、あの…ざま〜！」

穴に向って、叫ぶ。

「お昼まで出しちゃダメよお？」

そう言つて、ロープと手繰り寄せて、総一郎の背中を押して、パチンコ屋に連れ戻す。

スマン！

心の中で謝った。

その日は…男の大半が捕まった為、大変であった。

しかし、仕事を避けるため、総一郎と美月と奈々で車を使い、町に

出る。…この二人を連れ出せば、誰かが救出するだろうと踏んで。ここはアパートだ。服売り場に来ている。

すると複数人の気配がした。走っているようだ。すぐに隠れる。すると隠れた場所の前を二人の女子が過ぎ去ったと思えば、背後からは男が三人、声を上げて、追いかけていった。

「これは…」

「シッ」

奈々が何かを言おうとしたのを美月が制する。

…まだ、誰がいる。

男が一人だ。帯刀をしている。…本物か竹光かは分からない。

息を潜めておく。…その男の堂堂と歩く姿は威厳があり、只者でないように思う。

男は此方を一瞥すると立ち去る。

総一郎は椅子から這い出てきて、男の言ったほうを見る。男は立ち去ったようだ。

注意深く、男の行ったほうを調べる。

男は階段で下がっていった。

注意深く三人で近づく。

「捕まえました！」

「そうか…」

「外の車を知ってそうか？」

「いえ、知らないようです。」

「そうか…入り口を張らせる。鼠一匹、逃がすな。そいつらは事務室につれていけ。好きにしていどうぞ。」

「いやだああ」「助けて！お願い！」
などと叫び、抵抗するが連れ去られる。

一旦、離れる。

「不味いな。ホルスターをしていた。銃が見えた。…全員だ。」
助けを呼ぼうとしてもここは距離があるので無線機は使えない。

その時、一人の男が銃を構えて、売り場に入ってくる。見つからずに済んだが徘徊している調べている。

「手伝ってくれ、コレを取ってきてくれ。」
身のこなしが軽い奈々に頼む。

数分後、上手く、取って来てくれた。

ぬいぐるみを試着用の小部屋に入れて、入るところに液体洗剤を撒く。少し、拭いて、見えないようにする。そして、音を立てて、カーテンを閉める。

男は走ってやってくる。そして、洗剤で足を滑らせて、転ぶ。そこに口を押さえて、ナイフを刺す。ステルススキルを行う。
僅か数秒。抵抗する隙を与えない。

そして、銃を奪う。

トカレフだ…人気だな。

ソレを、美月に弾と一緒に渡す。

さて、危険そうだから、去りましょうかと準備をしてみると見つかる。男は此方に走ってくる。

覆面をしている。銃を此方に向けて言う。

「ここにいたか、無事か？」

ん？んんんん？聞き覚えのある声。

男は覆面を脱ぐ。すると海堂の顔があつた。

「なんで・・・？」

「何でつて…お前がハーレムな状況になつてるらしいから監視しに来たんだよ！」

追いかけていたら、入り口に敵つい奴らが居て、銃を持って、危険そうだったから背後から意識を落として、身包みを剥がして、仲間になりすまして、調べていたらしい。

…この人はホントにいるんなところに潜り込むな…。

「とにかく、出よう。敵はたったの5人。行くぞ！」

その時、先程の帯刀の男が現れる。

刀を抜いて言う。

「久しぶりだな。総一郎…」

誰だ…コイツ？

ドヤ顔で現れたけど総一郎は知らなかった。

「ちよつ！忘れたのか！？伊藤だ！い・と・う」

ああ、夢のほうで銃を奪った奴だ！

「やあ、てめえに構つてる暇をないぜ！」

そして、鉄パイプを構える。

海堂、美月は銃で横から伊藤を狙っている。

「いや、銃とかいいから。コイツ雑魚だし。…弾を無駄にすんな」

二人に注意する。

伊藤は襲い掛かってくる。難なく避ける。そして、手にパイプを当

てて、刀を落とす。

… やっぱ、見ただけでは人の中身は分かんないな。前言撤回。この男に威厳も何もありません。

「来い！」

伊藤は叫ぶ。

すると5人以上の武装集団が現れる。

「う、うみどおさあああん？」

「うむ、数え間違えた！」

おっさん…アンタって人は！

其の時、男たちの中から悲鳴があがる。

男たちは倒れているようだ。

その隙に美月とおっさんは撃つ。

総一郎は伊藤に向かっていく。

鉄パイプを頭に渾身の力を込めて、ぶつける。

其の時、階段に一人立つ男が言った。

「面白そうなこと、やってるじゃねーか！てか…ハーレムかよ！」

横沢だ。めっちゃ悔しそうな顔をしている。

階段の窓には複数の穴が開いていた。

その穴を覗くとむかえのビルに哲がいた。

手を振っている。

いつの間にか横沢の脇には先程の二人の女性が…。

横沢が助けたようだ。

これで、また仲間が増えた。

ありえない！（前書き）

今回は…こんなん、ゾンビ物じゃない！と思うかもしれませんが最後まで是非読んでください！

ありえない！

哲の父が生活の場となったパチンコ店の店内に入ってくる。

総一郎たちは腕を後ろに組んで整列をしていた。

「よし、楽にしろ、座れ。」

哲の父は言う。

総一郎たちは目の前に用意されている。デスクの椅子に座る。

「ゴホンっ！今日は先日になんか新しい仲間になった。佐藤さんと…なんだった？」

「隊長！、長谷川さんです。」

横沢が教える。

本人たちを見ると…ビミョーに怒っていた。

「そうかそうか、分かった。で本題はな…」

「隊長！トイレ、行っていいですか！？」

元気よく手を上げて、哲が言う。

「ダメです」

哲の父は即答。しかし、既に哲はいなかった。

「ゲフン、ゴホン」

わざとらしい咳をする哲の父。

…5分後、哲は帰ってこない。

「時間も無い、話に戻るぞ…え、先日に仲間となった彼女たちのよると…」

哲が走って、店内に入ってくる。

「スイマセン！、遅くなりました！なかなか、手ごわくて…」

「わかったから座りなさい。」

静かに哲の父は言う。二度も話の邪魔をされて、怒っているようだ。だが話を続ける。

「二人によるとこの近くに生存者たちの集落があるらしい」

この発言に皆はザワザワ言い始める。

「静まれ」

哲の父はなんか、鈴を鳴らして言う。

「それでだな…海堂君が潜入してくれたらしい…彼から詳しい話を聞こうか…」

海堂は「はい」と答えて、立ち上がり、話を始める。

「潜入したところ…確かに集落があり、人間が暮らしていました。」

治安もその集落の村長や駐在の人によって、しっかりしていました。

「この治安が良いということに皆は興味を示した。」

この生活が始まって以来、藤崎や伊藤を筆頭とする不良、てかヤーサンなど人間同士での争いもあり、治安など総一郎たちの間を除けば皆無だろう。だからこそ興味を示した。

「ぶつちやけ、潜入してるところを見つかって、捕まりました！」
海堂が言う。

…アンタって…凄いよ！海堂さん…。

「それで、どうだったのよ？」

美月があやとりをしながら言う。

「なんで！？なぜあやとり！？」

「え〜と、そう、捕まって、仲間も安全だからこちらに避難させなさいって開放してくれた。しかも食料としてパンくれたよ！」

「それでそのパンは？」

哲の父が問う。その質問：必要か？

「食った」

奈々が一発殴る。殴られても海堂さんは笑顔だ：恐るべし！

「よし、ならば、全員、装備を整えろ！そこに向うぞ！」

「了解」
ラジヤ

そして、散会して、各自、行動に移る。

… 30分後…

「これで全部か!？」

トラックにはパチンコ台も乗っけられている。だれも突っ込まないので総一郎が言う。

「パチンコ台：いらんやろ！」

辺りには沈黙が流れる…何か悪いことをしたような気分になる。

「あの…いいです…」

総一郎はそのように言うことしかできなかった。

そのまま、パチンコ台を軽トラックに載せて、車は発進する。

パチンコ台のせいで持っていけない食料は置いていくことになった。

そして、目的地の集落に着く。

…感想は集落なんかじゃない！

大きな塀というか城砦のような大きさ。…見たことないけど。

そして、門が開く。中には町が広がっていた。

「おお…」

思わず声を上げてしまう。そこにはもう見るできないと思っ

ていた光景が広がっていた。
若者が会話を楽しみながら歩き、子供たちが公園で遊んでいる。

「おお、来なさったか」

老人が声を掛けてくる。

「村長さん、以前はありがとございました」
海堂さんが頭を下げる。

そして、二人は話す。

話を聞いていると…この人が村長のようだ。

「町を案内しましょう」

村長がそう言つて、歩き始めるのでついていく。

其の時、空に多数の円盤が現れる。

「なんだあれは!？」

横沢が叫ぶ。…どっからどう見てもUFOですね…てか宇宙人とかは夢の中だけじゃないのか!？」

「チツもつ来たか…旅の方よ…此方へ…」

…旅人つてなんだあ!？とにかく、それは置いといて…

村長はそう言つて、村長の家へと案内する。

村長の家の中は軍の司令室のようになっていた。

モニターで町のあちこちを映していた。

「様子はどうか？」

村長はモニターの前で指示を出していた男に聞く。

「村長…よくご無事で!町の中にもゾンビが例の欠陥から進入、治安維持部隊が町のいたるところで交戦中、上空のUFOに動きはありません。ハイパーバードがスクランブル発進しました。」

「すみません、欠陥とは？」

総一郎は聞く。

「ああ、人が十人ぐらい通れる穴が発見されたんだよ……」

「どうしてそんな穴が……」

「設計ミス」

村長がきっぱり言う。

総一郎たちはただ啞然としてその状況を眺めていた。

「無人迎撃ミサイル展開！」

別なデスクに座っている男がキーボードを打ちながら言うとモニター
の端っこの画面で地面が割れて、そこから、大砲のようなものが
出てきて、上空に照準を合わせる。

「よし、発射じゃ！」

村長が言うと、そこから大砲の弾ではなく、電気のようなものが発
射される。

UFOの一部が落ちる。

「フハハハ、見たか！？人間の力を……！」

UFOの反撃も始まる。

「第136部隊、壊滅しました！」

「第349部隊もです……！」

続々と壊滅した報告も出てくる。

「やはり……豆鉄砲では落とせないか……せめて機関銃にしとけばよか
ったわい……」

豆鉄砲って！？総一郎は心の中でツツコム。

「俺らにもできることはありませんか……！」

横沢が言う。

「おお、手伝ってくれるかね……死ぬかもよ？」

村長が問うが。

「いえ、このままでは全滅です。なにか抵抗して死んだほうが良いです!」

総一郎が言う。

「そうか…そう言ってくれと思ったよ!」

村長はそう言う。

「お呼びでしょうか?」

白衣の男が現れる。

「おお、ちょうど引き受けてくれたところじゃ」

「案内します。」

白衣の男が総一郎たちを連れて外に行く。村長とはそこで別れた。

其の時、ゾンビが現れる。

「コレを使い!」

白衣の男に渡されたものは…夏休みによく作るもの。

そう、アレだ……

輪ゴム鉄砲。

「使えるかあ!」

輪ゴム鉄砲を地面に叩きつけるとゾンビが目前に迫ってくる。

美月が輪ゴム鉄砲を拾う。<こんな時にボケるなよ!>心の中で叫ぶが美月は撃つ。

輪ゴムはゾンビの頭に当たる。ゾンビは倒れる。

啞然とその光景を見る総一郎。今日、何度目の驚きか…。

「よし、急ぐぞ。」
白衣の男が急かす。

そして、たどり着いたのは地下へと続くエレベーター…本当に村とか町のレベルじゃないな…。

「君たちに見せたいものはコレだ！」
パツと赤、青、黄色、緑のライトが照らされる。
そこには数機の戦闘機があった。

「コレはな…我がカイザー村の最先端技術で作った。完全な垂直飛行、武器は熱線を使い、マツ八なんだっけ？まあ、よい、すごいだろ？」

「すみません…俺らは飛行機の運転とかムリですよ？」

「ハハハ、心配するな、操縦桿にはゲームのコントローラーを採用してある。…どうじゃ？」

…ゲームの操縦桿って…どんだけテキトーなの…カイザー村。

「よし、やってみようぜ！」

哲の父が言う。…いつもと違う…。

結局、皆が乗り込む分はあるから乗り込む。

「オールグリーン！」

通信で皆がそう言ってるのが聞こえる。

知らないの…俺だけか！？総一郎は本気でそう思ってしまう。それ

はハズレではないが…。

「カイザーバスターズ、発進せよ！」

村長が恐らく自宅から言ってるのだろう。

「了解！」

これには全員が応答する。

事前に説明書を見せてもらったから大体分かるが…感想はフツアのゲームと同じだ。

とにかく、発進する。…おかしいよな…訓練したことのない素人つて…。

そんな考えは関係なく、カタパルトが作動。機体は吹っ飛ばされて空へと進む。

「うおおおおお」

やるっきゃない！とにかく、撃つ。

続々と総一郎たちが来てから落ちていく。

流石にすごいと思うし嬉しい。

今、15体目を倒した。

其の時、空から光の弾が雨のようにやってくる。偶然当たらなかつたが当たってしまった人もいた。

「無事か？奈々！？哲の父さん！？」

二人の機体が落ちていった。

よく見るとパラシュートが飛んでいる。もう一つも発見した。二人とも無事のようにだ。

其の時、攻撃の主である。巨大UFOが現れた。

「アイツか…行くぞ！フォーメーション、スカイストライクだ！」

…教えられてないよ！総一郎はとりあえず攻撃を開始する。周りか

ら文句は言われない。いいのかよ！コレがスカイストライク！？

しかし、その巨大UFOには効果がないように見える。

其の時、背後から光線が発射される。UFOは動かなくなる。とい
うかすごくゆっくりだが落下しているようだ。

「なんだ？」

そちらのほうを見ると巨大UFOに比べると小さいがカイザーバス
ターズの乗る機体と比べると…かなり大きい、戦艦がいた。

見ると…吉田整骨院、田中医院、吉田歯科…と広告が貼り付けてあ
る戦艦が来た。…なんか凄い。

「あ、あれは…伝説の！？」

村長が驚いている。

「うむ、村長久しぶりだな。」

「ダーク中島号だと！？」

ダーク中島号の横を飛ぶ。装備が凄い、機関銃のようなものや先程
の主砲…他にも装備はあるかもしれない。

其の時、コックピットが見えた。複数人で動かしているようだ。…

見覚えのある顔が居る。夢の中で出会った自衛隊員…消息不明の正
真正銘、中島の顔だ。

向こうの通信と繋がって向こうの会話が筒抜けになる。

「お頭…突撃ですね…わかります」

「いや、お頭じゃない、リーダーと呼べ！」

「へい、親方様！！」

…カオスだ！其の時、村長から通信が入る。

「雑魚は片付いたようじゃな」

それを聞いて、周りを見るとUFOが巨大なのを除いて消えていた。
巨大UFOは町へと落ちていく。

「不味い！アレの落下を阻止してくれ！」
村長が言う。

「アレが落下すると町のビデオレンタル店が消えてしまう！」
オイ！なんつー理由だ！

しかし、皆はUFOを空中で破壊しようとして行動をする。
総一郎もそれにしたがって行動する。

其の時、空からの攻撃で皆、撃墜される。総一郎は一番最初にパラシュートで地面にたどり着いたが足をくじってしまった、空からは最後に落とされた横沢の機体が落ちてくる。

総一郎は頭を手で反射的に覆う。

其の時、美月が走ってきて、総一郎を我が身を張って守ろうと覆いかぶさる。

「みずきいいい！」

総一郎は叫ぶ。

起き上がるとそこはいつものパチンコ店だった。

美月が総一郎を踏ん付けて、起こそうとしていた。

「何が…みずきいいいよ。うるさい！起きちゃったじゃない。」

…どうやら夢だったようだ。

結局、合っていたのは新しく来た人の名前が佐藤さんと長谷川さんというだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2821w/>

ゾンビパニック！

2012年1月6日10時48分発行